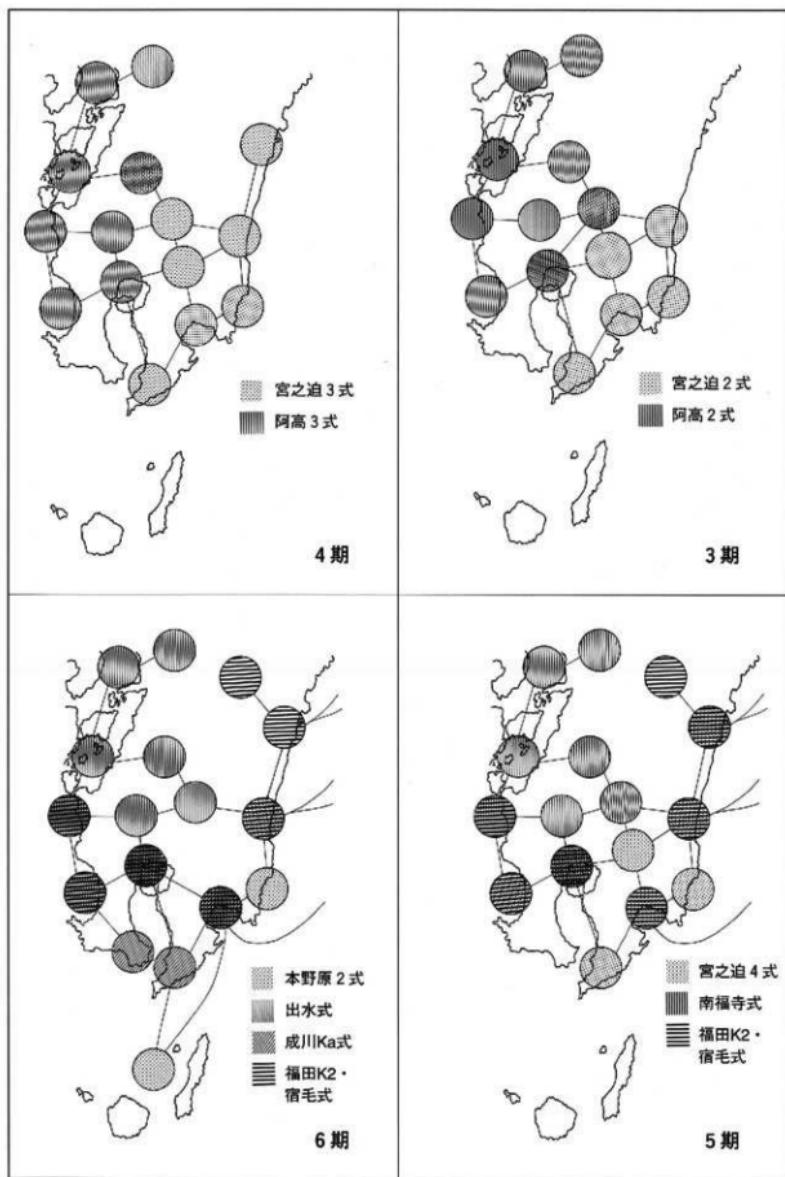
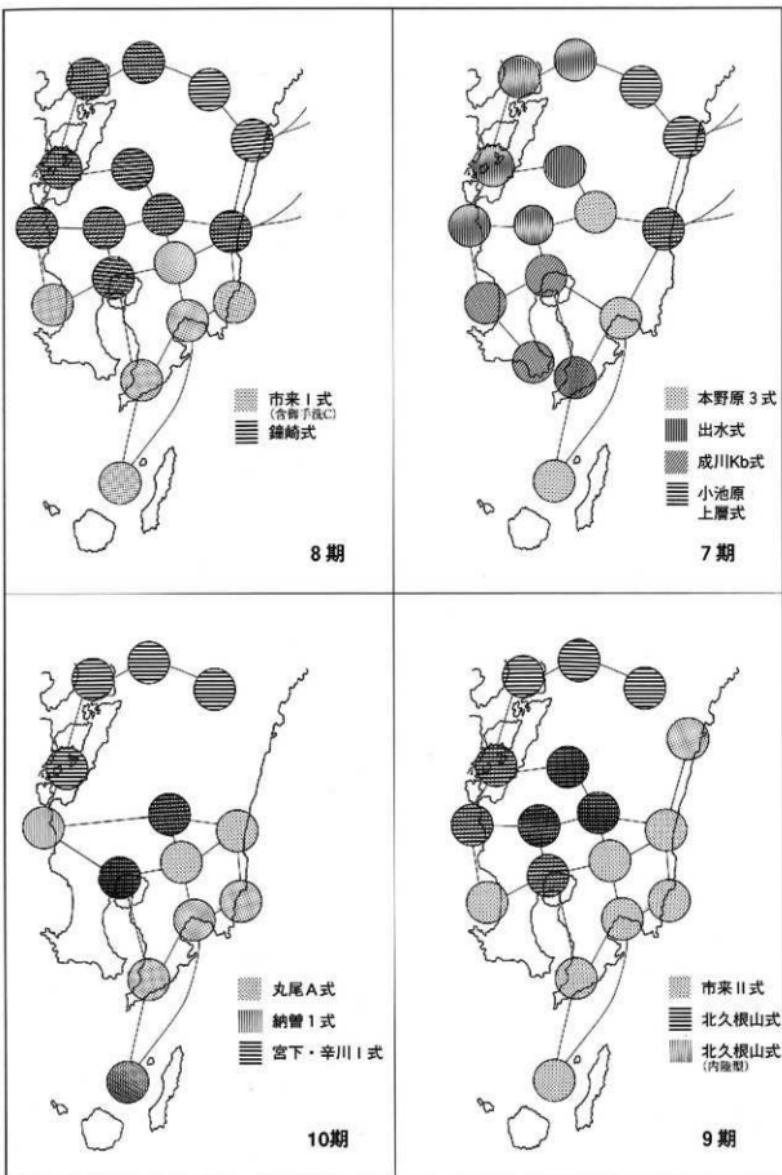


第17表 土器出土狀況表（時期別・1）

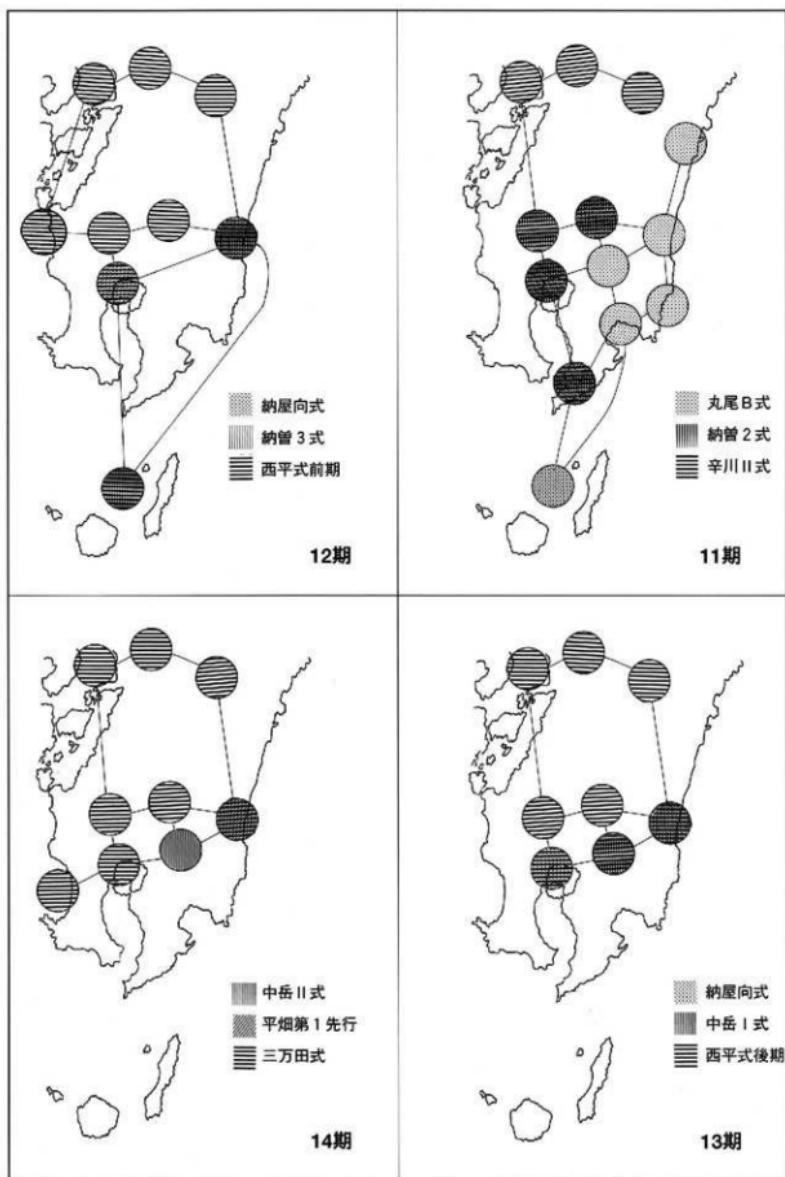
第18表 土器出土状況表（時期別・2）



第28図 南九州土器変遷図 (1)



第29図 南九州土器変遷図（2）



第30図 南九州土器変遷図（3）

第V章 出土土器

1・縄文早期の土器（第31図）

(1763, 2059)は前平式である。口縁直下に工具による刺突を行い、胴部以下は横位の深い柔痕を行う。(2060~2080)は加栗山式である。外面の調整は斜位の条痕であり、その上に縦位の貝殻腹縁刺突を行う。中には(2061, 2066~2067, 2070, 2077)のように叉状の工具を刺突したものもある。なお、貝殻腹縁刺突は(2062・2063)を除くと、密に行われる。(2081)は、押引きを横位に施す事から、古田式に含まれる。(2082)は底部である。斜位の条痕が見られる事から、加栗山~吉田式相当であろう。(2083)は、既存の型式に当てはめると前平式。若しくは別府原I式に相当しよう。(2084)は、山形押焼土器の胴部片である。施文方向は横位であるため、通常は早水台式以前となろうが、南九州では口縁部~頸部を縦位に、胴部を横位に施す事例も多く確認されており、山形のモチーフも早水台式以降と思われることから、下皆生B段階とする。(2085)は、桑ノ丸式である。(2086~2087)は、縄文を地文とし、刻目を有する突蒂文が貼り付けられる事から、妙見式である。(1404, 2088)も妙見式と思われるが、桑ノ丸、下剥峯式併行の縄文系土器にも類似するため、早期中葉~後葉と幅を持たせたい。(754)は寒ノ神式である。

縄文早期の土器の大半は加栗山式である。出土遺物の殆どは、アカホヤ火山灰層上位の後期包含層や耕作土であるほか、堅穴住居内など遺構に伴うものも多かった。これらは、縄文後期の土木工事や現代の開墾の際に、縄文早期ローム層が削平されたために移動したと考えられる。

加栗山式は、早期ローム層まで掘ったトレンチからも確認されていることから、アカホヤ火山灰層下層には多くの遺物が包含していると考えられる。なお、(2064, 2066, 2068~2071)の複状突起は、ナデによって作られている。黒川忠広氏は、宮崎の複状突起は作りが粗いと指摘する(南九州縄文研究会 2003)。その傾向は、本遺跡からも確認される。

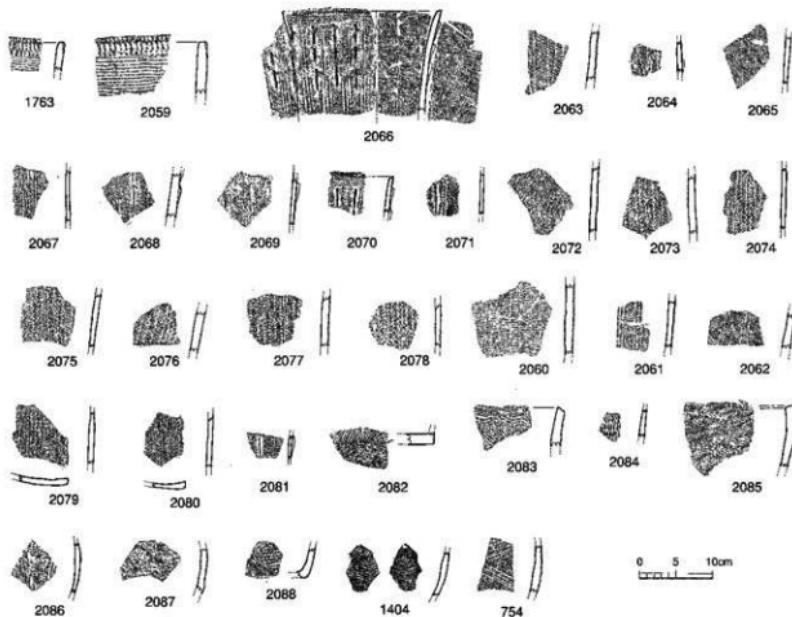
2・縄文前~中期中葉の上器（第32図）

(2089)は縄文前期の曾畠式の胴部である。小片であるため時期は不明である。(663, 1956, 1962, 2091~2097)は、縄文前末期の深浦式、若しくは尾田式である。(1962)は突蒂が確認できる事から尾田式と分かるものの、それ以外は小片であるため、どちらに該当するかは定かでない。文様は、(1962, 2092~2094)は押引文が細かく連点状であるのに対し、(2091, 2096)はやや粗く連点状である。前者は中九州から鹿児島北部、宮崎内陸部に多く、後者は南九州に多いとされている(東畑 1993)。(663, 2095)にはV字押引(相交弧文)が行われており、この一群でも古く位置付けられる(池田 1998)。(272, 661, 2090)は西川津式である。口縁が内湾し、胴部は大きく膨らむと予想される。器面には、先の尖った工具による深い押引と刻目突蒂が貼付けられる。これらの特徴はI式に相当しよう(高橋 2004)。(270, 2098, 2099)は、貼付けられた突蒂の形状とモチーフから、上水流Ⅲ類土器に相当しよう(矢野 2005)。(774)は、外面の全面に留まらず、内面上部にまで縄文が施す。瀬戸内地方の縄文中期前半を代表する船元式である。(411, 2100)は春日式である。いずれも轟木ヶ迫段階以降に位置付けられるが、(411)の押引は粗大であり、(2100)より後出と思われる。(1405)は、型式名は不明であるものの、刺突から尾田式との関連性が想起されたため、ここに掲載した。

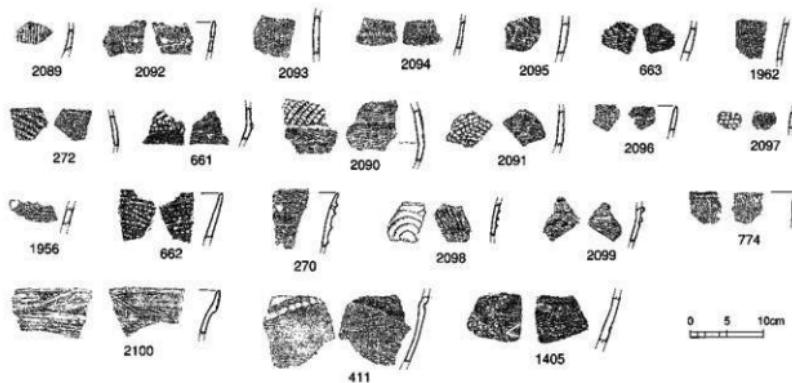
前~中期中葉の土器は、アカホヤ火山灰層上位や堅穴住居の覆土上層より出土することが多かった。全量が少ないと認め、様相は不明な部分が多いが、深浦式、尾田式の古相は出土量が比較的多いため、一時的にしろ集落が営まれたと推測される。また、春日式後半期は集落の出現期と考えられるが、出土量に大きな変化は見られない。

3・宮之追式土器（第33・34図）

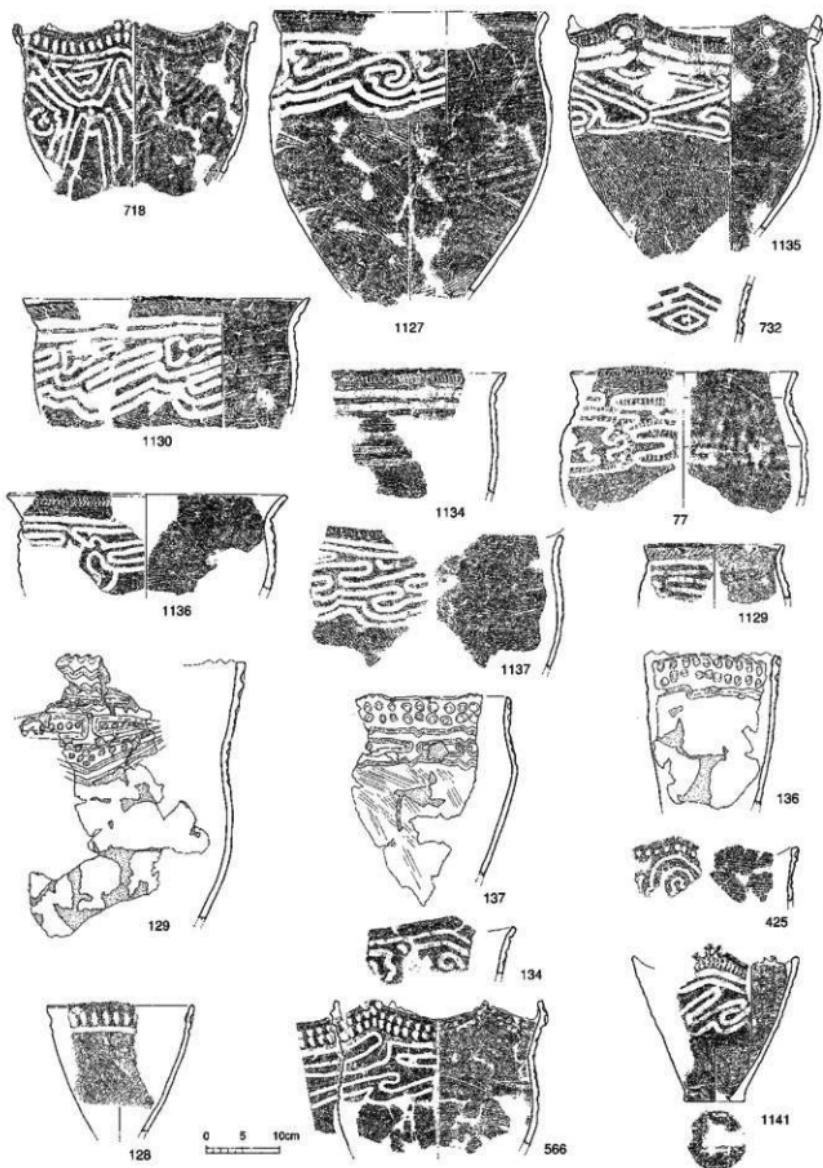
(129, 136~137, 425, 718, 732, 2104~2105)は、文様の太さやモチーフから、宮之追I式に相当する。(718)は、文様帯が胴部下半に達する。(732)は菱形のモチーフが描出される。(129)の文様は独特であり、位置付けは困難であったが、同一個体の観察から、波頂部のみざなみ状となる波状口縁であったことが判明したため、河高I式との関連性を重視してI式に含めた。(136・137)も、(129)と同じ遺構からの出土であるうえ、口縁部形態が類似するため同時期と



第31図 縄文早期の土器



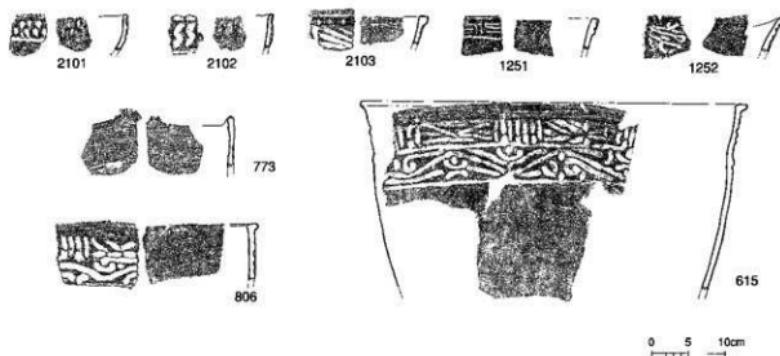
第32図 縄文前～中期中葉の土器



第33図 宮之迫式土器 (1)



第34図 宮之迫式土器（2）



第35図 阿高式土器及び後続型式

した。

(128, 134, 1127, 1129・1130, 1134～1137, 2120) は宮之追2式に相当する。(1127) はA群、(1130) はB群の典型例であり、どちらも志布志町中原遺跡に類似資料が存在する。(1135) は、6単位の波状口縁を呈しており、波頂部直下には空孔が行われる。沈線は、頸部の2本は太い範状の工具で施文されるが、それ以外は細い。また、(1136) のように沈線後ナデによって凹線化させるものもあれば、(1137) のようにナデの後に沈線を行うものもある。

(77, 182, 395, 566, 1138, 1141, 2121・2122, 2125) は宮之追3式に相当する。いずれも沈線化が進み、内面まで影響する沈線は陰を許め、絆線化を遂げる。また、側部文様帯も上方に押し上げられる。なお、肩收穫文系土器の流入により、(77, 395, 2125) のように、貝殻腹縫綫突による擬似繩文を行なうものが出現する。(395) の口縁は5単位の波状である。(182) は、沈線化が更に進んだ姿と言える。

(418, 665, 737, 1145～1149, 2126～2130, 2132～2134) は宮之追4式に相当する。絆線化は更に進み、胸部文様帯の幅も、更に上方に押し上げられる。擬似繩文は普及が進み、文様は、簡略化された渦巻文が多くなる。(2134) は、刺突文の下位に凹線気味の沈線を施すが、内面には刻目突番が貼付けられる。これは、福田K2式の耳状突起の退化形態と考えられる。

宮之追式は、1式は堅穴住居から、2式は南東部土器廃棄場から、多くが良好な状態で出土する一方、3・4式は南東部土器廃棄場に加え、堅穴住居や掘立柱建物から、小破片として出土する傾向が認められた。

4・阿高式土器及び後続型式（第35図）

(773) は並木式である。波頂部に平坦面を設けており、胸部には叉状工具による押引が施文される。

(615, 806, 2103) は阿高式である。(615) は、口唇部に微かな刻目を行う蒲鉾状の肥厚帯を持ち、その下位に2段の文様帯を持つ。上位文様帯は綴位短沈線と放射状の沈線が交互に施文され、下位文様帯は阿高2, 3式において通常見られる文様に近い。上位文様帯における放射状の沈線と、下位文様帯において施文部を三角に区画する沈線の断面はV字状を呈す一方、その他は通常の円錐である。(806) は、口唇部の肥厚帯や2段の文様帯や施文モチーフは全く同じであるが、文様はやや粗雑であり、断面がV字状を呈する沈線も認められない。これら阿高式は、半な分布域である熊本県内に類例は認められないが、胎土や色調は宮之追式とは明らかに異なることから、他地域から持ち込まれたと考えられる。

(2101・2102) は南福寺式である。文様帯は口縁直下に限られており、(2101) は四点後にナデを、(2102) はS字状の

凹線を描く。

(1251) は出水式である。(1252) は、口縁肥厚帯は特に認められないが、文様から出水式と判断した。

阿高系上器は焼成や胎土等、宮之迫式とは明らかに異なるため、本遺跡で製作されたのではなく、遠方から持ち込んだと考えられる。ただ、出土量は少ないため、情報交流は活発ではなかったようである。

5・本野原式土器（第36～38図）

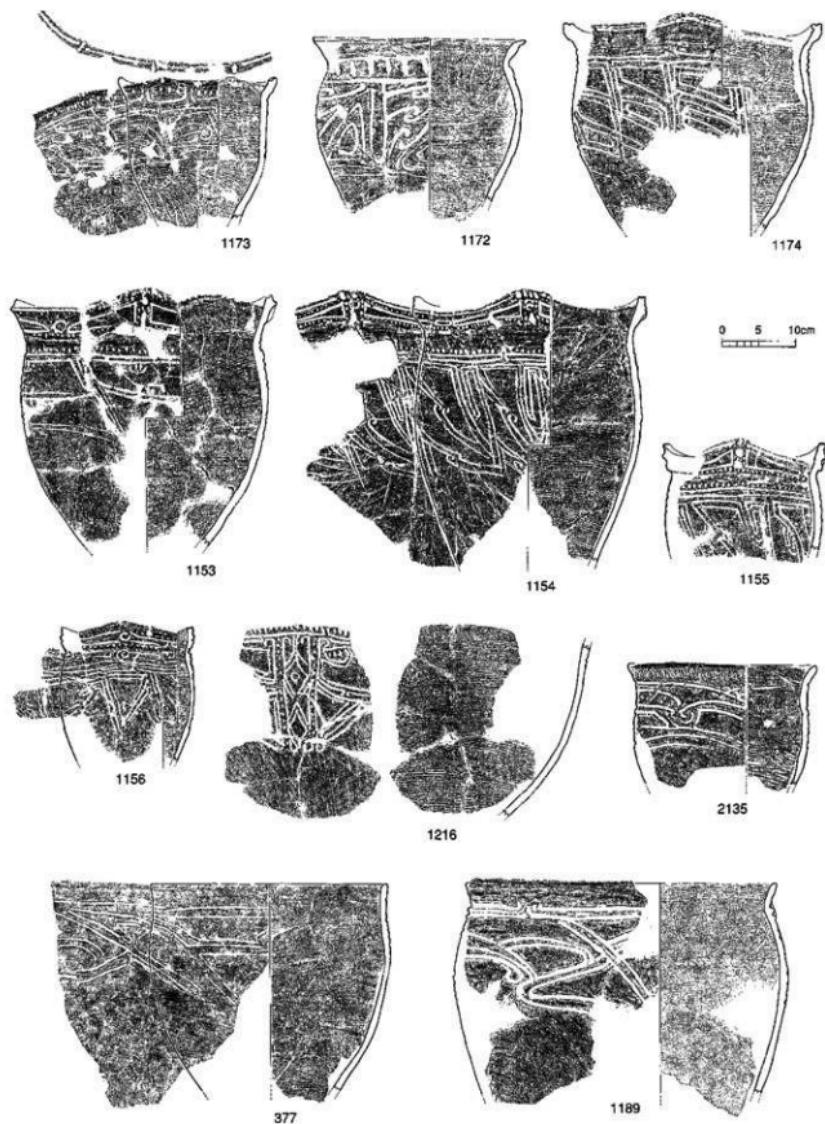
第36図は1式である。(1173) は6単位の波状口縁であり、条痕を地文とし、沈線による平行四辺形の区画の中に、巻手状のモチーフが描かれる。(1172) は口縁部が外反し、脇部が大きく張る器形を呈しており、頸部は、沈線後凹点が追加される。胴部は縦位に区画された後、対角線に区切られ、入組文と三角形の施文が描かれる。下端線が認められるため典型的1式とは言い難いが、口縁直下の沈線後の刺突などに、宮之迫式の影響が見られるため、ここに含めた。(1174) は縦位の区画線を、斜行沈線が連結する。沈線は常に2～4本を1単位とする。(1153) は、口縁に肥厚帯を持ち、波頂部に、周囲に刺突を伴う凹点を行なうほか、波底部にも円文を有する。脇部は波底部から斜位に3～4本の沈線が伸び、平行沈線がそれを連結する。平行沈線の中間地点には、豚鼻状のモチーフが追加される。(1154・1155) は、同じく円文を有し、等間隔で縦位の区画が行われる点で(1153, 1174) と同じであるが、区画線を連結する斜行沈線が入組文を形成する。(1156) は、区画線が明確に存在せず、「人」字状のモチーフが横位に連続する。(1216) は、幅広に強調された区画線内に菱形のモチーフが描かれる。区画線間は、入組文や豚鼻状のモチーフによって装飾された斜位の沈線により連結される。(2135) は口縁直下に宮之迫式に多い貝殻腹縁刺突が行われ、脇部には大きな入組文が描かれる。(377, 1189) は、斜位の区画を平行沈線が連結する。下端線がないため1式に含めた。

第37図は2式である。(1158, 1175, 1225～1227, 48集P110中) は、区画線が縦位に行われる一群である。区画線間の充填は、(1227) が入組文若しくは平行沈線、(1225) が巻手文、(1226) が僅かに入組状となる平行沈線、(1175) が波状に垂下する平行沈線、(48集P111中) が不規則な沈線、(1158) が短沈線による入組文と、バリエーションが多く、1式や3式ほど入組文は卓越しない。(1164, 1166, 1176・1177, 1179, 2145, 48集P111中) は、区画線が斜行する一群である。(1164) の区画内は入組文が斜行しており、志布志町中原遺跡で多く認められる一群に類似する。(1166, 1176, 1179) も斜行する入組文によって充填されており、比較的ボビュラーな文様構成であった事が窺える。(2145) のシンプルな文様は、成川Ku式の影響であろうか。(1177) は、入組文が巻手文に置き換えられる。(946, 1181・1182) は、区画線が入組化し、渦巻状の文様を形成する一群である。渦巻状の文様は、(1182) は大きいが、(1181) では小ぶりである。(1185) は、1式の(2135) の後継であろう。(1178) の区画線は、文様帶を充填する沈線に吸収されつつあり、2式でも最終末期に質される。

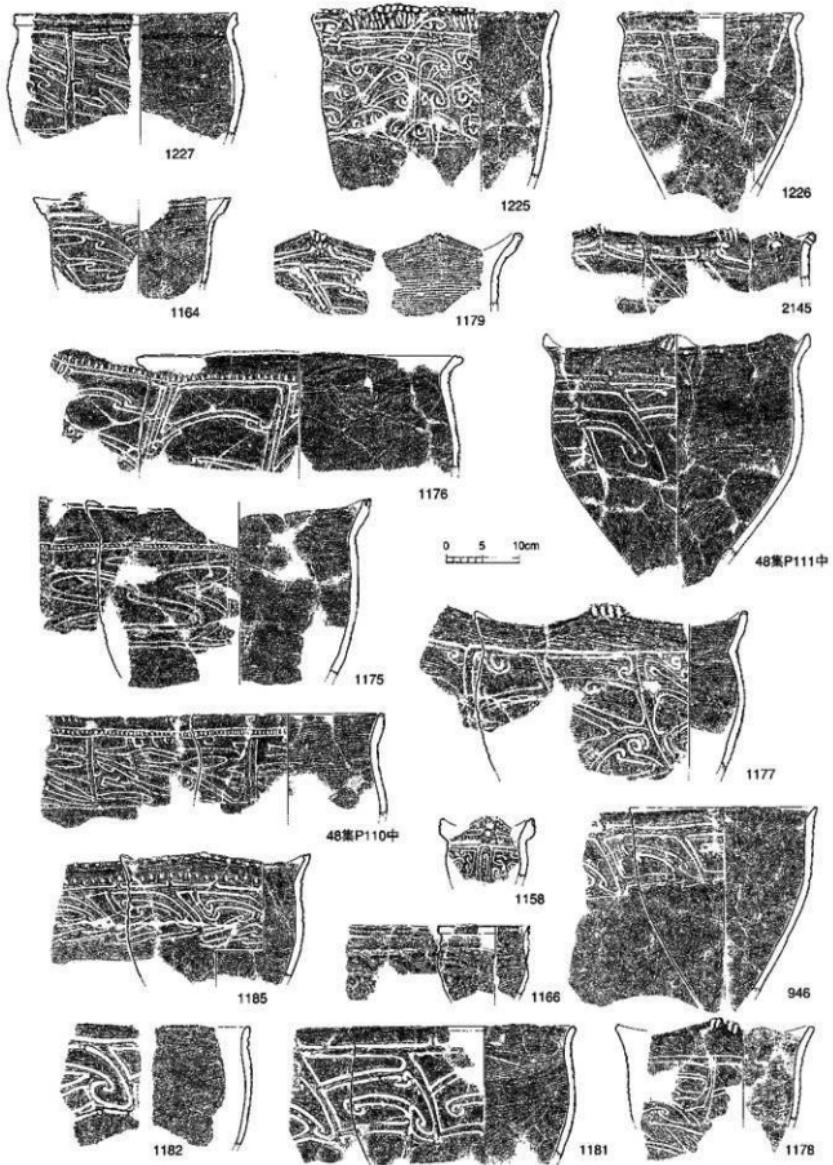
第38図の上二段は3式である。(1186, 1188, 1190, 1198) は、区画線の残片が認められる一群であり、3式でも古手に位置付けられる。(1190) は、区画線らしき斜行沈線が行われるが、その間は平行沈線が一組伸びるのみである。(1186) は、斜行する平行沈線が僅かに認められるが、周りの入組文には吸収されている。(1198) も斜行する平行沈線が、時に鋸歯状になりながら区画するものの、沈線の充填は全く認められない。(1187, 1191, 1196, 1203～1205) は、区画線を完全に失った一群である。(1191) は、平行沈線が入組文を形成しながら斜位に下降する。(1187, 1204) は、人組気味の平行沈線が不規則に描かれる。(1196) は、数本単位の沈線が不規則に離合集散する。

第38図の下半は4式である。(1157, 1168～1170) は、縁帶気味の口縁部を持つ一群である。(1157) の文様構成は横スクロールであり、短沈線による入組文の連続や、浅川牧タイプの影響か、刺突により充填される平行沈線が認められる。(1170) は、細い沈線により横位の平行沈線が連続的に描かれる。(1168) は、波頂部に方形区画を2つ持つものである。(1169) は、脇部文様帯の圧縮が一層進んでおり、縁帶をもつものとしては最終形態に位置づけられる。縁帶気味の口縁部は、断面三角形状を呈する。(1202, 1207, 48集P110下) は脇部文様が圧縮された、縁帶を伴わない一群である。(1202) は、狭い脇部文様帯に細かな入組文が多く描かれる。(1207, 48集P110下) の脇部も沈線が不規則に走っており、末期的状況が窺える。

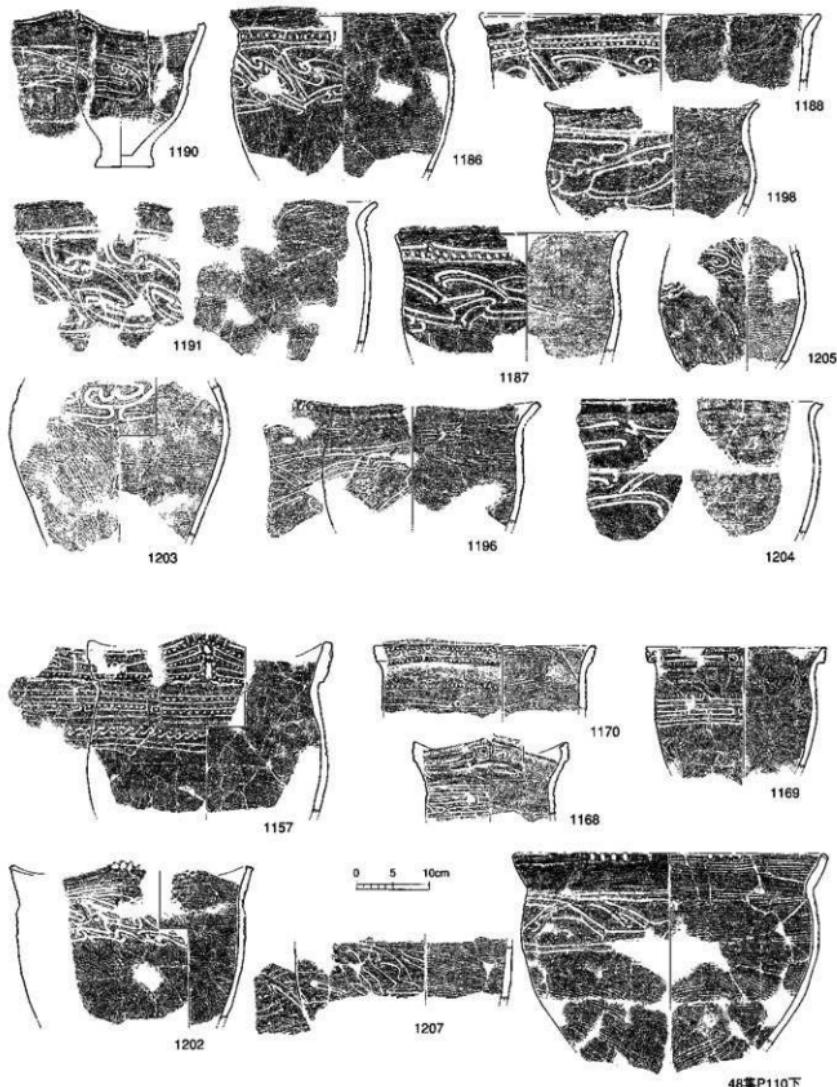
本野原遺跡は、これまでの「指宿式」の分布図でも北東部に位置するが、「縁帶気味の指宿式」の主体的分布域である



第36図 本野原式土器 (1)



第37図 本野原式土器 (2)



第38図 本野原式土器 (3)

宮崎平野のなかでは、最も多くの量が出土した。出土状況としては、南東部土器廃棄場から良好な状態で多く出土するほか、竪穴住居からも、小片ながら主体的に確認された。

6・本野原式土器と同時期の土器（第39・40図）

・成川式及び類似資料（1220, 1222, 1243, 2153）

（1220, 1222）は、方形区画内を沈線で充填することから、成川Ka式の範疇に含める事ができる。（1243）の胴部文様も、上下に膨張した靴形文に見える事から、これも成川Ka式の影響を受けた土器と考えられる。（2153）は、口縁部は本野原式であるが、胴部に描かれたモチーフは靴形文である。

・D群及び類似資料（1218, 1231, 1234～1238, 1245, 1246, 2144）

（1218）は、その文様構成から、D群出現期と考えられる。（1236）は、波頂部から平行沈線が斜行し、菱形のモチーフが連続するものであり、成川遺跡から類似資料が確認されている¹¹⁾。（1231）は、（1236）の菱形モチーフが解体したものであり、（1237）は、解体が進んだものである。（1234）は、入組文を付加したものである。（1235, 1238, 1245, 2144）は、それを更に簡略化したものである。（1246）は、細い平行沈線がクランク状に曲がりながら文様を形成しており、浅川牧タイプに含まれる。

・橋幸礼川タイプ及び類似資料（591, 1214, 1215, 1217）

（591）は、「人」字状のモチーフを描くものであり、焼成、施文工具が全く異なることから、外部から搬入したと考えられる。（1215）は、「人」字状のモチーフが不規則に描かれており、典型例とは隔たるが、橋幸礼川タイプの影響を受けたと考えられる。（1214, 1217）は、渦巻文の存在からここに含めた。（1217）は、浅川牧遺跡に類似がみられる。

・その他の上器（第40図）

上三段は、本野原式と同時期ながら、いずれにも属さない一群である。（950）は、口唇部に連続刺突を行い、沈線により菱形のモチーフを描出す。（1209, 1210, 1212, 1247）は、本野原式と共に伴する事の多い小型の上器である。（1219, 1722）にみられる沈線両端の刺突は、右岩ヶ迫遺跡や丸野第2遺跡など宮崎平野に多く、本野原遺跡出土資料との密接な関係が考えられる。（1192）は、沈線が一定間隔で弧を描きながら斜行する。

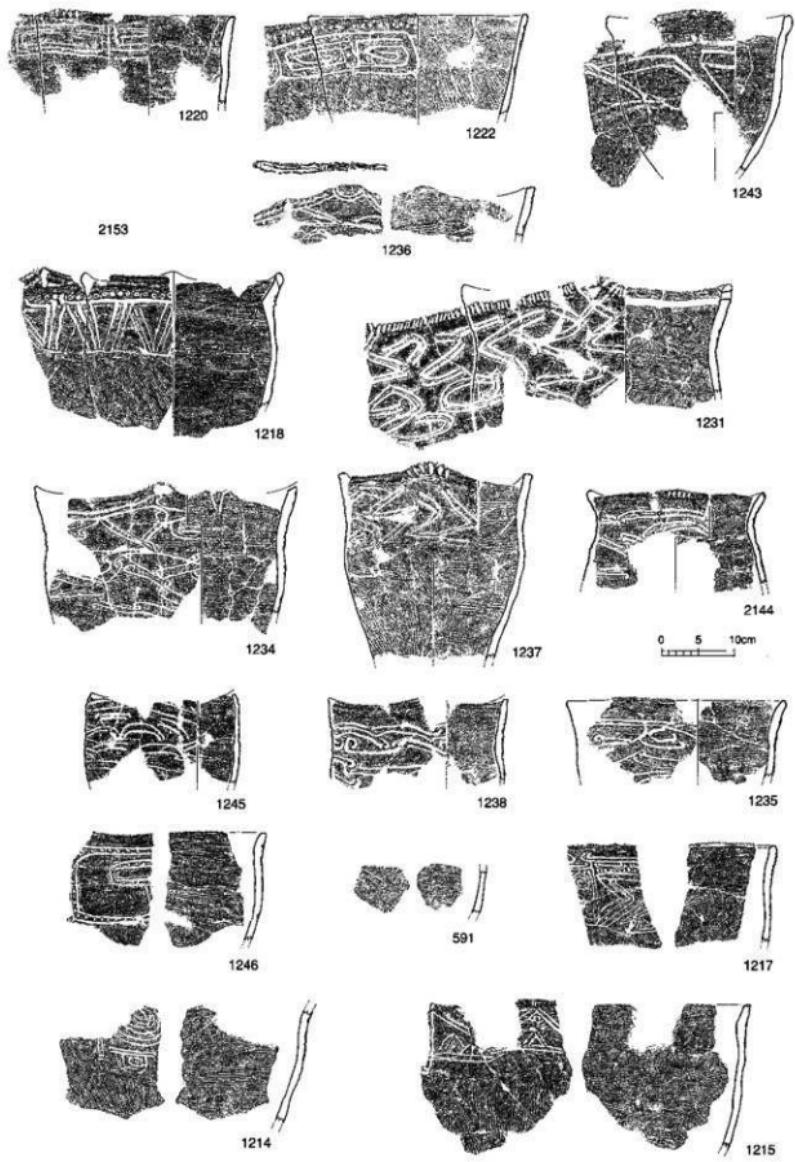
下半は、本野原式と考えられるものの、典型例と異なる、若しくは小片のため断定を避けた一群である。（1297）の口縁部に見られる連続入組文は、本野原式でも後出である。（1229）は、平行沈線が横走るのみである。（263, 1206）は、網文、若しくは擬似網文が行われる一群である。（1159, 1161～1162, 1165, 1199, 1242, 1250, 2151）は小片である。このうち、（1159, 1162）は縁帶気味の口縁部である。胴部の文様構成は不明であるものの、本野原式である可能性が高い。（1165, 1199）は、縁帶は呈さないものの、口唇部の沈線から、本野原式の古手と考えられる。（2151）の文様構成は本野原式古手に多いが、口唇部の沈線がないため、やや後出と考えられる。（48集P111下）の口縁部は本野原式の典型例に近いが、胴部文様の違いが大きすぎるため、本野原式には含めなかった。（1242）も、類似したモチーフであったと考えられる。（1250）は、口縁部肥厚帯にX字状の貼付文が加わる。波頂部下位の短沈線は、区画文の誇張であろうか。（1161）は、肥厚帯や胴部文様から、本野原式に含まれる可能性が高い。

7・内面施文土器（第41図上半）

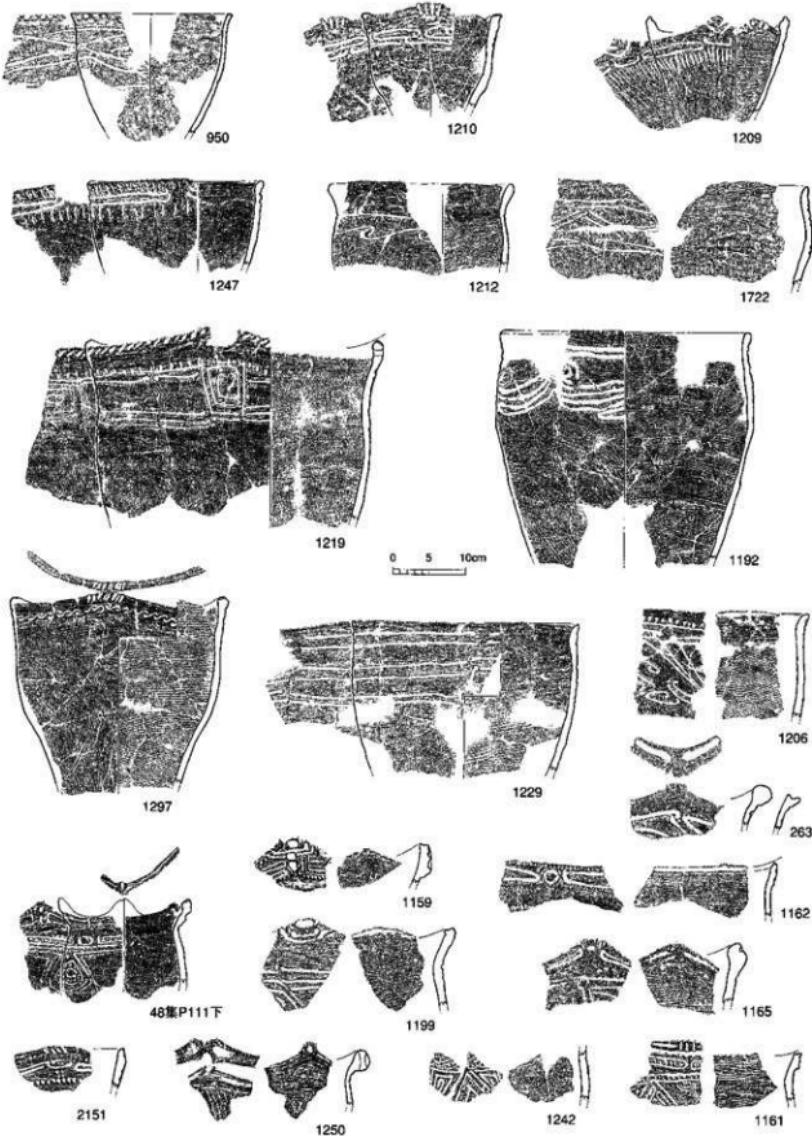
（1303）は、口縁部の外反が小さく、口縁の内面直下に2本の沈線が横位に施文されるのみであり、他の内面施文土器とは趣が異なる。（1089, 1338～1339, 2163）は、施文部と内面の境界に稜を有する。（2163, 48集P111上）は単位部、若しくは波頂部と見られる。（48集P111上）は、刺突を伴う円文が縦位に二列行われる。なお、（1340, 48集P111上）は、内面に留まらず、外側の口縁部直下にも施文が行われる。（2034）に至っては、外側胴部にも平行沈線と、刺突が施文される。

8・市来式土器（第41下半～43図）

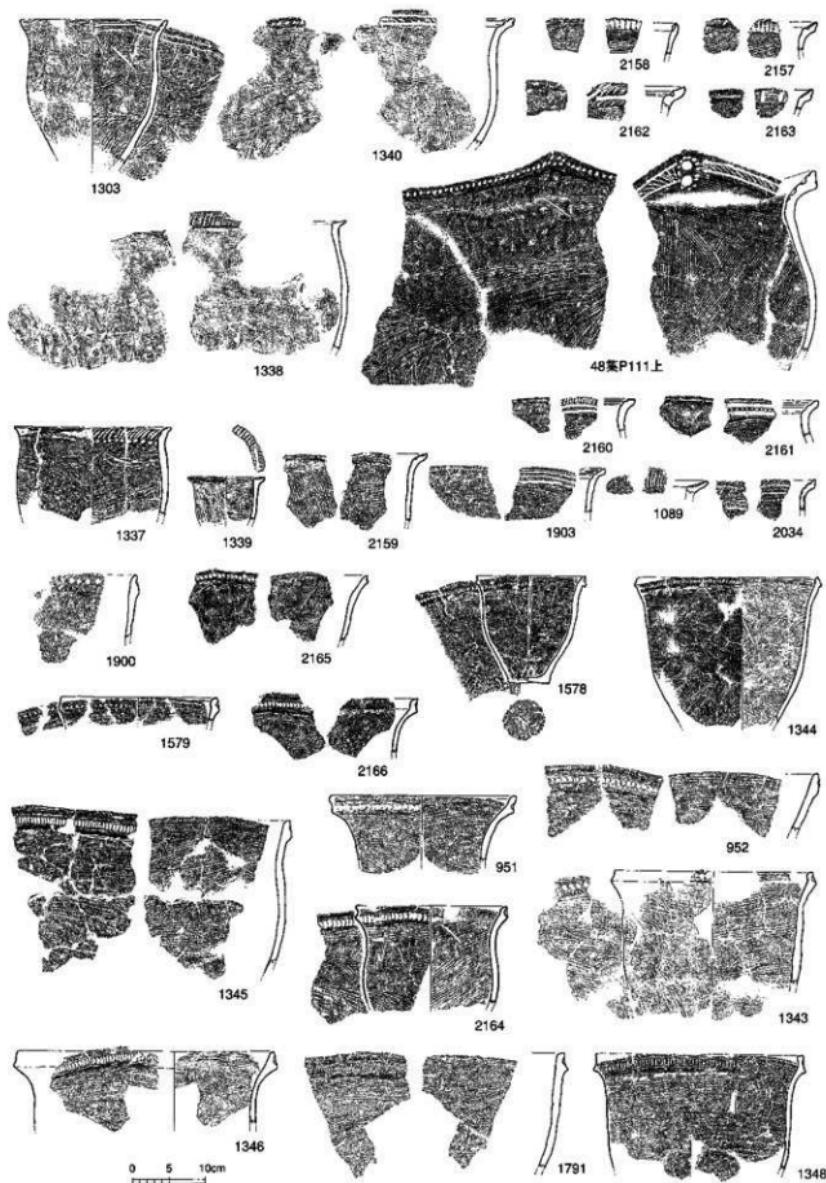
第41図下半は、口縁部文様帯が狭く、施文も一列の工具または貝殻腹縁の刺突が行われた土器である。本書では、このような土器を市来I式と一括した。（1346, 1578, 1900, 2165）は、口縁断面が三角形状を呈するものである。施文具は



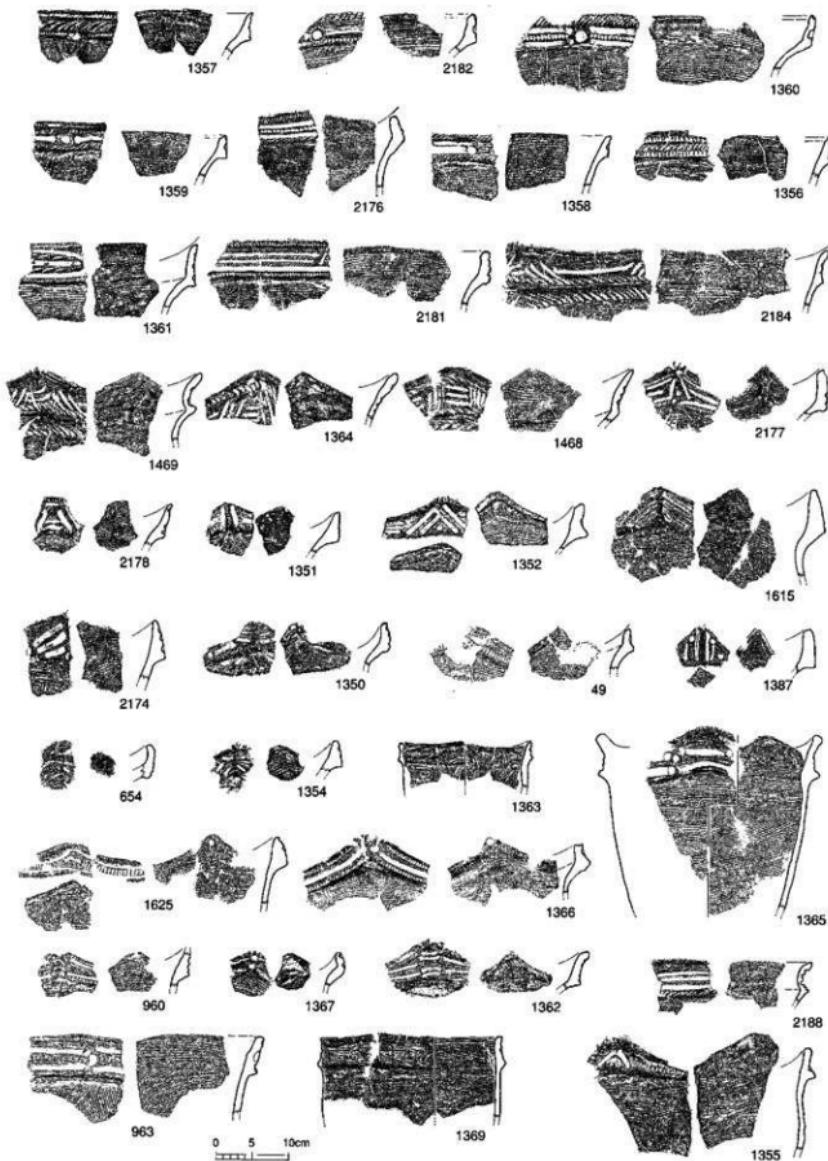
第39図 本野原式土器と同時期の土器 (1)



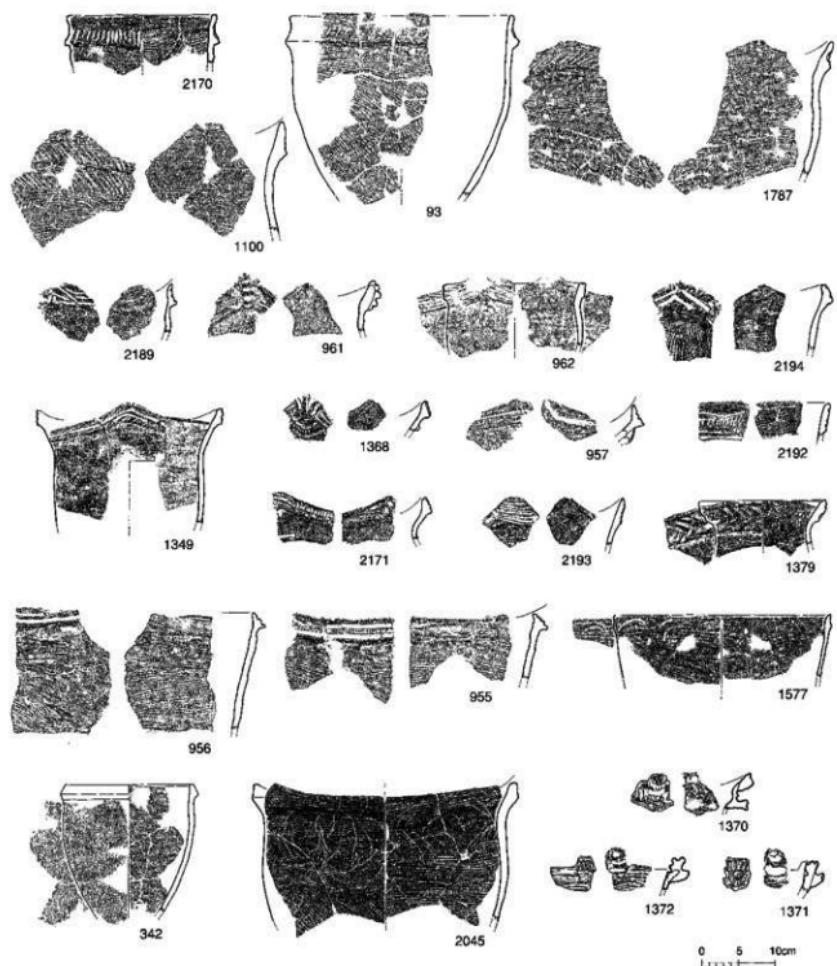
第40図 本野原式土器と同時期の土器 (2)



第41図 内面施文土器・市来式土器(1)



第42図 市来式土器 (2)



第43図 市来式土器 (3)

全て棒状工具であり、(1579, 1900, 2165) は、器面調整もナデを主体とする。(951・952, 1343~1345, 1348, 1791, 2164, 2166) は、口縁部文様帯の幅がもっと広くなり、断面が三角形状を呈さず、施文具も貝殻腹縁刺突が加わる。

(1356~1360, 2176, 2182) は、主に貝殻腹縁刺突を行なうものである。単位部に見られる大ぶりの刺突は、まるで本野原式の円文のようであり、沈線は横位に巡るものである。(1364, 1468~1469, 2184) は、深い沈線を行った後にナデで凹線状にしたものである。(1615, 2174) は、断面方形の浅い沈線を施文する。(1362, 1365) は、沈線の始点、終点に刺突を行う。(2188) の色調はいわゆる“指宿焼成色”であり、胎土に温泉変質粘土を用いたと考えられる(黒川 2005)。この色調は、補造中にも認められる¹⁾。(1100) は、貝殻腹縁刺突は丸尾 A 式に類似するが、口縁の断面がくの字状を呈さないことから、市来式に含めた。(961・962, 2189) は、器面をナデによって仕上げており、鋭利な沈線で施文される。鹿児島湾以西に多い一群である。(1349, 2194) は、口縁部形態から市来式に含めたもの、口縁部の施文手法や調整は、通常の市来式とは異なる。(957, 1368) は、頸部の波頭部下位に刻目突帯が行われる。(2192) は、口縁部の肥厚帯が一般的な市来式とは異なる。(2193) は、肥厚帯すら存在しない。(1379) は、貝殻腹縁刺突が羽状に施文される。丸野第2遺跡から類例が確認されている。(955・956) は、口縁部断面が三角形を呈するもので、かつて松山式と呼ばれた一群である。(342, 2045) は無文であるが市来式の範疇に含まれる。(342) の外面調整は縦位のナデである。(1370~1372) は、市来Ⅲ式設定以前は草野式とされていた一群である。把手状の突起がなければ、(1370) は市来式であるが、(1371・1372) は丸尾式である。

市来式は、南東部土器墓場や窪地遺構、環状土坑群からの出土が目立った。一方、堅穴住居からの出土例は少量であり、本野原式との間に違いを見出すことができる。

9・丸尾式土器（第44図）

上二段は A 式である。(966) の文様パターンは市来式中の(1364, 1468~1469, 2184)と同じだが、細線化と「く」の字彫曲化が異なる。(967) は、沈線を消失した姿であり、(1095~1096, 1373) は、それが薄手になったものである。(1096) は、口縁部の彫曲が A 式の他のものより弱い。(997) は、口縁の彫曲は緩やかであり、内湾に近い状態である。外面は波状の沈線が施文される。

下半は B 式である。口縁部と頸部の境界は変化に乏しく、若干外反する程度である。貝殻腹縁刺突も省略され、2 列行われるのは(969)のみである。(1072) は口縁部直下の内面に貝殻腹縁刺突と浅い沈線を巡らせる。(2204) は、頸部で内湾し、口縁端部で僅かに外反する器形を呈する。(2196) は、丸尾 B 式の器形を呈するが、頸部と胴部の境界付近に沈線を行なう。

丸尾式は、堅穴住居から一定量確認された。このほか、窪地遺構や道路状遺構からの出土も目立った。

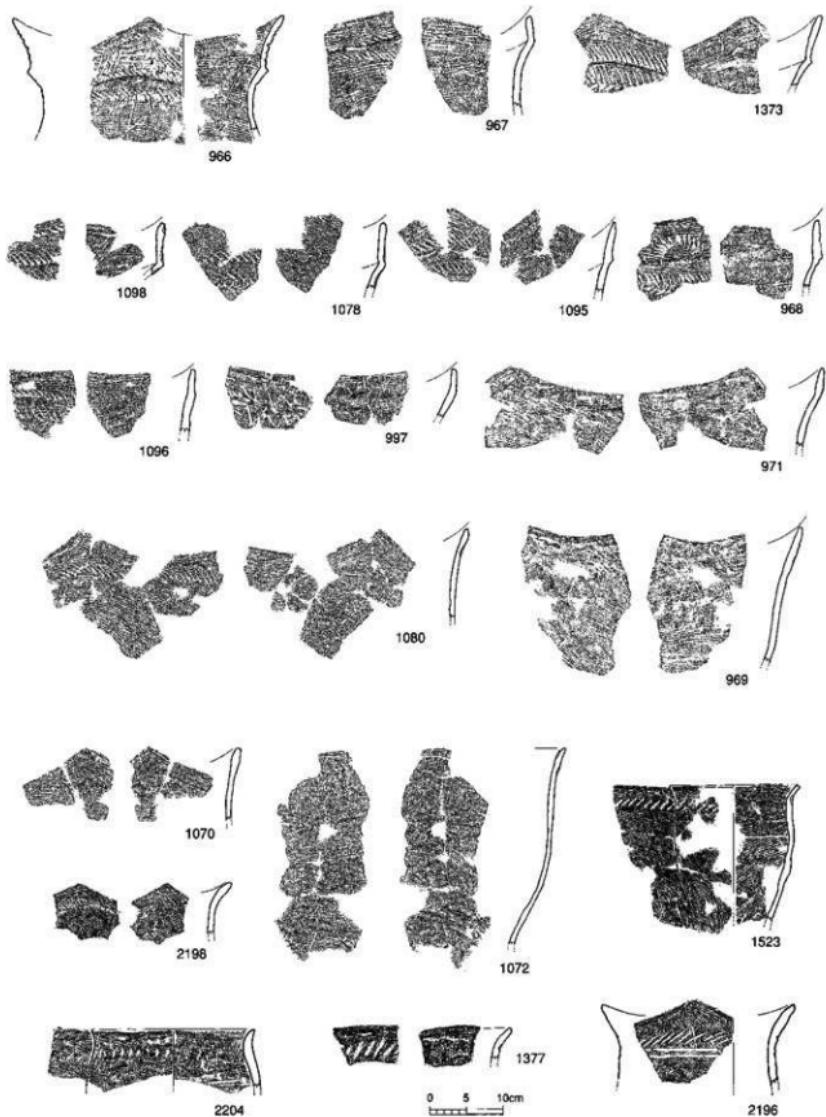
10・納曾式土器（第45図）

(2218) は、納曾 2 式である。沈線によりモチーフが描かれ、刺突が不規則に施文される。本遺跡出土の納曾式としては、最も占い段階にある。

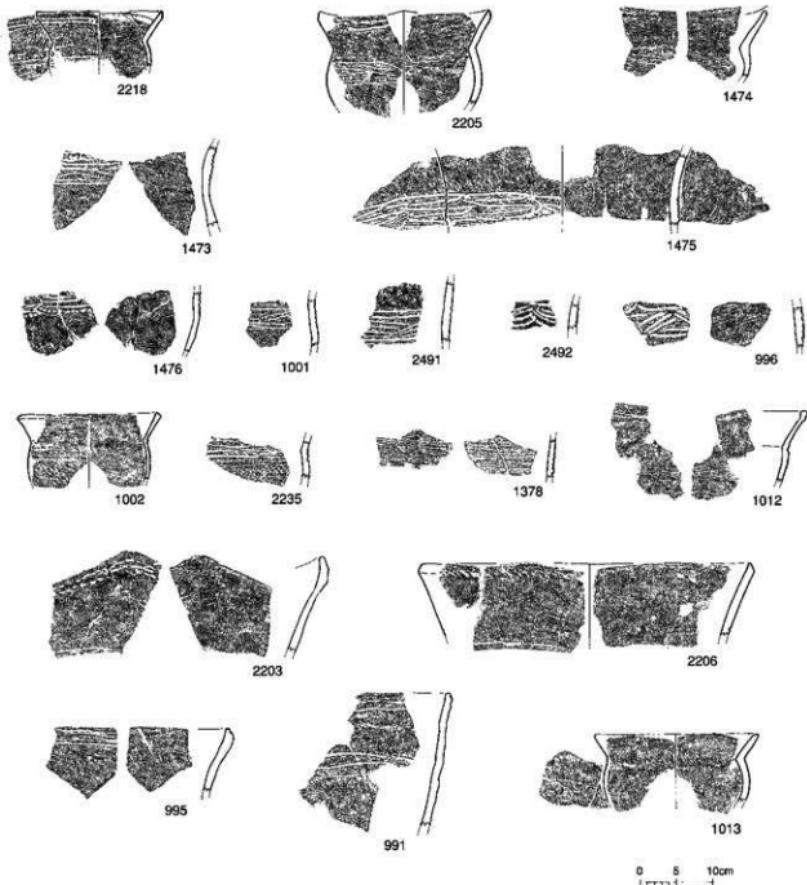
(996, 1001~1002, 1473~1476, 2203, 2205, 2235, 2491~2492) は納曾 3 式である。(1474, 1476, 2205) は、やや変化のある平行沈線を施し、不規則に刺突を行なうものである。(1473) も、刺突は「U」字状であるが、基本パターンは同じである。(1475) は、沈線により「匁」字状のモチーフが連続する。これを省略したものが、(1001, 2491~2492) である。(1476) は、本來胴部文様帯上部の連続刺突が下部に行われる。(1002, 2235) は綱文を地文とし、沈線や刺突を行なったものである。(991, 995, 1378, 2206) は、納曾式と納屋向式の境界例と言べき資料である。いずれも口縁が外反し、口縁部と胴部に文様帯を持つものの、(991) の口縁外反は、他の 2 点より弱い。(1378) は連弧文が施文される。

(1012~1013) は中岳 I 式に含まれる。(1012) は口縁部に肥厚帯を持つものの、胴部は刺突以下鋭利な沈線が数条横位に施文されるだけである。(1013) は中岳 I 式の無文土器に類似する。この 2 点は同じ遺構から出土していることから、セット関係が考えられる。

納曾式は、大隅地方に分布する 2 式の段階から出土するものの、主体は 3 式であり、宮崎平野の一般的傾向に従う。ま



第44図 丸尾式土器



第45図 納曾式土器

た、中岳I式が僅かながら出土していることも特徴的と言える。しかし中岳II式は認められない。

11・納屋向式土器（第46図）

(1063)は、頸部で窄まり、胴部が膨らむ器形を呈する。口縁直下は施文が行われない。器形から、磨消繩文系土器の影響が窺える。一方(1064, 1481)は、外面がやや膨らむ口縁部断面を呈する点は、磨消繩文系土器の影響であろうが、大きな変化なく寸胴の器形を呈する点で、(1063)とは区別されよう。(973)は、頸部の傾きが胴部よりも若干変化する事から、両者の中間に位置付けられよう。(981)は、貝殻腹縁刺突が口縁に平行しており、施文と言うより口縁直下と頭部、胴部の境界を示すラインに近い。(977, 980)は、貝殻腹縁による相交弧文が行われる。(982)は羽状の貝殻腹縁刺突、(1483)は、細い工具により沈線が描かれるが、もはや沈線としての存在感はなく、条痕に近い。(975, 2197)は、工具により刺突が行われる。(979, 1065)は、工具刺突と共に沈線が併用される。

納屋向式は、丸尻式に増して、窪地造構内や竪穴状遺構、道路状遺構からの出土が多かった。また、残存状況が良好であったことも特徴に挙げられる。

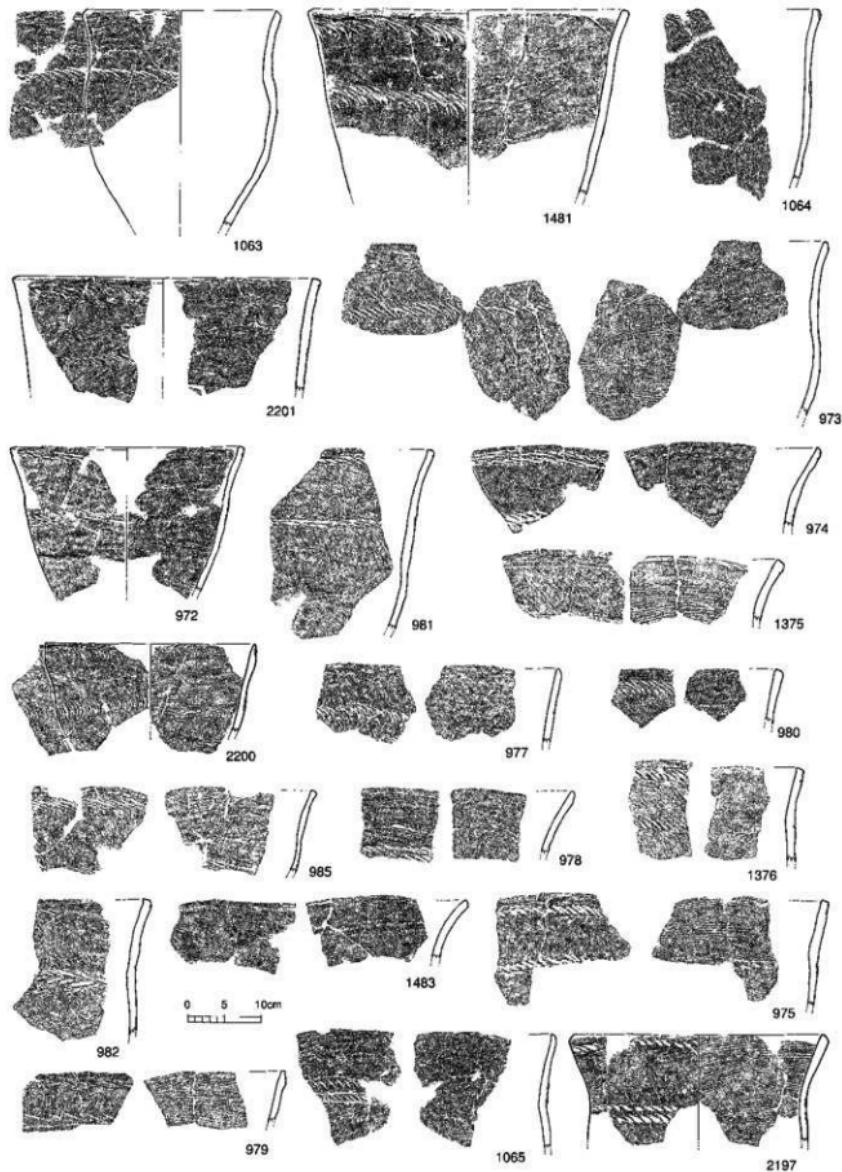
12・磨消繩文系土器（第47図）

(2207)は、大きく屈曲した口縁部に貝殻腹縁刺突を行う。(355, 779)は、沈線によってモチーフが描出される。中津式に伴う沈線文系上器と考えられる。(2035)は、4単位の波状口縁と考えられ、波頂部に突唇を有するほか、中津式よりも幅の細い平行沈線によって、波頂部直下に丁字文が施文される。以上の特徴から、宿毛式と考えられる。しかし、その調整は宿毛貝塚から出土する宿毛式に用いられる精緻なミガキと比較すると簡略されている。(523, 1256, 1259, 1262, 1264-1265, 1267, 1270, 1272, 1274, 2209-2210)も同様の時期に位置付けられよう。(431)は波頂部であり、穿孔を有する。沈線間に貝殻腹縁刺突を伴うが、宮之迫式にもこのような土器は含まれる事から、磨消繩文系土器でない可能性もある。(107)の外面は無文であるが、波頂部における刻目から、松ノ木遺跡等で確認される、磨消繩文系土器に伴う無文土器と判断した。(1288-1290)は波頂部であり、貝殻腹縁刺突を行なう突唇を伴う。磨消繩文系土器に含めたが、頭部以下の文様は予想できない。(1275・1276)は同一個体である。器形や文様から、小池原上層式と考えられる。(1283・1284)は鉢形土器である。(1253)は、内溝する器形や、縦線の沈線から、門川南町遺跡で多量に出土した鉢形土器と同類と思われる。(1282)は、口縁部に連続刺突を行い、波頂部下位に溝状のモチーフを縱に三列置き、下の溝文から斜行する三本単位の擬似繩文帯がX字状に交差する。口縁部は、刺突列を持つ厚唇帯があり、胴部文様帯と明確に区別される事から、縁帯文成立期以降に該当する。(1277-1279, 1281, 1848, 2213)は小池原上層式である。(1293)は、W字状の貼付はないものの、丸野第2遺跡における類例の存在から北久根山第一型式と判断した。(2216・2217)は、北久根山第二型式にあたる。南九州において、北久根山第二型式は納骨I式が挙げられるが、干迫遺跡や市来貝塚より確認される同時期の土器とは、器形も施文手法も全く異なるため、納骨式には含めなかった。(998・999)は残存が悪く、第一、第二型式のどちらに該当するか定かでないが、本書第IV章の分類基準から、第二型式に含めた。(2219)は、胴部文様帯の幅が広いため、西半式でも前半に相当する。(2234)は大型であり、胴部文様帯の幅が幾分狭まったものである。四半式でも後半に含めた。

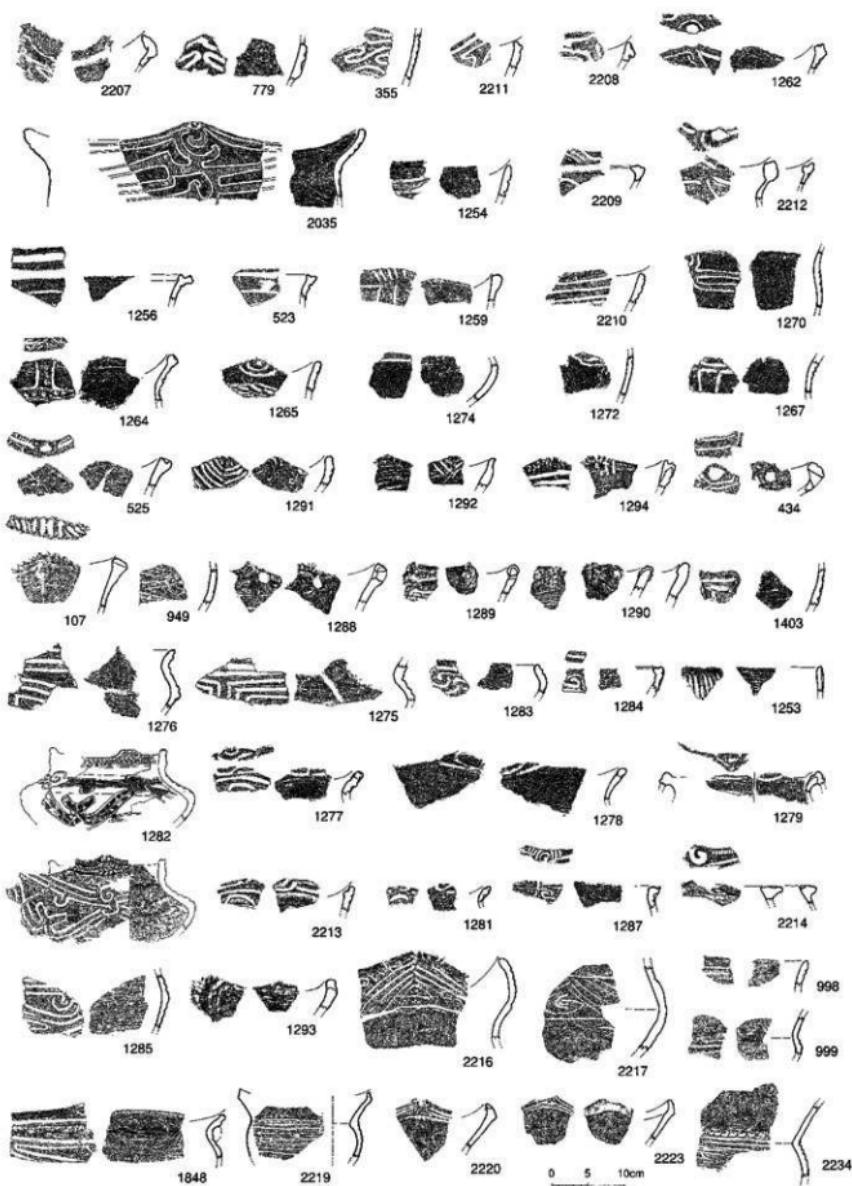
磨消繩文系土器は、小片が多く、時期や分類が困難なもののが多かった。出土は、前半の宿毛式～鐘崎式に該当するものは竪穴住居や南東部上器焼成場が多く、それ以降は繩文後期の窪地造構、道路状遺構、そして遺物包含層が多かった。これは、当該期の土器全体の傾向と同じであり、特に変わった出土状況は認められなかった。

13・台付皿形土器（第48図）

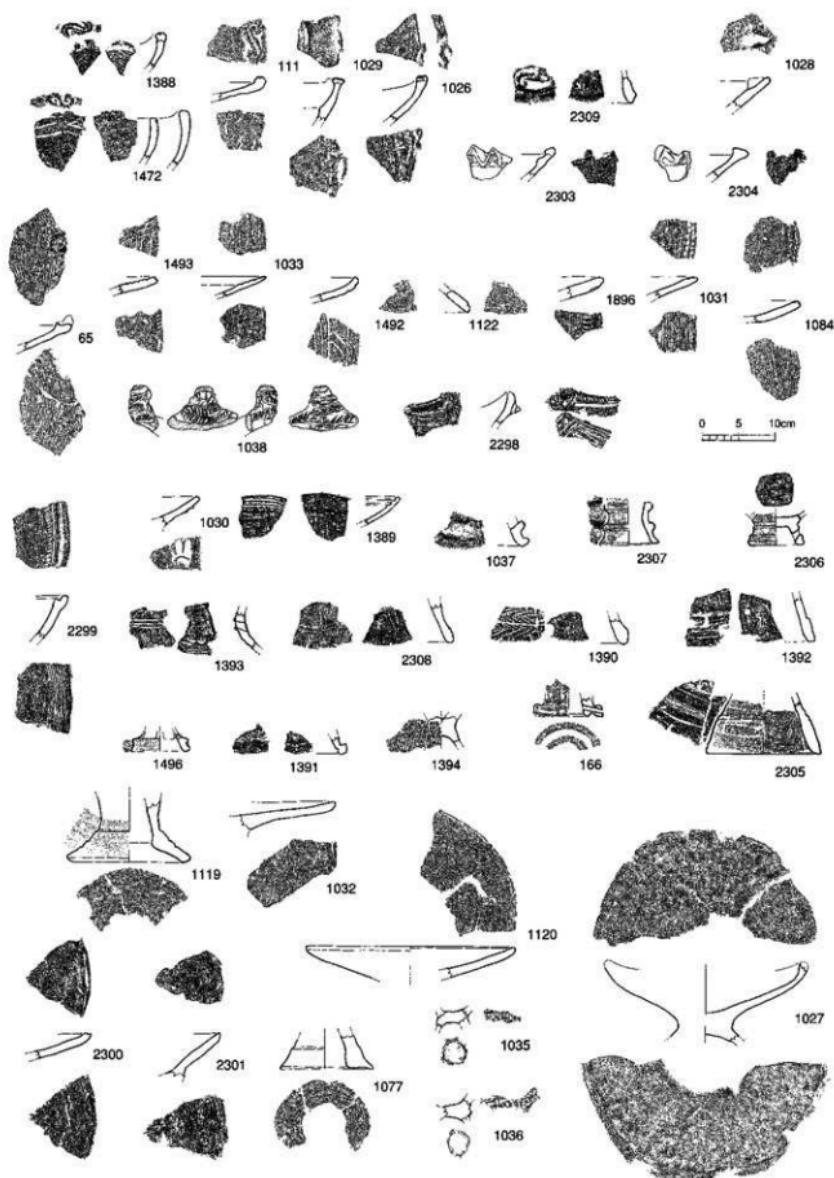
(111, 1026, 1029, 1388, 1472, 2309)は、口縁部や底部にS字状の突唇が貼り付けられる事から、鐘崎式相当と考えられる。一方、(1028, 2303・2304)はM字状突唇が、(1033, 1492)には直線による区画内に擬似繩文が行われる事から、北久根山式相当と考えられる。また(1038)は、刻目を有する突唇が波頂部では螺旋状に、内面では蛇行しながら貼付けられており、北久根山式の車種である西原式の影響が窺える。(65, 1122, 1390)は、突唇や貝殻腹縁刺突から、納



第46図 納屋向式土器



第47図 磨消繩文系土器



第48図 台付皿形土器

普式相当と考えられる。(2298)は市来式に類似する。それ以外の個体は不明であるが、文様や調整から縄文後期に相当すると考えられる。器形に目を転じると、(1026, 1029, 1388, 1472, 2299)は鉢形を呈するほか、(65, 1028, 1030, 1389, 2303)は比較的深く、様々なバリエーションが存在したようである。脚台は、(1119, 2303)のように大きなものも存在するが、基本的には径が小さく、安定は悪かったようである。なお、(1394)は、窄まった底部や器面調整から、後期でも後葉と考えられる。なお、(166)は、底面まで丁寧なナデが行われるほか、穿孔も各所に認められる事から、台付皿形土器以外の器種である可能性もある。

台付皿形土器は、竪穴住居から出土する事が多かったが、遺構内出土遺物に占める割合としては竪穴状遺構や庶地遺構内の出土が突出していた。これは、非日常用具とされるこの土器の性格を考え併せると、非常に興味深い傾向であろう。

14・後期末～晩期の上器（第49・50図）

(1015・1016)は、三万田式併行期の「平烟第1段階先行タイプ」の範疇に含まれ、この中では最も古い段階に相当する。以後、後期末業に相当する高野原タイプ、御領式、平烟第1～3段階の遺物は欠落する。

(2246)は、頸部が大きく外反していることから、入佐式でも古手に位置付けられる。(1926・1927, 2237, 2240～2242)は、頸部のカーブが弱いため、入佐式の範疇ながら(2246)よりもやや後出と考えられる。(1017・1018, 1382, 2239, 2245, 2247, 2254)も、小片だが同時期であろう。この他、深鉢の(1820)も同時期に含まれよう。精製浅鉢が卓越する一方、深鉢の数が極端に少なかった点が特徴に上げられる。

(2244)は、口縁部にリボン状の突起が貼り付けられるほか、(2259・2260)も、口縁部と肩部の境界にリボン状突起が認められる。この一群は、突起の存在からより後出の黒川式併行期であろう。(1385, 2255・2256, 2262)は、黒川式の中でも新しい段階と考えられる。他に、浅鉢の(660, 1023, 1107, 1381, 1488～1490, 1821)や、深鉢の(830)、口縁部肥厚帯を持つ(2267～2273)、更に(2275, 2280～2285)の孔列文土器等も黒川式に含まれる。孔列文土器は、晩期後葉の宮崎において卓越する土器として知られており、在地色の高さが窺える。

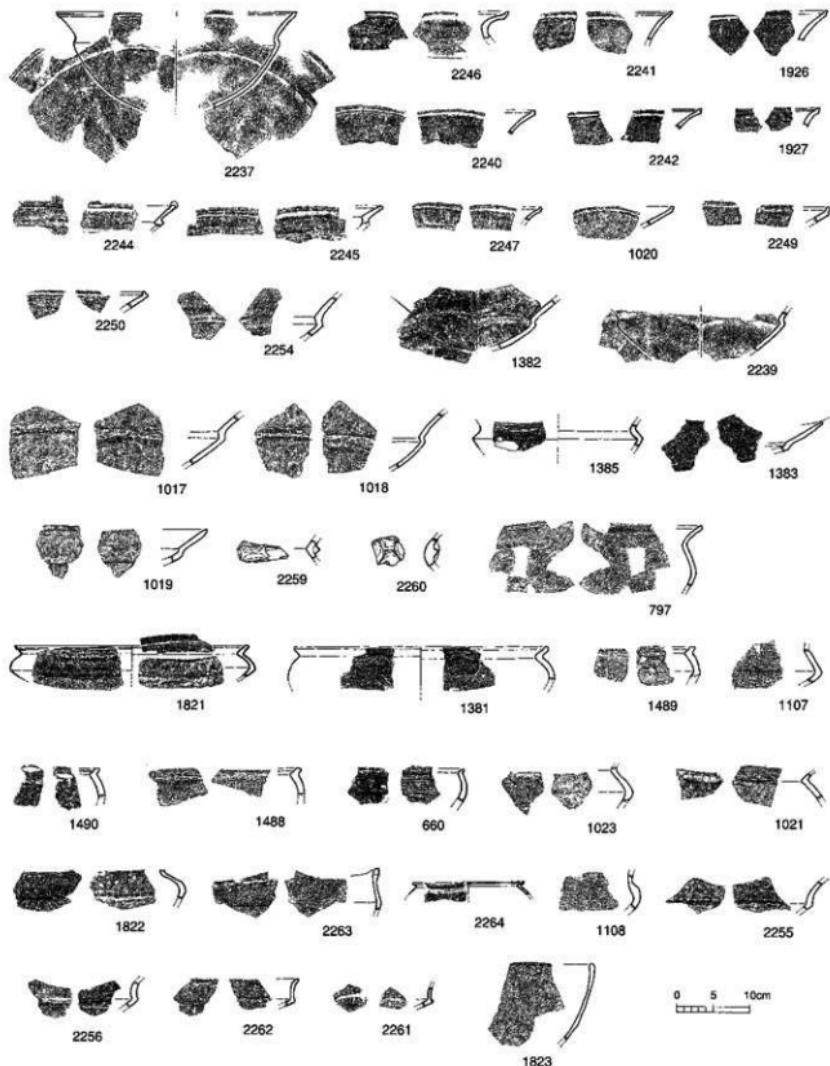
(2287)は、二重口縁により生じた胴部の接線上に刻目突窓を設けたものである。器壁は厚く、口縁直下の刺突は孔列文土器を思わせるが、刻目突窓という要素から、他の遺物よりも新しい段階と判断した。(2261, 2291)も、これと同時期の遺物と考えられる。なお、第51図は、本遺跡出土の晩期土器を、予想される時期ごとに並べたものである。

15・無文土器（第52・53図）

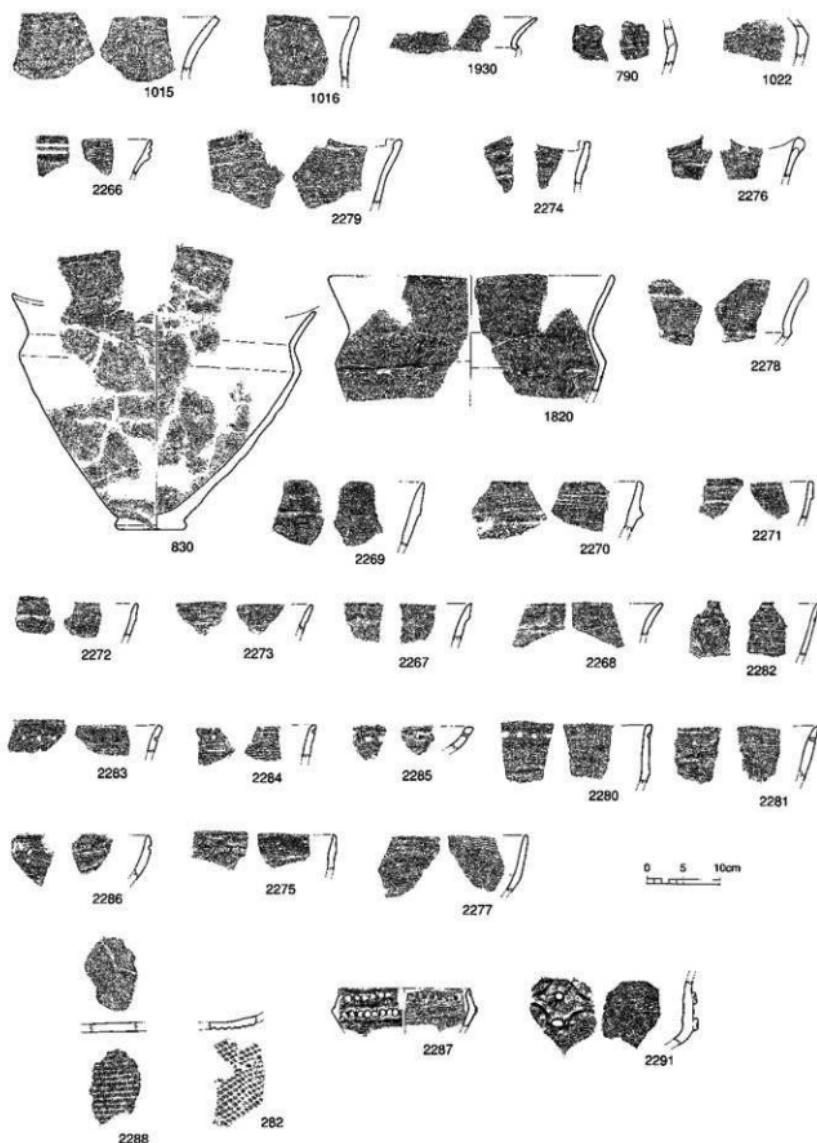
第52図は、最後4点を除いて、口縁部に若干の施文を行っており、截密には無文土器とは異なる一群である。(1650)は、口縁部に工具刺突を行う。(1298)は、波頂部に短い突窓を縦位に貼付け、突窓上と口唇部に刺突や沈線を行う。(1308)は、大きく外反した口唇部に、縦位の短沈線を連続させる。(1305・1306, 1309)は、口唇部に刺突を連続させる。(1312)は、内面に貝殻腹縫刺突を行う。(1307)は、波頂部に貝殻の腹部を刺突し、両縁に短沈線によるX字状の文様を施す。(1304, 1310, 1313～1315)は、波頂部に短沈線や刺突のみを行う。(1296)は、波頂部に刺突と沈線を組み合わせるほか、外面には木の葉状のモチーフを2つ描く。(1330, 1342)は、口縁部に突窓を貼付けるのみである。それ以外は無文であるが、貝殻条痕とナデを併用する点は共通した特徴である。器形に目を転じると、口縁部が外反するもの、内傾するもの、寸刷なもの、肩部が膨らむもの、最大径が胴部に来るもの等、様々な種類を認ることができ、統一性に欠ける。無文土器のうち、残存の良いものは、多くが南東部土器廢棄場から出土している事から、概ね本野原式期に製作されたと考えられる。なお、無文土器は竪穴住居からも多く確認されたが、小片が多く、器形が復元できないもののが多かった。ただ(1513)は、最大径の胴部の張りが他よりも強く、調整も横位ナデに限られる。同様の器形は黒川式の中に見出せるところから、晩期の可能性もある。

16・その他の土器（第54図）

(1401)は、側部が大きく膨らむ器形を呈しており、頸部と胴部の境に見られる爪形刺突は、連続しながらJ字状のモチーフを描く。(1400)は、本野原式B群に似た口縁部形態をしているが、刺突を作り突窓を駆使する。(165)は小形上



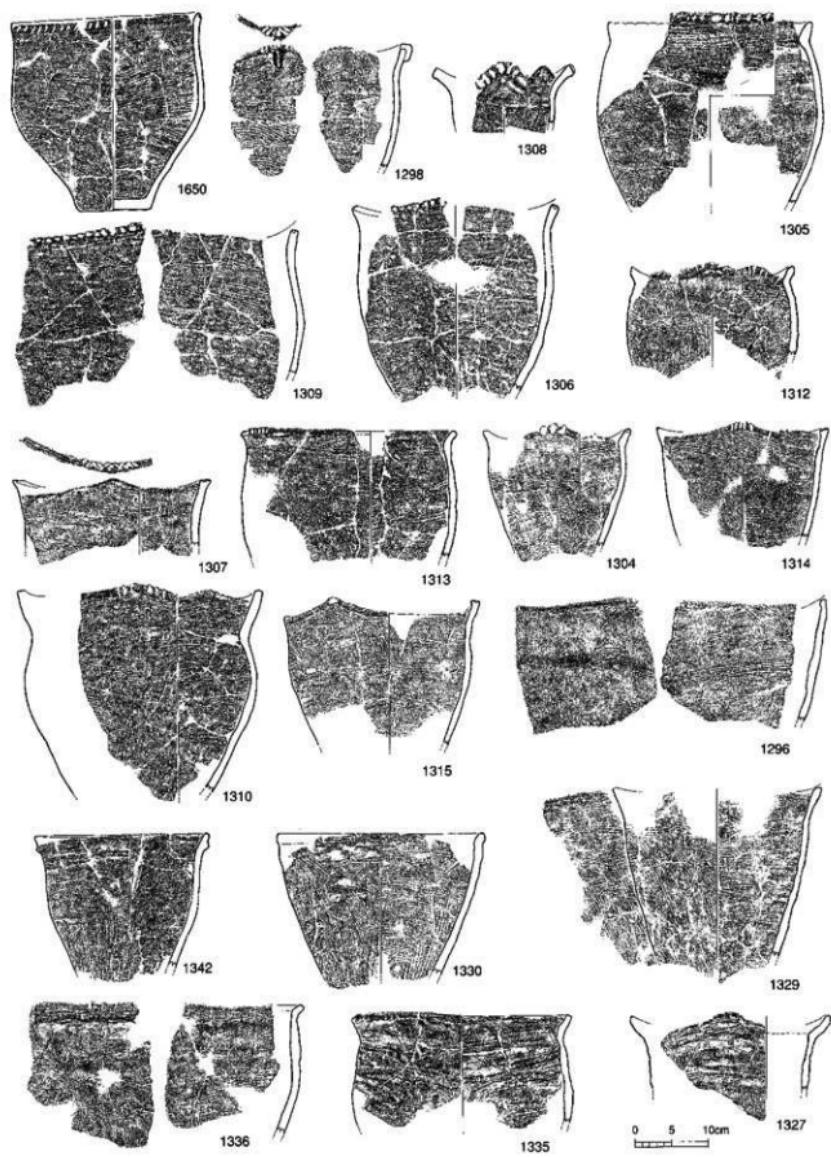
第49図 後期末～晩期の土器（1）



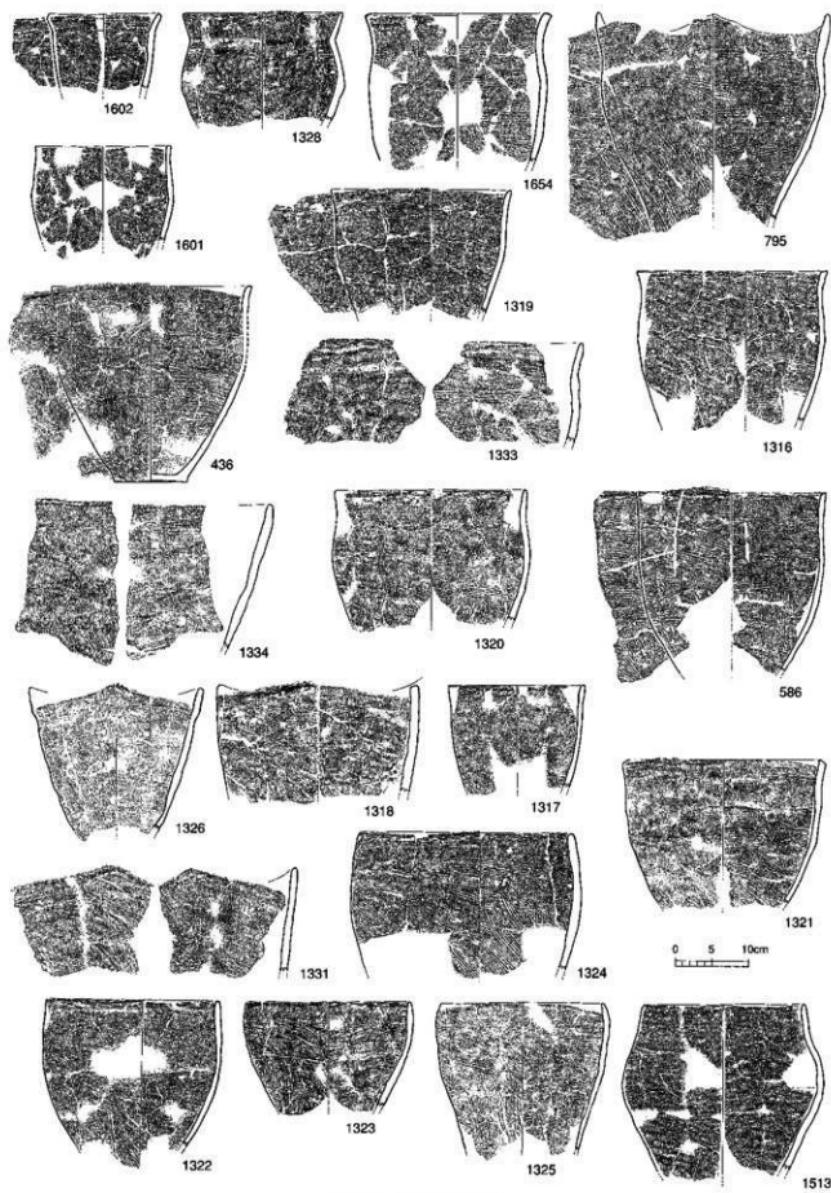
第50図 後期末～晩期の土器 (2)

入佐式期	黒川式期	刻葉文期
      	         	 

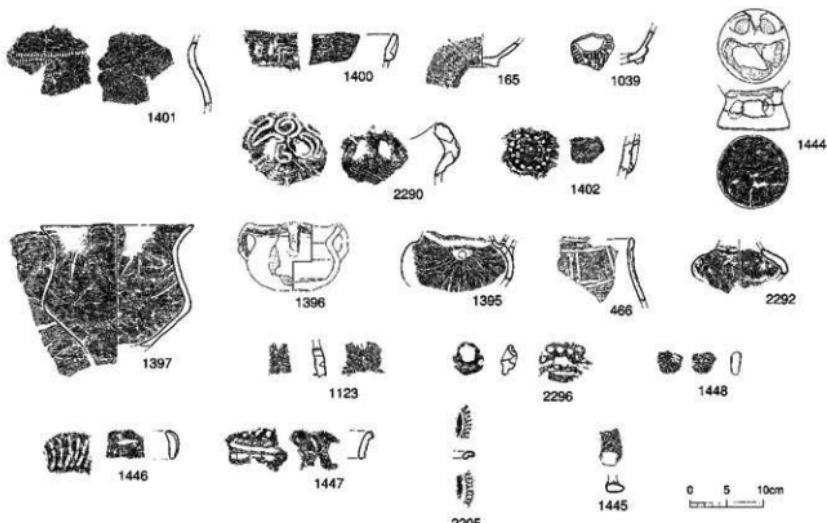
第51図 本野原遺跡出土陶器土器類年表



第52図 無文土器 (1)



第53図 無文土器 (2)



第54図 その他の土器

器の底部であり、3~4本単位の沈線が重下する。(1039)は、恐らく遠隔地から持ち込まれた土器である。「寧なナダ」により舟手に仕上げられ、刻目を有する突帯や突起が貼付けられる。(2290)は、波頂部に突帯が立体的に貼付けられ、その上に沈線による曲線文や渦巻文が描かれる。(1402)は、外面に突帯を円形に貼付け、突帯上や円形の内側に刺突を行うものである。(1444)は、土器の脚台である。台に円柱状の突帯を5単位貼付け「透かし」を設ける。(1397)は、無文であるが前面にミガキが行われ、肩部が大きくなるため、通常の無文土器とは別項に入れた。(1396)は、柄状把手を持つ鉢形土器である。把手は4単位あり、把手と口縁直下には貝殻底縁刺突が行われる。また、底面には網代模も認められる。(1395)は、全面が「寧」に磨かれた注口土器である。肩部は球状を呈する。上部に認められる段は、蓋を意識したのであろうか。(466)は全面に精緻なミガキが行われており、口縁部の径が小さく、下方に向けて膨らむことから、壺形土器の可能性がある。(2292)は、肩部が著しく張り、口縁部が窄まる壺形を呈する壺形土器である。外面は赤彩が認められる。(1123)は、土器または土製品の一部と考えられる。器面には穿孔や刺突も認められるが、意図は不明である。(2296)は、木野原式に見られる、穿孔を有する波頂部片であるが、破碎した後に成形を行っているため、耳環など装飾品として再利用した可能性もある。(1448)は、土器片を歪な方形に成形し、四辺の中間点に切り込みを入れている。形態からは土器片錐とするのが妥当であろうが、大きさがあまりに小さく、漁錐として用いるのは不可能であろう。(1446・1447)は、側面のみに割れ口が認められる。径は大きいと予想されるため、腕輪と判断した。(2295)も割れ口が側面のみであり、繩文施文後に精緻なミガキが行われる。耳環、若しくは腕輪と考えられる。(1445)は薄手であり、側面のみでなく、上面にも割れ口がある。土器脚台の可能性もあるが、器種は保留したい。

小結

出土土器の構成は、典型的な宮崎平野南部の様相を示しており、いわゆる「在地」色の強さが窺える。しかし、初期磨

消縄文系土器の影響を受けた上器が成立したり、後期磨消縄文系土器の影響を受けて文様帯が縮小する方向に変化したりと、度々外的影響を受けていることも忘れてはならない。なお、本野原式の1式と4式、特に4式のまとまった出土は、本遺跡の特徴と言える。

磨消縄文系土器は、後期前葉の宿毛式と後期後葉の西平式の出土量が比較的多かった。特に宿毛式は、後期前葉の土器全体から比べれば一部に過ぎないものの、その出土量は九州でも類を見ないほどである。同時期の、福山K2式が殆ど含まれないことも特徴と言えよう。このほか、並木式や阿高式、出水式、橋守礼川タイプ、浅川牧タイプ、薩摩半島に多い市来式などの存在は、遠隔地との情報交流を窺わせる。

南九州は、縄文時代を通して深鉢が卓越する傾向にあり、本遺跡の出土土器も深鉢以外の器種に乏しい。その中で、台付埴形土器の割合は、周辺遺跡より高かった。土製品としては、土偶は確認されなかったが、以前採集された、犬の頭を模した動物形土製品は注目に値しよう。また、土製輪輪は、現在のところ周辺に類例を認めることができない。

出土量別に振りると、後期初頭の宮之追3式に増加し、後期中葉の本野原3式～後葉の丸尾A式にかけて徐々に減少し、丸尾B式で再び増加に転じ、納屋向式の後に空白期を置いた後、入佐式から刻目尖端文期にかけて少量出土する、という変遷を辿ることができる。

(註)

1)：鹿児島県教育委員会「成川遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財調査報告書」(24)の、322のことである。

2)：本書掲載の2840のことである。

第VI章 出土石器

1・石鎚 (835, 853~856, 2054, 2311~2322, 2326~2329)

全体で71点出土した。

(835, 853~856, 2317~2322) は、比較的小型の一群である。(835) は正三角形状を呈しており、抉りが深い。(853, 854, 856) は半基に近い。(2320) は剥片の縁部に急角度の調整を行い成形したものである。(2054) は、縁に向ぐる剥片を利用したものであろう。(2311~2315) は、側縁が屈曲し、全体が亜角形状を呈する。ただし、大きさや屈曲の位置はややばらつきがある。(2318) は、最大幅は下部にあり、基部は急速に窄まる。(2322) も同様の形状を呈するが、成形が甘い。(2317, 2321, 2326) は、左右対象であり、基部には抉りが見られる。

(2327~2329) は未製品である。(2327) は、脚部の作りが明確である事から、一度完成したものが欠損したため、再利用を目的として調整を行ったと考えられる。

石鎚は、側縁に肩を持つものの割合が高かった。これは、近隣の縄文後期遺跡にも共通する傾向である。なお、出土量は遺跡の規模を考慮すると多いとはいえない。

石鎚に用いられた基材は、桑ノ木津留産、姫島産、腰岳産である。調査区内からは、日東産の黒曜石の分厚い剥片も出土したが、それを用いた石鎚は認められなかった。このうち、桑ノ木津留産黒曜石製の石鎚は、縄文後期では用いられることが少ない石材であり、本遺跡から出土した石鎚も、他の石鎚より少な目である。また、いずれも二次堆積が想定される堅穴住居の覆土上層から出土する。このような点を踏まえると、桑ノ木津留産黒曜石製の石鎚の多くは、縄文早期に製作され、縄文後期の削平と共に地表に姿を現したものも含まれるようである。

2・石匙 (1049, 2330~2334)

8点出土した。(1049, 2332, 2333) が横匙、(2330, 2331) が縦匙である。(2334) は横匙の未製品と考えられる。縦匙は2点ともサヌカイト製で、素材剥片の形状を大きく変えずにつまみと刃部を作出するに対し、横匙は3点ともチャート製で、素材剥片に面的な調整をより積極的に行って成形している。なお、(2332) の形状はつまみ部が大きい反面、刃部は小さくなるが、これは欠損した後、つまみ部をそのままに刃部調整を行ったためと推測される。

3・スクレイパー (2335, 2337, 2339)

3点紹介する。(2336) など、外にもスクレイパーと認定したものが存在するが、縁辺の調整を根拠としており、刃部の角度や位置から機能を果たせないと判断し、除外した。(2335) は砂岩製であり、側縁に交互剥離による刃部調整を行っている。刃部は急角度である。(2337) は、素材剥片の形状が復元できないほど顕著な研磨が両面に行われる。刃部は剥離によって作出すためスクレイパーとした。(2339) はノジュール製であり、節理に沿って端部を剥離し、側縁に刃部調整を行ったものである。スクレイパーの機能は有するが、使用痕等が認められないため、円盤形石製品の可能性もある。

スクレイパー類の出土は少量であった。鋸齒状の刃部を使用したと考えるのであれば、阿多火碎流中に含まれる砂岩の角礫でも、耐久力は落ちるもの代用は可能であった筈である。しかし、調査を通して、摩滅や刃こぼれ等、使用に因する痕跡が残された角礫は認められなかった。

4・礫器 (2338)

1点出土した。(2338) は、同一方向から連続して剥離した石核に、急角度の剥離を数度行い、礫器に転用したものである。ただし刃部調整は連続的ではないため、角度を変えて剥片剥離を行おうとして失敗し放棄した残核とも考えられる。

5・打製石斧 (2340・2341)

追加資料も含めると3点である。(2340)は、刃部が円くなっている。土掘り具としての機能を有している。(2341)の形状は、(1449, 2347)のような小形の磨製石斧に似ていることから、磨製石斧の製作中途品とも考えられる。

6・局部磨製石斧 (1125, 2343・2344)

追加資料も含めると5点である。(1125)は刃部のみ鋒状に広がったものである。刃部の断面は丸まっていることから、石斧として使用されたとは限らない。(2343)は小型である。薄手の剥片の縁辺を打撃により成形すると共に、刃部を研磨する。(2344)も小型であるが、刃部はやや幅広である。

7・磨製石斧

追加資料も含めると48点である。利用状況から、以下の5類に細分した上で説明を行いたい。

A類・完形のもの (846, 1449, 2053, 2342, 2345~2347, 2349・2350, 2497)

(846, 2346)は、全面を研磨によって仕上げた石斧である。形状は円柱に近く、刃部でやや窄まる。ノミとして使用したと考えられる。(1449)は、本遺跡出土の磨製石斧の中で唯一の定角石斧である。薄手で、撥形を呈する。(2053, 2347)は、全面を敲打と研磨によって仕上げている。刃部が偏刃となるが、これは一度刃部が欠損した後、研磨により再生したためである。(2345)は、厚手の剥片に著しい研磨と剥離を行ったものである。形状は変則的である。(2349)は表面除去時の扁平な剥片に剥離を行い、刃部を作出したものである。風化により判然としないが、表面側から研磨が行われた痕跡が認められる事から、磨製石斧に含めた。なお、形態は変則的であり、伐採具よりも土掘り具に適している。(2350)は太形始刃石斧である。(2497)は、角柱状の自然礫を用い、研磨により上下に刃部を設けた「両刃器」である。圓面にして上端部は片刃に近く、刃部角も鋭いのにに対し、下端部は両刃であり、刃部角も鈍い。

B類・折損後、再加工の認められないもの (847, 1052, 1450, 1453, 2051, 2351, 2353・2354, 2356・2357)

(1052)は撥形を呈する刃部である。(1453, 2051)も刃部であり、節理に沿って破損している。(1450, 2351, 2353・2354, 2356・2357)は柄部である。

C類・折損後、再加工を行いながら、再生に至っていないもの (2355, 2363・2364, 2366)

(2355)は柄部であり、折損面を打面として何度も打撃を行っている。敲打器として再利用を図ったものの、完成に至る前に放棄したと考えられる。(2363)は欠損した刃部に連続剥離を行い、再生を図ったものである。研磨によって刃部を成形する前に放棄したのであろう。(2364)は、断面が円柱状の石斧の上・下が折損したものであり、刃部欠損後、再生を図ってミガキを備かに行った後放棄されたのであろう。(2366)は、折損した石斧のうち、柄部側に調整を行ったものである。敲打器として再生を意図したのであろうが、完成には至っていない。

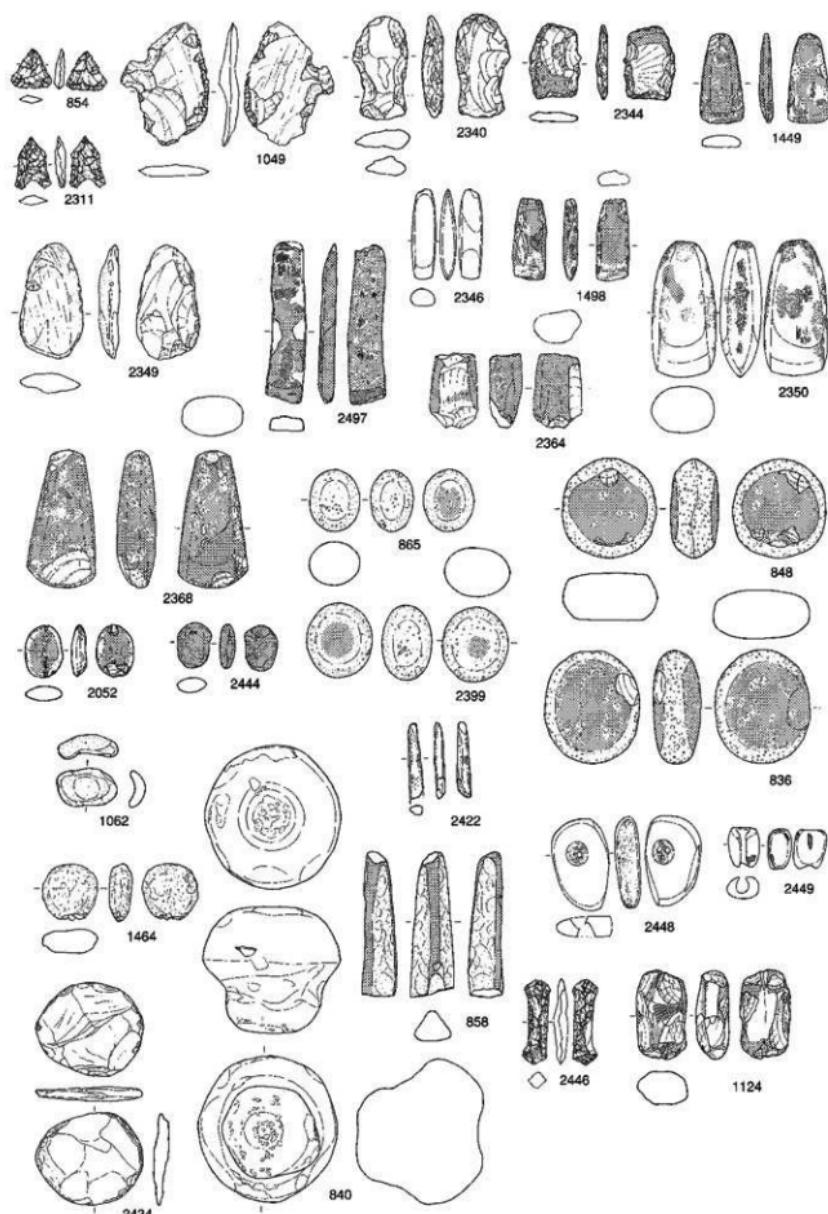
D類・折損後、再加工し石斧として再生したものの (1051, 1451・1452, 2358~2360, 2362)

(2359)は、節理に沿って分割された石斧の刃部を研ぎ直し、再利用したものである。やや刃部が鋭角になったためか、再生後も刃部が欠損している。(2358)も使用中に分割されたものである。再生は刃部を備かに成形しただけであったが、元のような伐採具ではなく、(2349)と同じ土掘り具として利用されたと考えられる。(1451・1452, 2360)も、同様に研磨して再利用したものである。(2362)は、上下を折損した石斧を打撃及び研磨によって、寸胴な石斧として再生したものである。(1051)は、刃部が大きく欠損した後、研磨によって偏刃を作出したものである。

E類・蛇紋岩製石斧 (1498・1499, 2348)

この石斧は、斧として使用を行わない玉斧の一種と考えられてきたが、近年では実用品とされている(藤木聰 2005b)。よって本遺跡出土の3点の蛇紋岩製石斧もここに加えた。ただし、大きさは他より小形であり、調整も独特である。

(1498)は完形だが、柄部を観察すると欠損し、再生が行われている。刃部は直線に近く、側縁も研磨が顯著に認められる。(1499)の刃部は直線に近く、側縁も研磨が丁寧に行われている。柄部を折損しており、折損後再生が図られた形跡は認められない。(2348)は小形であり、刃部が丸まっている。一度完成した後に折損し、剥離と敲打により再生を図ったものである。



第55図 本野原遺跡出土石器（抜粋）

磨製石斧は、(1449) の定角石斧、(2350) の太形始刃石斧、E類の蛇紋岩製石斧、(2345, 2349, 2358, 2497) のような変則的な石斧を除いて、ほぼ全てが乳棒状石斧の範疇に含まれる。しかし、その断面形は東日本で見られる円形とは程遠く、扁平ないし棒円形を呈するものが多い。なお、折損時の打撃は、(2353, 2356) など一部を除いて平坦面側から加えられている。そのまま解釈すれば、折損時は堅斧として使用したとなるが、折損は、実際のところ筋理と大きく関係しており、横斧に使用しても、この方向に折損することが多かったと考えられる。

8・敲打器 (832, 1050, 1460, 2056, 2352, 2361, 2365, 2367・2368)

折損した石斧を加工し、敲打痕が密に認められる石器である。追加資料も含めると10点である。本遺跡ではこれを敲打器とし、石斧や磨石とは別個に捉えた。

(1050, 1460, 2361) は、折損した石斧の柄部を用いたものである。(2352) は、柄部の尖端部を使用している。(832, 2056) は、折損した石斧の刃部を用いたものである。いずれも折損部分に簡単な調整を行い、敲打器に転用している。なお、(2365, 2367・2368) は、折損部分のみでなく、尖端部にも敲打痕が認められることから、上下両端を使用したと考えられる。

敲打器は、折損した石斧を転用したものであった。これは、草野貝塚で「石斧形石製品」、宮之迫遺跡で「石槌」、志布志町中原遺跡で「乳棒状石斧 b」と呼ばれていたものとほぼ同じである。出土遺跡から、後期初頭～市来式成立期以前に、南九州に散発的に存在した器種と考えられる。

9・石錘 (1053, 2052, 2369～2381, 2438)

追加資料も含めると20点である。(2438) は、唯一の打欠石錘である。小型であり、片面には擦痕も僅かに認められる。(2378) は有溝石錘である。砂岩製であり、溝は数条重複して施される。研磨は認められない。それ以外は切目石錘である。いずれもホルンフェルス製である。主に扁平な縫合用いられる中、(2052, 2372) は比較的厚手の縫合用いられる。また、共通して研磨が認められる。なお、(2052) は糸の存在したであろう部分に細かい敲打が施されるが、意図は不明である。

石錘は、大部分が小型の切目石錘であった。宮崎の鍛具に関しては、藤木氏の論考に詳しい（藤木聰 2003）。氏は、この中で上・中流域では切目石錘あるいは軽量の鍛具が多く、下流～加工・外海では種類や点数が増加する傾向を述べている。清武川の上流域にあたる本遺跡の傾向は、まさにこれに準じると言えよう。ただし、今日切目石錘は編物錘とも推定されており（新潟県教育委員会 1991, 1992）、両者の判別方法がまだ確立されていないため、用途の推定は今後に委ねたい。

10・磨石

追加資料を含めると58点である。以下の3類に細分した上で説明を行いたい。

A類・小型の円縫を用いたもの (838, 1454・1455, 1459, 2058, 2409～2413)

(838, 1454) は球形に近い。(838) は、研磨痕はなく、一端に敲打痕が認められるのみである。(1454) は、一部を除いて全面に研磨痕が認められる。(1455) は、不規則かつ扁平な形状の縫合であり、平坦面に研磨痕のみ認められる。(2058) は、断面が円形に近い棒円形の縫合を用いる。研磨痕が部分的に散在する。(2409) は、厚手で棒円形の縫合を用い、平坦部に研磨痕が、周縁に敲打痕が認められる。(2410) は、厚手でやや棒円形を呈する縫合を用い、平坦部に研磨痕が、片側縁に敲打痕が認められる。(2411) は、やや歪な棒円形の縫合を用いており、平坦部を中心に研磨痕が、両端部を中心に敲打痕が認められる。(2412) は、断面が円形に近い棒円形の縫合を用い、側部に研磨痕と敲打痕が90°毎に入れ替わる。(2413) は、やや扁平な円形の縫合であり、平坦部に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。

A類の中にも、形状は円形、やや扁平、棒円形などバリエーションが認められる。ただ、研磨痕は平坦部に、敲打痕は側縁に残される傾向にある。

B類・中型の円縫を用いたもの (831, 833, 865, 2395～2408)

(831) は、やや扁平な楕円形の碟を用い、全面に研磨痕、周縁及び片平坦面に、部分的に敲打痕が認められる。使用痕は、敲打→研磨の順である。(833) は、歪な球形の碟を用いる。敲打痕、研磨痕は、風化により認められない。(865) は、断面が円形に近い、やや楕円形の碟を用い、片側縁に研磨痕が、残りに敲打痕が、濃淡を成しながら認められる。(2395) は、断面が円形に近い、やや歪な卵形の碟を用い、全面に研磨痕が認められる。(2396) は、断面がやや楕円形を呈する楕円形の碟を用い、平坦面に研磨痕が認められるが、敲打痕はない。(2397) は、断面が円形に近い楕円形の碟を用いる。敲打痕と研磨痕は交互に 90° 毎に認められるが、痕跡はどちらも一部に散在するのみである。(2398) は、扁平な楕円形の碟を用い、平坦面を中心に研磨痕が、側縁の一部に敲打痕が認められる。(2399) は、厚手で円形の碟を用いており、敲打痕が全面に、研磨痕が半平坦面の一部に認められる。(2400) は、扁平な円形の碟を用い、平坦面に研磨痕が、周縁に敲打痕が認められる。(2401) は、扁平で不定形な碟を用いており、平坦面に研磨痕が、一端及び一側縁を中心に敲打痕が認められる。(2402) は、扁平な円形の碟を用い、全面に研磨痕が認められ、敲打痕は周縁を中心に認められる。使用痕は敲打→研磨の順である。(2403) は、やや扁平かつやや円形の碟を用い、平坦面に研磨痕、周縁に万遍なく敲打痕が認められる。(2404) は、やや扁平な楕円形の碟を用い、平坦面に広く研磨痕が残される一方、敲打痕は端部と側縁部に僅かに認められる程度である。(2405) は、やや扁平な円形の碟を用いている。敲打痕は平坦面にも認められるが、その後に研磨が全面に行われる。(2406) は、やや扁平な円形の碟を用いており、平坦面に研磨痕、両端を中心とした周縁に敲打痕が巡る。(2407) は、厚手で歪な円形の碟を用い、平坦面に広く研磨痕が、周縁及び平坦面に、顕著に敲打痕が認められる。他に小剥離も認められるが、これは敲打の際に生じたと考えられる。(2408) は、厚手で歪な卵形を呈する碟を用いており、平坦面に研磨痕、一端に僅かに敲打痕が認められる。

B類は、他の類に比べ、素材となる碟の形状にばらつきが認められた。

C類・大型の碟を用いたもの (836・837, 841~845, 848~852, 859, 864, 1054・1055, 1126, 2050, 2383~2394)

磨石の中で最も高い割合を占める。(836) は、扁平な円盤を用いており、平坦面に研磨痕が、周縁部を中心に敲打痕が認められる。器面には剥離面もあるが、これは敲打の際に生じたものと考えられる。平坦面における使用痕は、敲打→研磨の順である。(837) は、扁平な円形の碟を用い、片側の平坦面に研磨痕が認められる。花崗岩製であり、磨石に使用するには適さない。(842) は、やや扁平な円形の碟を用いており、研磨痕、敲打痕共に器面全面に万遍なくばらついて認められる。使用痕は、敲打→研磨の順である。(848) は、扁平な円形を呈しており、平坦面に研磨痕が、周縁部に敲打痕が認められる。器面には剥離面もあるが、これは敲打の際に生じたものと考えられる。使用痕は顕著であり、それにより断面はソロバン状に変形している。(849) は、やや扁平な円形の碟を用い、両端を除く全面に研磨痕が、両端を中心に周縁に敲打痕が認められる。使用痕は、敲打→研磨の順である。(852) は、扁平な円形の碟を用い、平坦面に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。(859) は、やや歪な形状の碟を用い、研磨痕は平坦面と周縁の境界に多く、敲打痕は周縁を中心とするが、一部平坦面にも認められる。(864) は、扁平な円形の碟を用い、平坦面に研磨痕が、両端を中心として、周縁に敲打痕が認められる。(1055) は、扁平な円形を呈しており、全面に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。器面には剥離面もあるが、これは敲打の際に生じたものと考えられる。なお、使用痕は、敲打→研磨の順であり、顕著な研磨痕のために、周縁に残っていた筈の敲打痕はほぼ消滅したと考えられる。(2383) は、扁平な楕円形の円盤を用いており、全面に研磨痕が、平坦面を中心に、周縁にも敲打痕が認められる。使用痕は、敲打→研磨の順である。(2384) は、扁平な円形の碟を用い、全面に研磨が行われる。平坦面と周縁部の境界には、(842, 845) 等と同様に面取りが行われる。器面には、僅かに敲打痕も認められるが、研磨によっては消滅している。(2385) は、やや歪な卵形の碟を用い、研磨痕が全面に認められる。(2386) は、やや扁平な楕円形の碟を用い、全面に研磨痕が、両端を中心に側縁や平坦面にまで敲打痕が認められる。特に両端の敲打痕は顕著であり、断面に影響するほどである。(2387) は、やや歪な形状の碟を用い、平坦面を除く全面に研磨痕が認められるが、敲打痕は認められない。(2388) は、扁平な円形を呈し、平坦面と周縁に研磨痕が、周縁に敲打痕が認められる。使用痕は、敲打→研磨の順である。研磨は顕著であり、それにより断面は隅丸方形を呈する。(2389) は、やや歪な球形を呈しており、ほぼ全面に研磨痕が認められ、片側縁を中心に、全面に敲打痕が散在する。(2391) は、扁平な円盤を用いており、全面に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。(2392) は、本来やや扁平な円形の碟であったと予想される。全面に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。なお、碟は分割さ

れているが、研磨痕は分割面にも認められ、分割後も、割れた際に生じた端部を利用して使用されたと考えられる。(2394)は、破碎した磨石であり、全面に研磨痕が、周縁部に敲打痕が認められる。なお、(842~845, 850~851, 1054, 2050, 2390)は、扁平な円形に近い形状の礫を用いており、全面に研磨痕、周縁を中心に敲打痕が認められる。使用痕の順位は敲打→研磨であり、両側縁には、平坦面と周縁の境界に、研磨による面取りが行われる。これらは大きさも低通っており、使用痕の部位も同じである事から、ある程度の規格化を伴っていたと考えられる。(1126, 2393)は、C類の中でも一際大きい一例である。(1126)は、やや扁平な円形の礫を用い、平坦面に研磨痕が、周縁を中心に敲打痕が認められる。(2393)は、扁平でやや歪な礫を用い、片側の平坦面と反対側の平坦面と周縁部の境界に研磨痕が、片側の平坦面に敲打痕が認められる。形態から、小形の石皿としても使用可能である。

磨石の出土量は、ズクノ山第2遺跡E地区における232点には遠く及ばなかったが、使用痕の希薄な、やや歪な円形が多く出土しており、これらも磨石とすると、実際の出土量は倍近くに達する。今回磨石としたものは、使用痕を観察すると、断面に影響するほど顕著に残されたものが多い。ただ、使用痕は殆ど敲打→研磨の順であるが、敲打痕の残された周縁部への研磨は、果たして磨石本来の、植物質食料の加工の際に生じたのだろうか。なお、藤木聰氏は、このような磨石を右斧製作用ハンマーと位置付けており(藤木聰 2005a)、磨石の量を持って、植物質食料に長けた生業を送っていたとは限らない。もう一点、B類に見られる、尾鈴酸性岩を用いた磨石は、堅穴住居から出土する事が多かったことも特徴と言えよう。

11・石皿

遺跡内から検出された石皿は、破碎したものも多いため、具体的な数字は出せないが、おおよそ100点前後に及ぶ。遺跡内から単独で出土するケースは稀であり、堅穴住居、掘立柱建物の柱穴、道路状遺構、貯蔵穴、立石土坑、その他の上坑等、殆ど遺構内からの出土である。堅穴住居から出土したものは、多くが床面から出土しており、実際に住居内で使用された後、住居と共に埋没したと考えられる。掘立柱建物の柱穴は、柱を固定するために用いられたものであろう。ただし、(SB-03)のP-1のように、柱穴内に一括埋納されたものもある。道路状遺構は、遺構下層から出土した。層位は覆土中であるため、埋没時に埋められたと考えられる。貯蔵穴の出土位置はいずれもフラスコ状上坑の中位であり、埋没中に投棄され、埋まると推測される。立石土坑の石皿は土坑上位にあり、目印のように地表面につき出たものも多い。なお、立石土坑に用いられた石皿の中には、鋭利な引っ搔き傷が認められるものもあり、簡単な加工が行われたと考えられる。その他の土坑からも検出されたが、これは墓廻等の意味合いが存在したのだろう。

これ以降は、用途の明確でない石器である。

12・加工を有する礫 (1057, 1059~1061, 2055, 2437, 2439~2441, 2444・2445)

11点が該当する。(1057)は不定形な小礫であり、周縁にあたる位置に敲打痕が認められ、残りは全て研磨を行う。(1059)は、やや扁平な円形の小礫であり、器面には部分的に敲打痕が認められる。(1060)はやや歪な小礫であり、擦痕の認められる一面を除く全面に研磨を行う。(1061)は扁平で不定形の礫を用い、両側縁に剥離を行い、平坦面と側縁の境界に研磨を行う。(2055)は、流紋岩の扁平な円形の礫であり、器面に研磨を行っている。(2437)も同様の扁平礫であるが、こちらは研磨痕が部分的に残されるのみである。(2439)は、扁平な楕円形の礫であり、片面に側縁からの剥離面が、もう片面に部分的に擦痕が認められる。(2440)は、非常に扁平な楕円形の礫を用い、平坦面と周縁部の境界に研磨痕が、側縁や平坦面の一部に敲打痕が認められる。(2444・2445)は扁平で不定形の小礫であり、全面に研磨を行う。(2444)は器面に沿って滑らかに研磨を行うが、(2445)は研磨によって角が生じる。(2441)は、元はやや扁平な円形の礫であったと考えられる。平坦面と側縁に研磨痕が認められる。破碎した磨石に良く似た形状をしているが、磨石に利用できる石材ではない上に、石材の中には、大量に金色に変色した雲母が確認できる。胎土に混入する雲母を採取する原石であった可能性も否定できないため、ここに含めた。

13・加工を有しない礫 (1056, 1058, 1062, 2442)

4点が該当する。(1056)は歪な橢円形を呈するチャートの礫である。人為的な加工の痕跡は認められない。礫の質は悪く、石器の材料として持ち込んだとは到底考えられない。ただし、このような大きさの礫が遺跡内に持ち込まれたのは人為的因素と考えられる。(1062, 2442)は、凹みを有する礫である。(1062)は剥離の痕跡が全く認められない。(2442)は、凹みのない部分には穂が走るが、人為的剥離とは認め難い。この2点は、タマネギ状風化によって母岩から離れたと考えられる。凹みも、その際に生じたものであろう。

12・13の礫は、加工の有無に関わらず、(1056～1062)のように、窪地遺構からの出土が多い。そのため、ベット・ストーン、または祭祀的意味合いの強い遺物であったと推測される。

14・軽石製品 (1463・1464, 2443)

3点出土した。(1463)は、全面に研磨を行い、扁平な円形に仕上げたものである。形状は磨石に似るが、石質から磨石としての使用是不可能である。(1464)は、扁平な円盤を呈する。(2443)は、破碎しているが、元は研磨によって扁平な橢円形を呈していたと考えられる。

軽石を加工した石器としては、「浮子」としての使用が挙げられる。(2443)は、破碎した部分に穿孔が行われていた可能性があり、その場合、浮子としての使用も可能であろう。ただし、現段階では推論に過ぎない事から、ここでは軽石製品に留めたい。

15・円盤形石製品 (1465, 2433～2436)

7点出土した。(1465)は、板状に剥がれた砂岩の礫を成形したものである。剥離は急角度で行われている。(2433)は、扁平な礫の周縁と、片面の周縁に研磨を行う。(2434)は、結晶片岩製であり、薄く剥がれた原石の周縁を成形したものである。(2435)は扁平な礫の周縁を加工したものである。(2436)は、節理に沿って剥離したノジュールの端部である。元の形状から、剥離後は、殆ど人為的加工を行う必要はなかったと考えられる。

円盤形石製品は、宮崎県の縄文後期前葉の遺跡でしばしば確認される器種である。結晶片岩を用いることが多いが、その傾向は本遺跡からも窺える。

16・ノジュール (839・840, 857, 863, 1461・1462, 2057, 2414～2421)

17点出土した。(839)は卵形が剥離したものであり、一端に敲打痕も認められる。質量が著しく高く、残存中にマンガンが集積したと考えられる。(863)は卵形であったが、剥離などによって分割されている。(2414)は、使用痕の頻度は認められない。(2415)の器面には(2418)と同じ節理が認められる。平坦面に研磨痕が、周縁に敲打痕が、一端に剥離痕が認められる。比較的軽いため、磨石としての使用は可能と考えられる。(2416)は楕円形であり、両平坦面には擦痕、研磨痕が密に認められる。(2417)は、断面が円形に近い橢円形を呈し、一面に研磨痕が認められる。(2418)は、同心円状の節理が器面にはっきりと表れる。加工は認められない。(2419)は、やや扁平であり、両平坦面に擦痕と研磨痕が認められる。(2420)は小型であり、周縁に研磨を行った。(2421)は、球形に近いが平坦面を有する。平坦面には、節理によって菊花状の文様が形成される。(840, 857, 1461・1462, 2057)は、大形の一群である。(1461)は歪な球形を呈する。(2057)は、元は歪な球形を呈するが、節理に沿って剥離が認められる。(840, 857, 1462)は、芯の部分に凹みが認められるが、全体的に蓮磨形を呈する。(840)は大形の完形品であり、マンガンの集積が著しく、片手で持つのが困難など、高い質量を有している。(857)は鋭利な凹凸が認められる。(1462)は下部が破碎したものである。質量は(857)ほど高くはない。

ノジュールは、田野盆地の縄文早期遺跡より出土する事が多く(田野町教育委員会 2004a)、後・晚期の遺跡からの出土は畠田遺跡の1点のみである。ただし、本遺跡は下層を大幅に削平して形成されていることから、これらの遺物はもともと縄文早期の遺物包含層から掘り出した可能性も否定できない。(839, 2415)は、使用痕の存在から磨石に使用したとも考えられる。研磨痕は(2416, 2419)にも認められるが、同じ部位に擦痕が存在する事から、通常の磨石とは異なる行

方が行われたと考えられる。特に大形の一群は、比重が重すぎ、磨石としては使えない。このことから、ノジュールは、縄文後期でも主に「第二の道具」として使用されたと考えられる。なお、ノジュールは、窪地遺構から多く出土した用途不明の櫛とは異なり、堅穴住居からの出土が多かったことも特徴に挙げられよう。

17・石棒・石刀

19点出土した。いずれも砂岩の櫛を用い、研磨、若しくは敲打によって細長く仕上げたものである。以下の3類に分類したい。

A類・小形のもの (860, 1456~1458, 2422~2426, 2432)

(860)は、板状に剥がれた櫛の素材を殆ど変えることなく、僅かな敲打を行ったものである。(1457, 2423)は、入的な痕跡は認められないものの、石材の類似性からやはり同様の目的を持って遺跡内に持ち込まれたと考えられる。(1456, 2424・2425)は、研磨によりノミ状の尖端部を作出する。石器は成形後折損している。(2422)は、敲打により細長くした後、研磨により小型のノミ状に仕上げる。(1458, 2426)は、人為的な成形により尖端部を作出した者である。風化のため、稜線は明瞭でない。(2432)は、細長い小型の櫛の一端に敲打を、反対側に研磨を行う。

B類・大形のもの (858, 862, 2049, 2427~2429, 2498)

(858)は、断面が三角形であり、全ての棱を研磨によって丸めている。尖端部は折損している。(862)は、人為的痕跡が希薄である。部分的に敲打痕が認められることから、叩き石としての使用も可能であったと考えられるが、全面に微かに研磨痕が認められることから、この類に含めた。(2049)は、扁平な板状の櫛を用いたものであり、その意味ではC類に似るが、加工は表裏面への研磨のみである。なお、調整は砥石と呼ぶには不十分である事から、石棒に含めた。(2427)は、人為的痕跡は認められないが、遺跡内に持ち込まれた理由を考えると、この器種が妥当であろうと判断した。(2428, 2498)は、完成後に上下を欠損し、剥離と研磨により再生したものである。(2428)は、断面が隅丸方形を呈しており、うち3本の棱を研磨によって丸めている。なお、平坦面には敲打痕が多い。(2429)は、石棒として一度完成した後、上下を折損したと考えられる。その際に、節理に沿って剥落が認められる。

C類・扁平かつ先細りのもの (2430・2431)

(2430)は片面を除いて、(2431)は片面の下端部を除いて頭著に研磨を行っている。どちらも欠損しており、欠損前の形状は、正確には不明である。しかし、棒状に細長かったと考えられるため、この器種に含めた。

本遺跡から出土した石棒・石刀のA類は、志布志町中原遺跡における「ノミ型石斧」、藤平小田遺跡における「石斧形石製品」の一部、及び「石ノミ形石器」と同じものである。その形状はノミなどの木材加工工具を想させるが、藤平小田遺跡においてノミとしての用途に疑問符が付けられたように、軟質な石材で使用は不可能であるため、石棒・石刀の一種と判断した。A類は、南九州東部～福島・屋久地域の縄文後期前葉～市米式成立以前に存在したと推測される。B類は比較的大型の一群を一括したが、それでも小ぶりであり、石材は地元で採集されるものばかりであった。また、調整も消極的である。近隣では、丸野第2遺跡（田野町教育委員会 1985）、上の原第1遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2000a）等から線刻を有す石刀が、平畠遺跡から精緻な石刀が出土している。やや遠隔地になると、高千穂町陣内遺跡（宮崎県 1988）から「成興野型石棒」（朝日村教育委員会 2002）が採集されている。このような状況を鑑みると、本遺跡の石棒・石刀は、非常に在地色が強いと言えよう。なお、この器種は南東部土器廐棄場や包含層からの出土が多く、堅穴住居内や窪地遺構内の出土はごく僅かであった。

18・玉類 (1500, 2447~2451)

追加資料も含めると8点である。(1500)は、高師小僧が輪切り状に剥落したものであり、芯が空洞となったものである。(2448)は、黒色の石材を用い、表裏両面から穿孔が行われたものである。片側縁には、擦痕が頭著に認められる。(2450)は、元はノジュールであり、剥落し、芯の部分が消失し孔となったものである。(2451)は、硬質頁岩に似た石質であり、櫛中の自然にできた孔を利用した石器を製作するために剥離を行ったと考えられる。(2447)は瑪瑙である。表面は細かく研磨されており、擦痕は全く認められない。また、穿孔も認められない。(2449)は、黒色の櫛を用いて前面

を研磨し、断面が一部開口する管玉である。

(1500, 2450・2451) は自然に空いたものである。人工的に空いた2点のうち、(2448) は、表裏面の穿孔が一致しておらず、穿孔に不慣れな製作者の姿を垣間見ることができる。また、Eとして用いるに適した瑪瑙に穿孔が行われないことも特徴と言える。

19・異形石製品 (2446)

1点出土したほか、遺跡範囲確認トレンチからも1点出土した。(2446) は、西北九州産の黒曜石を用いており、細かな調整により、上下の端部に矢印状の突起を設けたものである。片面の稜上には、研磨による摩滅が認められ、上下の端部には擦痕が認められる。擦痕は長軸に近い方向に認められる。本書における(3757) はチャート製であり、細かな剥離によって彎曲した矢印状に仕上げられる。僅かであるが、こちらも稜上に研磨による摩滅が認められる。この石器は、類例が上加世田遺跡から出土していることから、後期末～晩期の所産と考えられる。

20・その他の用途不明石器 (861, 1124, 2382)

3点が該当する。(861) は、薄く剥がれた板状の礫であり、片側縁部に粗い研磨による擦痕が認められる。(1124, 2382) の形状は、切目石錐に類似する。しかし(1124) は、石錐とするには大ぶりであり、成形にあたって剥離を積極的に行うことや、成形後、熱により変色していること、更に非日常用具の多く出土した堅穴状遺物から出土している点から、石錐ではなく、石棒のような用途であったと考えられる。また(2382) は人念な研磨が行われていることから、釣具または海物具としての利用よりも、E類として使用したと考えられる。

小結

剥片石器は、製品だけでなく、剥片類の出土自体少なかった。このことは、調査区内で石器製作がさほど行われなかつたことを示している。磨石や石斧など、礫石器の出土量は、剥片石器に比べると多かった。また、用途不明石器は出土量こそ少ないものの、種類が多いことは特徴に挙げられよう。

石材に目を向けると、チャートが最も多く、ホルンフェルス類、砂岩が続く。また、石錐は黒曜石、石匙はサスカイト、磨石は砂岩、尾鈎酸性岩の割合が比較的高く¹⁾、地元の石材を中心としながらも、器種に応じて石材を選択していた姿が窺える。

(註)

1)：ただし、宮崎県埋蔵文化財センターの松本茂氏から、本遺跡の尾鈎酸性岩は、縄文早期で認められる典型的例とは異なるため、原产地が違うとご指摘いただいた。

第VII章 検出遺構

検出遺構は第48集で既に触れたが、その後の資料整理により新たに判明した点も多々見られるため、ここで再び論じることにする。

本遺跡からは、竪穴住居113軒、掘立柱建物35棟、大土木工事、中央配石、竪穴状遺構4基、道路状遺構2本、埋葬2基、そして多くの土坑、ピットが検出された。

検出遺構の大部分が縄文後期であることから、遺構検出面は本来Ⅳ層（御池火山灰層）上位であったはずである。しかし、御池火山灰は、遺構覆土にも高い密度で含まれることが多く、Ⅳ層上面における遺構の判別は不可能であった。よってⅤ層（縄文後・晚期遺物包含層）、崖地遺構内はⅡ層（文明降下軽石層）まで重機で掘り下げ、ジョレンで確認したが、遺構検出面は、Ⅹ層（アカホヤ火山灰層）上面であり、窪地遺構内は遺構底面で検出した。

第1節 竪穴住居

1・検出状況について

検出面は、上記のようにアカホヤ火山灰上面まで下げたため、実際の掘り込みは、図面よりも深かったはずである。

調査中、困難を極めたのは、床面の判断であった。覆土は御池火山灰や早期ローム層が多く含まれていたが、大部分は硬化面を持たない上に、床面の多くも早期ローム層であったために、どこが床面なのか見極めは困難であった。その上、北側住居群の多くは、削平によって覆土の大半を消失していたため、新旧関係の把握はほぼ不可能であった。

2・平面形について

円形、方形、橢円形、不定形が確認された。主体は方形であり、円形は数えるほどである。住居の大きさはややばらつきがあり、小型のもの、大型のもの、その中間の3種に分けることができる。ただし、この分類は廻くまで本遺跡内の相対的基準に過ぎない。

時期的検討も加えたい。時期の認定基準は6・時期の項で述べるが、方形は2・3期から8・9期に相当し、円形は5～7期以降が多い。かつて前追亮一氏は、九州の竪穴住居の平面形を検討する中で、市来式を画期として、方形から円形に変遷するとした（前追 1991）。また皆付和樹氏は、宮崎県内の竪穴住居の変遷を概観する中で、前業は方形と円形が拮抗し、中業は円形が増加するとした（九州縄文研究会 2001）。本野原遺跡の場合、中業に若干円形が多くなる傾向にあるものの、方形が一貫して主体を成す。

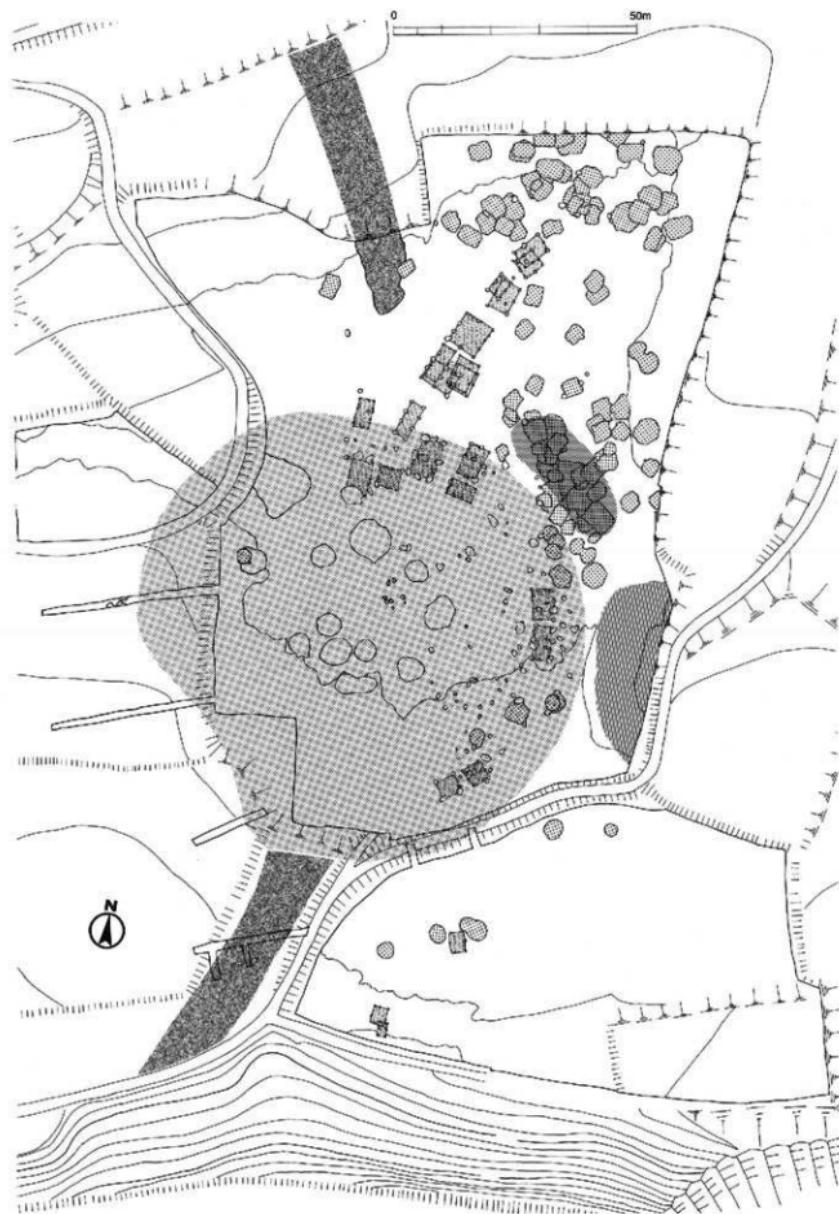
なお、晚期に相当する2軒の竪穴住居はいずれも方形であり、九州内の傾向に従う。

3・内部構造について

壁や床と同様に、内部構造も不明瞭であった。

中央に土坑を伴う竪穴は半数近くに上ったが、掘り込みは浅く、覆土の炭化物や焼土も微～少量と、包含層中に含まれる混入密度と大差ない。故にこの土坑が、暖房、調理、照明施設としての「炉」である根拠は乏しいが、(SA-13)では、北側壁面から焼土の集積も確認されている。元々地床炉で、住居廻船時に焼土を取り除いたのであれば、中央土坑内の炭の少なさも説明可能であろう。そうした事情も踏まえ、現時点では、中央土坑が炉である可能性は保留したい。中央土坑を持つ竪穴住居の構築時期は3～8期に相当し、ピークは4～7期である。一方、半分近くに上る、中央土坑を持たない竪穴住居は、同時に出土遺物も少ない傾向にあるため、時期の把握は困難だが、おおよそ竪穴住居最盛期の3～5期に多い傾向にある。

遺構内や、その周辺における黒色土の集中は、柱穴である可能性を考慮し、底が見えるまで掘り下げた。一定の深さを作うものは柱穴と判断したが、柱穴の径が30cmを超えるものはなかった。実際に用いられた柱は、必然的に柱穴より細



第56図 本野原遺跡遺構配置図

	出土遺物の時期														プラン	中央 土坑	両脇 ピット	硬化 面	貼床	一括 施設	石皿	分類
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14								
SA-01															円形	○	×	×	×	×	小	
SA-03															円形	×	×	×	×	×		
SA-04															方形	×	×	×	×	×		
SA-05															橢円形	×	×	×	×	×	小	
SA-06															円形	○	○	×	×	×	大	
SA-07															方形	×	×	×	×	×	小	
SA-08															不定形	○	○	×	×	○	大	
SA-09															方形	×	×	×	×	○	小	
SA-10															方形	△	○	×	×	×	小	
SA-11															不定形	○	×	○	×	×	2 大	
SA-12															方形	×	×	×	×	○	3 小	
SA-13															方形	○	×	×	×	×	1	
SA-14															円形	?	?	×	×	×		
SA-15															方形	○	×	×	×	×	小	
SA-16															不明	○	×	×	×	×		
SA-17															方形	×	×	×	×	○	小	
SA-18															方形	○	○	×	×	○	大	
SA-19															不明	×	×	×	×	×		
SA-20															方形	×	×	×	×	○	1 小	
SA-21															方形	○	×	×	×	○	小	
SA-22															方形	?	×	×	×	○		
SA-23															方形	?	?	×	×	○	1	
SA-24															方形	×	×	×	×	○	小	
SA-25															方形	○	×	×	○	○		
SA-26															方形	×	?	○	×	○	3	
SA-27															方形	×	×	○	○	○		
SA-28															方形	○	×	○	○	○		
SA-29															方形	×	×	○	○	○	1	
SA-30															方形	×	○	○	○	○		
SA-31															方形	×	○	○	○	○		
SA-32															不定形	×	×	○	○	○	2 小	
SA-33															不定形	○	×	○	○	○		
SA-34															不定形	○	○	○	○	○		
SA-35															方形	○	○	○	○	○	3	
SA-36															方形	○	○	○	○	○	1	
SA-37															白形	○	×	○	○	○		
SA-38															方形	○	×	○	○	○		
SA-39															方形	×	○	○	○	○		
SA-40															不明	×	○	○	○	○	小	
SA-41															方形	○	×	○	○	○		
SA-42															方形	?	?	○	○	○		
SA-43															方形	×	○	○	○	○		
SA-44															不明	×	○	○	○	○	小	
SA-45															方形	○	×	○	○	○	多	
SA-46															方形	?	?	○	○	○		
SA-47															不明	○	×	○	○	○		
SA-48															方形	○	×	○	○	○	小	
SA-49															方形	○	×	○	○	○		
SA-50															不明	?	?	○	○	○	小	
SA-51															方形	○	×	○	○	○		
SA-52															方形	○	○	○	○	○		
SA-53															不定形	2	2	×	○	○	1 大	
SA-54															方形	○	○	○	○	○	1 小	
SA-55															方形	?	?	○	○	○		
SA-56															方形	×	○	○	○	○		
SA-57															不明	×	○	○	○	○	大	
SA-58															方形	×	○	○	○	○		
SA-59															方形	×	○	○	○	○		
SA-60															不定形	○	×	○	○	○	1	

第19表 積穴住居時期照合表(1)

(出土遺物のトーン：濃=多、薄=少)

	出土遺物の時期														プラン	中央 土坑	両脇 土坑	硬化 面	點床	一括 廻棄	石墨	分類
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14								
SA-61															不明	×	×	×	×	×	×	
SA-62															不明	○	○	×	×	×	×	
SA-63															方形	○	○	×	○	×	×	1
SA-64															不明	○	○	×	×	×	×	
SA-65															不明	○	×	×	×	×	×	1
SA-66															不明	○	×	○	×	×	×	大
SA-67															方形	×	×	○	×	×	×	
SA-68															不明	○	×	×	×	×	×	
SA-69															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-70															方形	×	×	×	×	×	×	2 小
SA-71															方形	×	×	×	×	×	1 小	
SA-72															不定形	×	×	×	×	○	○	
SA-73															方形	?	×	×	×	×	×	
SA-74															方形	?	×	×	×	×	×	
SA-75															方形	?	?	×	×	×	×	
SA-76															方形	○	×	×	×	×	×	
SA-77															方形	○	×	○	×	○	○	小
SA-78															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-79															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-80															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-81															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-82															方形	○	×	×	×	×	×	小
SA-83															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-84															輪円形	×	×	×	×	×	×	
SA-85															方形	?	×	×	×	×	×	
SA-86															方形	×	×	×	×	○	○	小
SA-87															方形	?	?	×	×	×	1	
SA-88															方形	○	○	×	×	×	×	
SA-89															方形	○	×	×	×	×	×	
SA-90															方形	?	×	×	×	×	1	
SA-91															輪円形	○	×	×	×	×	×	
SA-92															輪円形	×	×	×	×	×	×	
SA-93															方形	?	×	×	×	×	×	
SA-94															方形	?	×	×	×	×	1	
SA-95															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-96															不定形	○	×	×	×	×	×	
SA-97															方形	?	×	×	×	×	1	大
SA-98															方形	?	×	×	×	×	×	
SA-99															不明	?	×	×	×	×	×	
SA-100															不定形	○	×	×	×	×	1 大	
SA-101															方形	?	×	×	×	×	1	
SA-102															方形	×	×	×	×	×	1	
SA-103															方形	×	×	×	×	×	×	
SA-104															不明	?	?	×	×	×	×	
SA-105															不明	?	?	?	×	×	×	
SA-106															不明	○	×	×	×	×	×	
SA-107															不明	○	×	×	×	×	×	
SA-108															円形	?	?	?	?	?	?	
SA-109															円形	?	?	?	?	?	?	
SA-110															方形	?	?	?	?	?	?	
SA-111															円形	?	?	?	?	?	?	
SA-112															円形	?	?	?	?	?	?	
SA-113															方形	?	?	?	?	?	?	
SA-114															方形	?	?	?	?	?	?	

第20表 壁穴住居時期総合表 (2)

(出土遺物のトーン: 深 = 多、薄 = 少)

くなるが、その程度の太さで扉枠の重量が支えられたのか疑問を覚えずにはいられない。更に、柱穴の配置は規則性に乏しく、主柱穴どころか柱穴のない堅穴住居も少なくない。東側住居群は、造構集中による判断の難しさも一因しているのだろうが、単独で存在する住居も同様の傾向にあり、調査中困惑することも少なくなかった。

そうした中、中期末～後期前葉にかけて、中央部及びその付近に浅い土坑を設け、その両脇に小ぶりのピットを配置するものが12軒確認された。これは、近年南九州の縄文後期集落で一定量確認される内部構造である（水ノ江・2002）。なお、中四国地域の中期末葉に卓越する堅穴住居も同じ構造であり、関連性が注目される（富井・2000）。また、円形プランに限定されるが、縄文晚期から弥生時代初期の北部九州でも、同じ内部構造の堅穴住居を認めることができる。これまで、韓国の検出例との関連から「松菊里型住居」と呼ばれていた住居がそれであるが、近年松菊里遺跡より遡る事が明らかになるにつれ、九州独自のものという認識が強まっており、水ノ江和同氏は、松菊里型住居が後期の「中央土坑二本柱」の系譜上にある可能性を示唆している（水ノ江・2001、前追・水ノ江・2001）。堅穴住居の変遷を考える上で注目されるが、水ノ江氏自身、その系譜を安易に縄文住居に求めるのは早計としており、本遺跡でも、その関連性について有意義な提言ができないことから、紹介するに留めたい。

そうした状況にあって、(SA-03) (SA-11) (SA-14) の存在は際立っている。(SA-03) は円形で、中央に一本、周間に5本の主柱穴が一定間隔で巡る。(SA-14) も円形である。(SA-03) に切られているため柱穴の配置は不明であるが、北側には張り出し部を作っている。(SA-11) は柱穴がプランの外側で多く確認され、中央土坑は人ぶりであり、上坑内やその周辺からは小型土器の底部や脚台が出土するなど、遺物も特殊性を持つ。これらの堅穴住居は、造りも去る事ながら、他の堅穴住居集中域より一際離れた、大上木工事による削平部（若しくは環状掘立柱建物群）と盛土部の中间地点から検出された点も注意すべきであろう。なお、(SA-03) と (SA-14) は、(SA-14→SA-03) の順で構築されている。重複部分が多いことから、同一地点で建て直されたものと考えられる。また、(SA-11) はアカホヤ火山灰を床面に持ちながら、東部などには明確な硬化面が形成されており、使用期間は比較的長かったと考えられる。以上から、これらの堅穴住居は特殊性を帯びており、他の堅穴住居とは一線を画していたと推測される。なお、(SA-03) と同様に張り出し部を持つと推測される堅穴住居は、上の原第2遺跡から可能性例が検出されているが¹⁰、その住居も石組炉を伴う上、線刻を有する石刀を出土した35号土坑と同時性が叫えられており、特殊性を醸し出している。

住居内は、石棒や埋甕、付帯施設はいずれも行われず、石皿が多く検出されるのみであったが、(SA-55) や (SA-60) では、石皿が土坑内に埋まつた状態で検出された。貼床を伴う住居はごく少数である。恐らく、床面が早期ローム層である場合が多く、貼床の必要がなかったためであろう。また、使用と共に形成されるはずの硬化面も、伴わないものが多い。特に、軟質なアカホヤ火山灰層を床面とする住居は、東側住居群を中心として多く検出されているにも関わらず、硬化面が全く認められなかった。これは、住居の使用年数が短かったためであろう。

4・覆土について

北側住居群は、造構上部が削平を受けていたために、新旧関係の把握はほぼ不可能であった。また、東側住居群の覆土は御池火山灰であったが、その密度は変化に乏しく、何とか分層は行ったものの、新旧関係を求める根拠としては弱いと言わざるを得ない。

堅穴住居の覆土の傾向としては、

- 1・自然の状態では流逝しにくいローム層が混入すること
 - 2・本来下層に包含する遺物が混入すること
 - 3・東側住居群の主体である後期前葉は、窪地造構の構築により相対的に標高が高くなり、地形から流入を想定するのが困難であること
 - 4・東側住居群は短期間で形成されており、次の堅穴住居を建てる前に埋める必要があったこと
- が挙げられる。理屈は自然に行われたものではなく、人為的と解釈するのが妥当であろう。
- また、埋土の出自は、
- 1・堅穴住居構築時に生じた土を周囲などに用いた後、廃絶時に埋め戻した

2・窪地を埋めるために第三地から持つて来られた

という2つの可能性を想定する事ができる。東側住居群は、アカホヤ火山灰層を床面に持ちながら、下位の早期ローム層が一定量認められたり、床面が早期ローム層に達しているながら、覆土の大部分が御池火山灰だったりと、掘った土と覆土が合わないケースも多い。少なくとも東側住居群では、住居廃絶後の窪地は、第三地から持つて来た土によって埋めたと考えられる。九州では、遺構復元の堆積状況への関心が低いが、遠隔地の例としては、本野原遺跡と同様に大土木工事を伴う千葉県二俣貝塚において、ローム層によって堅穴住居を埋めたとされる例が紹介されており、同県加茂利南貝塚等では貝層で埋めた例もある（吉野 2004）。なお、覆土中に含まれる炭の密度は、包含層よりも若干多い程度である上に、全て粒子状であることから、住居廃絶時の「火入れ」については肯定し難い。

5・出土遺物について

覆土からは多くの遺物が出土した。しかし、床面付近からの出土はごく僅かであり、殆どが小片であった。また、多くの土器が確認された覆土上層の主体もやはり小片であった。これは、堅穴住居の廃絶時に、土器を引き上げ、住居を埋める際に、土器片が混入したためであろう。

その中で、(SA-08, 72, 86) の覆土上層からは、残存状態が良好な個体が複数出土しており、半ば埋没した住居廃絶地の窪地に一括発掘を行ったと考えられる。ただし、良好な個体でも全形の半分以下であり、また2~4個体程度であるため、いわゆる「吹上バターン」と呼べる規模ではない。なお、時期は2期に限定される。

一方、(SA-49) で、一ヶ所に積み上げられた状態で出土した土器片は(395)、接合によりほぼ一個体に復元された。床面上から出土したため、住居廃絶時にまとめて発掘したと考えられる。

6・時期について

上述の出土状況により、堅穴住居の時期は、想定が非常に困難である。しかし、覆土上層の出土遺物が多く、かつ出土遺物に時期偏りが認められた場合は、その遺物を以ってある程度の時期の推定はできると考えた。その際、床面上から出土した遺物に関しては、覆土中の出土遺物に優先させた¹¹。このような状況を踏まえ、第19・20表のとおり時期を推定した。

第Ⅲ章の変遷によると、堅穴住居は2期より認められ、5期には最盛期を迎えていた事が分かる。しかし、堅穴住居の軒数はそれ以降急速に減少を始め、後期後葉には姿を消す。再び堅穴住居が出現するのは晩期中葉以降だが、軒数は僅か2軒に留まる。分布を見ると、2・3期は調査区の東側斜面と北側に散在する状態であったが、4期から東側住居群へ集中し始め、5期で東側住居群が最も集中し、以後、東側住居群の崩壊と共に、堅穴住居も検出されなくなるという変遷が見える。

7・近隣との比較

平面形は、既に述べたとおりである。内部構造のうち、地床炉は、九州の縄文住居では一般的であり、包含層中に比べ乏しい床面上の遺物出土、住居の著しい密集も、近隣の丸野第2遺跡をはじめ（田野町教育委員会 1990）、石河内本村遺跡（本城町）（木城町教育委員会 2000）、竹ノ内遺跡（清武町）（宮崎県埋蔵文化財センター 2000c）等で確認されてきた。このように、本野原遺跡で検出された堅穴住居の傾向は、何軒かの例外を除くと、東南九州における堅穴住居そのものといえる。

第2節 掘立柱建物群

21棟検出した。調査時に認識した掘立柱建物は、(SB-03~05) の3棟のみであったが、調査後、土坑の並びを基に18棟を追加した。

なお、掘立柱建物は、C区北側より列状に検出された一群と、C区南側より環状に検出された一群、そしてそれ以外に

SB	P	土坑No.	出土遺物の時期													長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14			
03	1	-															89	74	66
	2	-															107	88	94
	3	-															116	81	74
	4	-															108	68	100
	5	-															92	86	64
	6	-															98	97	120
	7	-															96	86	102
	8	-															111	93	88
04	1	-															176	103	118
	2	-															161	105	94
	3	-															122	106	76
	4	-															154	120	100
	5	-															114	95	116
	6	-															116	114	122
	7	-															135	96	124
	8	-															143	113	116
	9	-															126	114	120
05	1	-															67	59	58
	2	-															89	61	78
	3	-															67	62	54
	4	-															81	74	74
	5	-															98	91	-
	6	-															104	72	82
	7	-															134	96	104
	8	-															110	102	120
	9	-															83	70	-
	10	-															93	93	94
	11	-															154	100	108
	12	-															176	90	92
15	1	286															81	54	-
	2	-															32	32	-
	3	285															88	86	34
	4	191															32	27	45
	5	-															40	35	-
	6	281															98	77	35
	7	282															89	48	41
	8	283															142	80	85
16	1	284															72	54	-
	2	-															35	28	-
	3	189															68	36	56
	4	278															56	48	69
	5	277															72	63	113
	6	276															56	51	53
	7	-															27	27	-
17	8	280															64	48	87
	1	257															64	56	70
	2	262															64	56	48
	3	259															64	48	78
	4	238															77	65	50
	5	255															75	64	43
18	6	256															80	64	73
	1	-															72	72	-
	2	342															68	51	38
	3	-															52	48	-
	4	261															88	64	100
	5	200															59	46	128
19	6	-															32	32	-
	1	-															35	35	-
	2	-															43	28	-
	3	-															32	28	-
	4	-															28	24	-
	5	-															30	25	-
	6	-															32	27	-
	7	-															35	30	-
	8	-															28	28	-

第21表 列状掘立柱建物群時期照合表(1)

(出土遺物のトーン: 深=多、薄=少)

遺構名		出土遺物の時期													長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	
SB	P 土坑No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	晩		
20	1	74														35	27	53
	2	—														28	19	
	3	—														32	20	
	4	80														28	24	68
	5	—														36	28	
	6	—														—		
21	1	—														44	27	
	2	—														28	27	
	3	72														35	32	34
	4	—														24	24	
	5	—														24	24	
	6	—														27	22	
	7	115														22	22	29
	8	65														25	22	35
22	1	—														28	28	
	2	—														—	—	
	3	—														—	—	
	4	214														35	2	34
	5	—														35	35	
	6	—														—	—	
	7	—														28	27	
	8	—														28	27	

第22表 列状掘立柱建物群時期照合表(2)

(出土遺物のトーン: 濃=多、薄=少)

遺構名		出土遺物の時期													長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)	
SB	P 土坑No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	晩		
23	1	—														22	22	
	2	—														32	24	
	3	—														36	24	
	4	—														36	28	
	5	—														35	32	
	6	—														—	—	
24	7	—														—	—	
	8	—														32	28	
	9	89														38	32	41
	10	—														35	28	
	1	—														32	27	
	2	64														40	36	100
25	3	—														44	36	
	4	93														38	36	83
	5	—														—	—	
	6	—														—	—	
	1	125														104	64	51
	2	110														60	56	75
26	3	135														72	64	53
	4	105														66	64	33
	5	—														56	56	
	6	—														60	38	
	1	109														96	64	41
	2	84														72	67	60
27	3	49														48	40	111
	4	80														72	52	68
	5	90														89	84	32
	6	82														128	72	80
	7	365														54	32	—
	8	—														80	54	
28	9	73														174	148	79

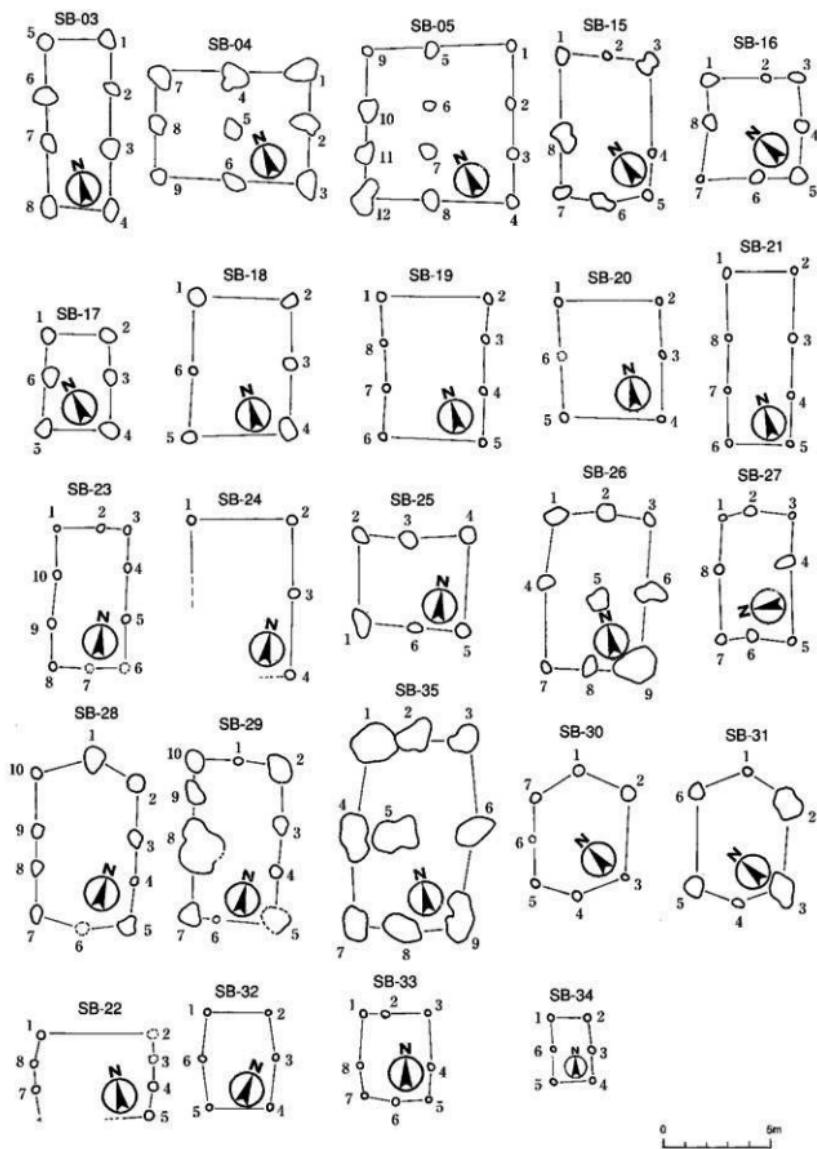
第23表 環状掘立柱建物群時期照合表(1)

(出土遺物のトーン: 濃=多、薄=少)

遺構名	土坑No.	出土重物の時期														長さ (cm)	幅 (cm)	深さ (cm)
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14			
27	SB P	88														28	22	82
	SC	—														48	35	
	1	—														24	24	
	2	—														76	44	
	3	—														28	28	46
	4	—														48	43	—
	5	36														40	40	
	6	362														36	36	
28	7	—														107	83	74
	8	—														67	67	81
	1	43														70	56	74
	2	38														35	28	88
	3	249														75	70	75
	4	345														—	—	—
	5	215														79	44	87
	6	—														59	48	90
29	7	212														60	48	—
	8	248														44	40	81
	9	147														35	27	—
	10	33														113	88	70
	1	139														75	60	84
	2	252														51	48	50
	3	206														116	108	122
	4	205														90	46	83
30	5	29														89	86	128
	6	202														99	96	—
	7	200														91	68	86
	8	—														88	72	89
	9	210														40	40	—
	10	211														59	57	38
	1	273														24	24	10
	2	232														40	35	38
31	3	270														32	32	—
	4	13														—	—	—
	5	148														36	36	—
	6	—														36	32	38
	7	—														120	110	30
	1	13														128	103	47
	2	7														40	36	44
	3	6														88	76	47
32	4	20														46	46	—
	5	169														200	148	106
	6	220														140	131	103
	1	117														125	115	56
	2	118														192	108	87
	3	100														184	131	110
	4	96														128	112	87
	5	91														137	105	90
33	6	102														66	53	33
	7	104														141	130	83
	8	105														90	55	55
	9	93														217	113	77
	8	94																
	9	133																

第24表 環状掘立柱建物群時期照合表(2)

(出土遺物のトーン: 濃=多、薄=少)



第57図 捕立柱建物一覧

三分することができる。以下、それぞれ説明を行いたい。

1・列状掘立柱建物 (SB-03~05, 15~21)

全体的に、磁北より 10° ~ 20° 程東側に傾いて並ぶ。掘立柱建物は、現代の耕作により消失した馬の鞍状の尾根に沿って展開している。掘立柱建物の並びは、カーブの強さから2列に分けることができる。即ち、カーブの弱い (SB-03~05, 21, 17, 15) と、強い (SB-20, 19, 18, 16) である。ここでは、前者をA列、後者をB列と仮称したい。A列のうち (SB-03, 04, 05, 17, 15) は間隔が一定で、方向も規則性があることから、重複する (SB-21) 以外は近い時期に存在したと推測される一方、B列は間隔や方向が一定せず、(SB-19) と (SB-20) は重複することから、複数の時期にわたって形成されたと考えられる。またA列は、重複する (SB-21) を除き、柱穴が一定の太さと深さを有するが、B列は (SB-18) 以外、柱穴が全て細く浅い。

石井寛氏の分類を用いると (石井 1989)、A列のうち、(SB-03) は A-2・4種、(SB-04) は B群、(SB-21) は A-2・4種、(SB-17) は A-2・3種、(SB-15) は A-3・3種となる。ただ、(SB-05) は長軸に4基、短軸に3基並ぶものの、北側の1列と東側の1列は柱穴が小ぶりであるばかりでなく、間隔も他より広い。このような立ち並びを持つ掘立柱建物は、これまで類例がないようである。一方、B列のうち、(SB-20) は、南側の検出は不十分であるが A-3・3種、(SB-19) はやや歪ながら A-3・3種、(SB-18) は A-2・3種、(SB-16) は A-3・3種となる。

(SB-03) のP-3では、柱穴内に多数の礫 (石皿) が詰め込まれていた。これは、それまで柱を固定するために使用された檻を一ヶ所に集めたと考えられ、石井氏の述べる「精神性が強く顕現した遺構」の可能性もある。(石井 1999) なお、こうした例は、新潟県城之郷遺跡でも報告されている (新潟県教育委員会 1991)。

掘立柱建物の並ぶ一帯は、既に述べたように、削平によって早期ローム層中位まで削られている。そのため、実際の柱穴は、最も削平された (SB-03~05) 付近は検出された深さより更に30~50cm深く、100~170cmに達していたと考えられる。検出面が消失しているため、列状掘立柱建物群が、本来かや堅穴を伴っていた可能性も否定できないが、現時点での検証是不可能であるため、今後、類例を見て判断したい。

列状の遺構配置は、東北地方の縄文前・中期においてしばしば見られる配置であり (小島・小林 2001b)、本野原遺跡の列状掘立柱建物群は、その中の「縦列配置」にあたる。ただし、当該時期における掘立柱建物の機能は不明であるため、縦列集落とは断定できない。なお、既に述べたとおり、本野原遺跡の列状掘立柱建物は、「馬の鞍状」の尾根に沿っているが、これに類似した遺構配置は、秋田県太田遺跡から報告されている (小島・小林 2001a)。

2・環状掘立柱建物群 (SB-23~31, 35)

調査中は「環状土坑群」の一部であったが、その後、土坑の分布からプランを検討した結果、10軒の掘立柱建物を確認した。中央配石の傍かに南を中心に、環状に展開する。D区は検出作業中であり不明であるが、土坑自体が多く検出されたため、C区同様に掘立柱建物が巡っていたと推測される。(SB-27~31) は環状土坑群の弧に長軸が平行している一方、(SB-23~26, 35) は短軸が平行する。(SB-28, 29) と (SB-30, 31) は、重複することなく2棟ずつ並んでおり、同時期、あるいは時期が近かったようである。ただし、(SB-29) 内から3基の柱穴の並びが確認されたように、掘立柱建物は幾つかの時期にわたって建設されながら存在したと考えられる。柱穴サイズは、(SB-25, 28, 29) は大きいが、それ以外は小さい。なお、(SB-35) は、配置から掘立柱建物と判断したが、一部オーバーハングする土坑や、堅果類の炭化物が検出された土坑も複数認められることから、群在性土坑である可能性も否定できない。なお、不十分な検出作業により、平面図には殆ど落書きにならなかったが、環状掘立柱建物群と同じ軌道上に、無数の小ピットが確認されたことも触れておきたい。これらのピットも、掘立柱建物の柱穴である可能性が想定されよう。

再び石井氏の分類を用いると、(SB-23) は A-2・4種、(SB-24) は、不明な点を残しながらも A-2・3種である可能性が高く、(SB-25) は A-3・3種、(SB-26) は B群、(SB-27) は A-3・3種、(SB-28, 29) は A-3・3種、(SB-30, 31) は、論考中にはないが A-3・2種となるだろうか。(SB-28, 29) や (SB-30, 31) といった、隣合う掘立柱建物が同じ構造である点は興味深い。

環状掘立柱建物群は、東日本の縄文遺跡では、青森県上野尻遺跡、秋田県高屋館遺跡、岩手県西田遺跡、新潟県五丁歩

遺跡、神奈川県ナデッ原遺跡、神隱丸山遺跡、小丸遺跡等、多数挙げられる（石井 1998）。秋田県の万座塙状列石では、環状列石と掘立柱建物が連動して検出されている。施設の機能としては、武仮屋等祭祀儀礼に伴う施設とする説と（秋元 1989, 2005）、住居とする説（石井 2004）の両方が出されている。

3・その他の掘立柱建物（SB-32～34）

いずれも調査後、ピットの配列を基に特定したものである。検出位置は、いずれも窪地遺構南部の緩やかな傾斜面で検出した。石井氏の分類を用いれば、（SB-32, 33）はA-2・3種、（SB-34）はA-2・2種となる。この3棟は、環状掘立柱建物群の弧に短軸が接しており、環状掘立柱建物群との関連性を窺わせる。なお、これらの柱穴は、調査中ピットと認識していたように、柱穴サイズはいずれも小ぶりである。

掘立柱建物の柱穴覆土は、C区で検出されたものは早期ローム、牛のスネローム、粘質土のブロック等、窪地遺構南側はアカホヤ上位の黒色土であり、概ね掘り込んだ土と対応していた。このほか、（SB-03～05）を中心に、焼土、骨粉、堅果類の炭化物の混入も確認された。特に焼土と骨粉は、柱穴によってはブロック状に混入していた。なお、柱を立てた後は、柱穴を突き固めるとされているが、柱穴覆土の硬化は（SB-05）のP-1～4のみであるうえ、柱痕の残存も確認されなかった。更に柱穴サイズは、一部を除いて非常に小さいものが目立った。特にその他の掘立柱建物とした一群や、掘立柱建物と認識するには至らなかったものの、環状土坑群から検出された無数のピットの径は、いずれも15～20cmである。堅穴住居同様、重量が支えられたのか、という疑問は拭えない。

掘立柱建物の柱穴から遺物が出土するのはごく稀である上、覆土内に偶然混入したであろう土器片から、掘立柱建物の時期を推定するのはやや強引であるが、遺構の下限を推定する上で、遺構内出土遺物が最も有力であるのもまた事実である。そこで、一定量出しし、かつ時期のまとまりが認められたものについてのみ、時期を推定した。これを纏めたものが第21～24表である。これを見ると、掘立柱建物は4期より出現し、10～13期まで存続する可能性が導き出された。また、主体的時期は、列状掘立柱建物群のA列は5期、環状掘立柱建物群は8・9期という前後関係が窺える。なお、列状掘立柱建物群のB列は、良好な出土遺物に恵まれなかったため、時期は不明である。

掘立柱建物群の事例としては、近隣では南種子町藤平小田遺跡から検出された、半円或いは馬蹄形に配された掘立柱建物群が挙げられるが（石井 1999b），現時点では西日本における類例に乏しい。しかし、十坑群、ピット群の報告例は増加していることから、今後が注目される。

第3節 大土工事

C・D区南部からは、大規模な土層消失が認められた。土層断面の観察から、消失は、E区南東部やD区西側の、径約100mの範囲に及ぶ。消失部は、中心へ向かうほど深い土層が露出しており、最も土層消失の激しい中央部では、阿多火砕流の漸移層が露出していた。掘削により削られた土層は深さ約1～1.5m、総土量は少なくとも3000m³と見積られる。

1・平面形について

C区では、遺構検出面であるアカホヤ火山灰層の消失という形で認められた。消失範囲は、東西方向は、G-1～3トレチや、B-C区間に設定したトレチ等から、凡そ径約100mに及ぶと推測される。また、西南部のG-2トレチとG-3トレチの間は、大きく抉れていたことが明らかとなっている。一方、南北方向は、開墾や耕作に伴う削平の影響を受けているため、径約100mと考えられるものの、東西方向ほど明確ではない。

2・断面形について

アカホヤ火山灰層の残存部分を繋ぎ、上層消失前の地形を想定すると、北側は尾根や谷の始点を含むものの、全体的には南西から北東へ、緩かな傾斜面を呈していたようである。窪地遺構は、そうした自然地形に沿って展開するが、土層断

面を見ると、掘削行為は造構内側の方が急角度である。なお、G-2・3トレンチにおける造構外縁は急角度で削り込まれる一方で、G-1トレンチの角度は緩やかである。平面形における南西部の抉りは外縁部における掘削の角度によると見える。

3・窪地造構内の土層堆積について

窪地造構底面には、縄文後・晚期遺物包含層（VI層）の堆積が認められた。このうちG-1トレンチは特殊であり、1m近い堆積層からは、後期前葉から後葉に至る上器の小片が多く出土した。その他の部分は、一般的に標高の低い造構東側により分厚く堆積する傾向にあり、第1トレンチで60cm、第3トレンチで40cmあった。一方、窪地造構中心部は堆積が10~15cm程度であった。層中の出土土器の多くは後期後葉の丸尾式や納灰向式、晚期の黒色磨研土器で、また、用途不明の円盤が出土するなど、特殊な遺物の出土も多い。

窪地造構内の土層堆積は、何故差が生じたのであろうか。窪地造構内の縄文後期相当層が外縁により分厚く堆積する状況は、窪地造構中央の埋没土を外側に押しやった結果、と考えることもできる。他より標高の高いG-1トレンチにより分厚く堆積する状況からは、そのような想定も有効であろう。ただし、土層断面図において、外側に押しやった痕跡は認められなかったことから、推論として提示するに留めたい。

4・整地に伴う造構の破壊について

整地によって削平された上の高さは、窪地造構中央部では1~1.5mに達する。既に述べたとおり、整地が行われる前のC、D区南側は、尾根や谷の始点を含む傾斜面と推測されることから、窪地造構内に構築された造構は、殆ど消滅したと考えられる。福島県猪尻貝塚では、整地による造構破壊の模様が細かく再現されているが（小高町教育委員会 2005）、本遺跡では、消滅した造構に対する検討は難しいため保留したい。ただ、削半は縄文早期のローム層にも及んでいることから、縄文早期の遺物包含層や集石造構を破壊したことは確かであろう。

5・盛土造構について

斜面部の堆積は、基本土層で記したように、下層の黒色土層と上層の茶褐色土層に二分できる。下層は混入物の少ない黒色土であり、斜面上に堆積する。上層は茶褐色土であり、層中にローム層や粘質土層のブロックを多く含む。削平によって消失した上のブロックに対応し、斜面上部はほど分厚く堆積していた。上位は闇壁時に削平されているため、本来の堆積状況は不明であるが、斜面上位を頂点として、堤状を呈していた可能性もある。

造構中の出土土器は、下層は5期~6・7期を中心とした中期末~後期前葉の、復元可能な個体が多く出土した一方で、上層は8・9期の市来式を中心として後期前~後葉の小片が主体を占めた。よって、一括発見は堆積の初期に限定して行われたと考えられる。

なお、東側堅穴住居群の上位も、遺物包含層の分厚い堆積が確認された。堆積は、上部を開墾により削平されているが、残存部だけでも50cmに達する。構成土は早期ローム層や御池火山灰が混入した状態で、南東部傾斜面上の盛土造構上層に類似する。層中には後期前葉~中葉にあたる上器の小片が多く出土した。周辺と比べて堆積が著しく厚いこと、窪地造構よりも標高が高く、自然な状態で堆積することは考えにくいくらいから、やはり盛土造構と考えられる。

なお、関東地方の盛土造構を見ると、盛土部分は、窪地造構に隣接した丘陵の高まる地点に弧状の形成される場合が多いようだが、本遺跡の場合、より標高の高い窪地造構西側~南側は盛土造構状の堆積は認められなかった。

6・大土木工事の時期関係について

第48条では、土層堆積から、一括発見（縄文後期初頭~前葉：黒褐色土層）→大土木工事（縄文後期中葉：茶褐色土層ローム層のブロック含）という前後関係を推定した。しかし、下層に堆積する黒色土層は、先に黒色土が削平された結果とも判断でき、削平・盛土の時期を推測する材料に乏しい。そこで、造構配置からの推測を加え、双方から時期を推測したい。なお、造構の変遷は、第4章の記述を参考とする。

堅穴住居の分布は、4期に、東側の傾斜面から東側住居群へ移動する。これは、窪地造構の削平が始まったことにより、

東側住居群の分布する地点の標高が、相対的に高くなつたためと考えられる。必然的に、盛土遺構も4期から形成されたことになるが、東側住居群の上位に堆積する盛土遺構は、東側住居群が5期までとされているため、6期以降に形成されたと考えられる。

下記は不明瞭である。窪地遺構内に分布する環状土坑群は、多くが8・9期である。この中には、崩落しやすい袋状土坑や、建造物である掘立柱建物群も含まれることから、環状土坑群の形成された地点の造成は8・9期までに終わつたという仮説が成り立つ。ところが、南東傾斜面からは、土器が11期まで確認される。窪地遺構底面には、11~13期の遺物が良好な状態で出土する事から、窪地遺構の造成はそれまでに終わつていたはずだが、8~11期の間、環状土坑群は、造成による影響を受けなかつたのだろうか。調査時の記録では、明確に回答できないのが実状である。

7・人為的整地の妥当性について

本遺跡の大土木工事は、以下の理由を以て人為的整地を主張したい。

- 1：硬く、粘性に富む牛のスネローム層（XⅠ層）と早期ローム層（XⅡ層）が流出していることである。この二層は、堆積の厚さに違いはあるものの、ほぼ水平に堆積しており、台地上で自然消失した例は少なくとも田野盆地にはない（裏を返すと、二次堆積した例もない）。また、本野原台地は分厚く陥没した阿多火砕流（XV層）のため、極めて水はけが良く、溺れ谷が形成されたとも考えられない¹³⁾。しかも、土層流出は径80~100mという局地的範囲で発生しており、田野盆地南西部で一般的に見られる阿多火砕流～小林降下軽石の火山灰流出とは明らかに性質が異なる。また、窪地中心部は、流出によって阿多火砕流の漸移層が露出するが、この層は風化すると軟質になると、仮に厚さ50cmの早期ローム層をはじめとした下層を駆逐する程の侵食作用が起きたのであれば、阿多火砕流漸移層で止まることなく、縦位に進行したはずである。
- 2：流出直後の再堆積である。流出土、特に上層部分は小ブロックが混入した状態であり、自然な状況であれば、よほど大規模な侵食作用が発生したと考えねばならない。ところが、流出土は窪地に隣接して再堆積しており、想定される侵食作用の規模に相反する。参考までに紹介すると、平成16年における数々の台風や、平成17年における台風14号の襲来により、東南九州は未曾有の風雨に晒され、各地で土砂崩れや土砂流出を経験した。各所の流出状況、そして崩壊後の少雨による再流出の状況を観察したが、流出した土砂は標高の低い地点を求めて流れ落ち、流下直後に再堆積した例は確認できなかった。地すべりならば、流出土が小ブロックになることもあり得るが、窪地の原地形は緩やかな傾斜面であるため、その想定はあまりに無理がある。

- 3：盛土遺構中の出土土器の残存状況が極めて良いことである。下層を抉るほどの大規模な自然現象が起きたのであれば、層中の土器も粉々に碎け、激しくローリングを受けるはずである。しかし、流出土中の土器は、小片が多いながらも復元可能な個体が多く認められ、器面も目立った劣化は認められなかった。この中には、焼成不良土器である（I225）も含まれる。

なお、整地を認めながら、その時期を古代とする向きもある（水ノ江 2005）。古代の掘立柱建物は、窪地遺構内から2種検出された。しかし、これらは古代包含層から掘り込まれており、柱穴からは古代の遺物が確認されている。一方、窪地遺構底面に堆積する層や、その範囲に分布する各種遺構は、中央配石や袋状土坑を含む環状土坑群、環状掘立柱建物群、立石土坑など、古代には認められない遺構ばかりである上、古代の遺物は全く認められなかった。以上の点から、整地時期は、少なくとも盛土遺構下層（Ⅴb層）出土遺物のうち最古段階にあたる绳文時代中期末葉から、窪地遺構が埋没する後期後業の間とするのが妥当であろう。

もちろん、削平前から窪地状を呈していた地点を選んで、最低限の手を加えた可能性も考えられる。しかし、盛土部分の土量から想定するに、整地によって加えられた人の手は、決して小さくはなかったと考えられる。

8・大土木工事の類例について

大土木工事は、近年特に注目を集める遺構である。今日関東地方では、類例の増加だけでなく、遺構の成因についても議論が行われ、（阿部ほか 2001）更に東北地方との比較も行われようとしている（阿部ほか 2005）。九州では、金丸に

より類例が提示されており（金丸 2005）、異論もあるが、大土木工事は九州でも認識されようとしている。しかし九州では、耕土が斜面に分厚く堆積することが多く、唯一「環状」「盛上」の形態を持つ大分県立石貝塚では、堆積は僅か20～30cm程度と、相違点も多い。なお、本野原遺跡の盛土遺構も環堤状を呈さないが、東側住居群ではマウント状を呈し、南東部傾斜面の堆積は窪地遺構よりも高くなると考えられることから、関東地方の盛土遺構に近いといえよう。なお、関東地方で認識されている盛土遺構の形成期は後期前葉～晚期中葉とされている（阿部ほか 2005）。九州における大土木工事は後期初頭～中葉を想定しており、関東よりも早い段階に出現し消滅するようである。本野原遺跡は、窪地遺構内に中央配石や窓穴状遺構、立石など、窪地遺構に付帯する施設が検出されるほか、存続期間が比較的長い点も特徴といえよう。

9・遺跡範囲確認トレンチについて

C-D区の窪地遺構の西側に設定した遺跡範囲確認トレンチでは、アカホヤ火山灰層と牛のスネローム層が消失していた。消失部内は、繩文早期ローム層の上位に耕作土が直接堆積していたため、想定される削平時期は、アカホヤ火山灰降灰から現代までとなる。しかし、窪地遺構の予想範囲が円形を呈することや、大きさが直径約100mと、C-D区南部の削平範囲とはほぼ同じであること、そして繩文後期末葉の土坑や窓穴住居は、消失部及びその周辺に集中していることから、これも大土木工事の可能性がある。ただし、繩文後期の整地であったとしても、削平部の深さは最大でも約70cmと推測されることから、C-D区の整地よりも小規模である。出土遺物は後期末の納屋向タイプから御領式併行の磨研土器が多く、C-D区の出土遺物とは時期的隔たりがある。なお、土層消失部の北側斜面からは、二次堆積と見られるアカホヤ火山灰のブロックの分厚い堆積が認められたことから、窪地の形成によって生じた土は、この斜面に押しやられたと推測される。

第4節 中央配石

1・検出状況について

藤岩の崩平崖によって構成される。こうした礫は、遺跡北部を流れる元野川と、遺跡東部を流れる別府田野川の、どちらの河原にも存在する。しかし、②、③、⑥を除く7個は人形であり（第48集P104参照）、運搬は容易ではなくかったと推測される。

礫は、下面が窪地遺構の検出面と同じ高さで接していたため、整地終了から、後期包含層の堆積が始まるまでの間に配されたと考えられる。付近に土坑は認められることから、礫は予め平坦部を下に寝かせていたと考えられる。

なお、⑤と⑥の礫は同一個体であり、互いに分割面を遠ざける形で配されていた。分割面に打痕や裂痕の類は認められないため、人為的打撃による分割ではないようである。研磨痕は、どちらの表面にもムラなく行われる一方で、分割面には認められなかったことから、分割は研磨後に起きたと考えられる。この2点に限らず、中央配石の礫は人為的打撃や研磨が行われるもののが多かった。ただし、打撃痕は、礫の尖端部で突いたようであり、研磨痕も器面に沿って行われるなど、通常磨石・叩石に認められる痕跡とは異なっていた。

2・中央配石の類例

単なる配石だけでなく、規則的遺構配置の中心に存在している例に限りたい。周辺では、鹿児島県藤平小田遺跡（南種子町教育委員会 2002）における、馬蹄形に巡る環状掘立柱建物の中心部に行われた配石遺構や、宮崎市松添遺跡（宮崎市教育委員会 1999）において、礫層消失部分に5基、環状に分布する「埋り鉢状の遺構」の中心から検出された配石土坑が類例に挙げられよう。なお、東日本では、長野県阿久遺跡や、新潟県アチャヤ平遺跡等が挙げられるが、これらの構成礫は土坑を伴い、立てられた状態である。なお、大土木工事を伴った中央配石としては、千葉県流山市三輪野山貝塚から検出された「大石」が報告されている（小川・小堀 2003）。また、栃木県守野東遺跡で検出された「石敷台状遺構」も、窪地遺構の中央部から検出された点で類例といえるが（栃木県教育委員会 1997）、構成礫が小ぶりである上、配石を行った後に整地が行われたと考えられることから、削平と配石の順序は逆である。

第5節 積穴状遺構

窪地遺構の中央付近から、中央配石を取り回むように、一定の間隔を置いて検出された。いずれも5~7mの不正円形、もしくは不定形を呈する。窪地遺構底面堆積層の調査中に検出されたことから、窪地遺構埋没中に構築されたと考えられる。

調査した4基はいずれもC区に分布する。遺構底面は凹凸が激しく、輪郭も判然としないため、積穴住居とは異なる性格の遺構と判断した。また、(SX-02)以外は遺構内に柱穴状の落ち込みが認められるが、配向は不規則であり、柱痕も認められなかった。覆土は、色調がやや暗く、阿多火碎流や漸移層のブロックが認められるほか、骨粉が若干多くなる傾向にあるが、それ以外は遺物包含層と大差ない。なお、(SX-05)に限っては、阿多火碎流に含まれる焼粨が多く含まれており、埋没中に、遺構内に故意に投棄したと考えられる。出土遺物は、後期後葉の丸尾B式や納屋向式が出土したほか、(SX-02)からは赤変した石錐状の石器が、(SX-03)からは研磨を行った円形と楕円形を呈する大ぶりの円盤が、(SX-04)からは石皿人の扁平な円盤が、(SX-03, 04, 05)から台付皿形土器が出土しており、特徴的な器種構成が見られた。

類例としては、先に述べた松添遺跡における「振り鉢状の遺構」が挙げられる。

第6節 道路状遺構

C区北西部と、D区・F区の中間部分の2箇所から検出した。窪地遺構の中央部を基準にすると、(SG-01: 旧道路状遺構-01)が北北西に、(SG-02: 旧道路状遺構-02)が南南東に伸びる。

1・SG-01について

アカホヤ火山灰が掘り込まれ、早期ローム層による幅約10mの平坦面が形成されている。底には硬化面が認められるだけでなく、その上位には牛のスネローム層の堆積が認められた。以上から、人為的に造成を行った「道路」と判断した。

検出地点は、両側を尾根に挟まれた谷沿いにあり、道路構築前から自然地形を利用した通路が存在していたと考えられる。底面における牛のスネローム層等の「舗装」は、掘削によって生じた底面が、水を含むと滑りやすい早期ローム層であることから、滑り止めを意図したと考えられる。舗装は、遺構南部のC区では層を成しているが、北部は南部からブロックが混入する程度であり、地点により大きな違いがある。

覆土からは多くの遺物が出土したが、下層は土器片がより大きく、時期も後期後葉の丸尾A式~納屋向式・納普式に限られていた。また、石皿も数個まとめて出土した。上層は、やはり後期後葉の遺物を主体とするものの、一部指宿式など先行する時期の遺物が混入しているうえ、土器片は小さく、激しくローリングを受けていた。しかも遺構北部は、覆土中の土器は僅かであり、土器片も小さく、時期が判別不可能なほどローリングを受けていた。このような現象は、道路施設と共に南部に一括廃棄が行われ、自然に埋没しながら土器が流れ込んだ、という2段階の埋没が想定される。遺構の性格上、使用開始期は不明であるが、その後削り終えたのは後期後葉となる。なお、遺構は北部を流れる元野川と、本野原集落を繋ぐ位置にあることから、構築の目的は、漁捞、物資や人の移動、水利等が考えられる。

2・SG-02について

(SG-01)同様、アカホヤ火山灰が急激に落ち、幅約10mの平坦面が検出された。トレーンチで断面を捉えたのみだったため、遺構がどのように伸びていたかは定かでないが、白地南端の尾根が終息する地点と、窪地遺構西側の低高地の中間に位置しており、谷状の地形が存在していたと推測されることや、遺構の落ち込みに沿って、周辺より一段低く細長い畠地があり、上空写真では、その部分だけ天地返し等を行っていないにも関わらず土の色が異なっていた。畠は遺構の落ち込みに沿って南南西に伸びていたと考えられることから、道路を想定した。

遺構底面は硬い小林降下軽石である。そのためか、覆土中に舗装を行った痕跡は認められなかった。また、道路埋没に

伴う一括発見も認められない。覆土中の遺物は、最も新しい段階は後期後業であるため、(SG-01)と同時期に埋没したと予想されるが、いずれも小ぶりで、ローリングを激しく受けたために、詳細な時期は不明である。

3・縄文時代の道路状遺構について

縄文時代の道については、須塚正浩氏が全国的に集成と分類を行っている(須塚 2004-2005)。また、九州内の事例は、繁昌正幸氏の論考に詳しい(繁昌 2003)。これらを総合すると、九州の縄文集落は、早期の段階で既に道路を備えていたことになる。ただし、それらは等高線が連続的に凹んでいるものや、硬化面が認められる程度である。掘削を作った道路は、中~後期の鹿児島県岩崎遺跡で検出されている(河口 1953)。時期は本野原遺跡と重複する可能性があるほか、覆土から石斧が出土する等類似点も認められる。一方、遺構に階段が設けられている点は、明確に異なる。

道路状遺構は、近年検出例が増加中の遺構である。須塚氏は、これまで検出された道路状遺構をV類に編みている。以下はその要約である。

I類：人間の歩行で地面が帶状に降下したり、浅く盛んだりしたもの

II類：地面を帶状に掘削して作ったもの

III類：上砂や砾などで路面を舗装して作ったもの

IV類：樹木の幹や枝を直線状に並べて、しばしば枕木や杭で固定したもの

V類：路面に一定の段差が造られ、階段状を呈するもの

これを基準に考えるならば、これまで南九州の縄文早期で検出されていたものは概ねI類に、岩崎遺跡はV類に、本野原遺跡における(SG-01)はIII類に、(SG-02)はII類にそれぞれ比定されよう。このように、九州では、事例は少ないので、多様なあり方を示している。

第7節 埋甕

(埋甕-01)は、後期前業にあたる本野原3式である。用いた深鉢に比べると、構築した土坑は大きく深い。深体はその上部に傾けられた状態で埋められる。九州で最も古い段階の埋甕は、福岡県宮ノ前遺跡における、縄文後期初頭の中津式期とされている。本遺跡の(埋甕-01)は、それに次ぐ例といえる。検出地点は、北側と東側の中間にあたる堅穴住居の集中地点であり、本野原3式の属する6・7期に相当する堅穴住居が隣接する点は興味深い。

(埋甕-02)は、晩期前業から中業にあたる粗製深鉢が使用されたものである。土坑は(埋甕-01)同様大きく深い。残存状態が悪く、器形の復元は殆ど不可能であった。検出地点は窪地遺構内である。これは、当時の住居がC区北部に存在していたことを考えると、離れた位置に構築されたことになる。

第8節 土坑

土坑の形態や特徴は様々である。以下に分類し、説明を行いたい。

1・立石土坑

窪地遺構の、環状掘立柱建物群の内側を中心に検出された。窪地南東部に集中するように見えるが、北東部の空白は、土坑を検出する前に確認された砾を「浮いた」と判断し、検出面を下げるにあたって除去したためであり、立石土坑は、実際は第48集のP163にあるように、窪地中心部を取り囲んで分布したと考えられる。

土坑の平面形は50cm前後と小ぶりであり、深さも50cm前後が一般的であった。土坑覆土は、粘質土層や阿多火候流漸移層など、土坑を掘る際に生じた土と同じであることが多いことから、掘った上がそのまま埋め戻されたと考えられる。なお、覆土中には炭や焼土粒子、骨粉が含まれることもあったが、包含層と比べて特別多い傾向は認められなかった。また、土器は小片がごく微量含まれる程度であった。

立石と呼ばれるように、覆土上層は礫を作っており、上に砂岩製の石皿、またはその破損品を使用したものが多く見られた。礫の表面には、中央土坑と同様の鋭利な敲打痕が認められることが多く、一部は研磨痕も認められた。礫は、上坑内で横倒しに検出されることが多かったが、中には（SC-197、218）のように、立てられた状態で検出されるものもあった。立石上坑の検出面は、窪地底面付近であり、構築時は、礫が検出面より突出していたと考えられる。土坑は小さいため、理葬、柱穴、貯蔵穴には向かない。従って、現時点では、祭祀に関わる土坑という位置付けが最も妥当であろう。

このような土坑の類例は近隣ではない。九州では、福岡県中村石丸遺跡における5号土坑が類例に挙げられる（福岡県教育委員会 1996）。あたかも幕標を思わせる台石が北西隅に立っており、報告書でも土坑墓である可能性が述べられている。ただし、上部を削平していることもあり、遺構の構築時期は定かでない。西日本一帯に目を向けると、鳥取県下山遺跡の「立石土坑」が挙げられる（深川 2001）。SK-40、45、46は、土坑の大きさも、遺構内の礫の大きさ、後期後葉とされている構築時期等、本遺跡の立石土坑に類似する。遺構は「モニュメント的な機能を持つ遺構」とされている。更に視野を広げれば、長野県阿久遺跡の「立石・列石」も挙げられよう（長野県教育委員会 1982）。中央配石の周囲に分布すると言う配置も含めて類例に挙げられるが、土坑や礫が大ぶりであるほか、主体時期が前～中期と、時期がかなり先行することから、本野原遺跡への影響を想定するのは困難と言えよう。

2・袋状土坑

（SC-40、186）の2基は袋状土坑である。（SC-40）は、ソロバン玉形の断面形を呈し、第一次堆積層上面から3点の石皿が出土した。（SC-186）は、（SC-40）よりもオーバーハングが強く、東日本で検出される袋状土坑の典型例に近い。遺構底面付近から、石皿が1点出土した。

また、（SC-41、42、67、162）も、一部オーバーハングが認められる。構築当初の形状は不明だが、台形を呈していたか、袋状、若しくは富士山形を呈し、遺構の天井部分が崩落したか、のいずれかと考えられる。（SC-41）は遺構上部から石皿1点と数点の小ぶりの礫が出土したほか、底面近くからも、石皿が3点、市来期にあたる小形の土器が1点出土した。（SC-42）の覆土は堆積が不安定だが、覆土中位から石皿が2点出土した。（SC-67）は、第一次堆積層上面に、土器の集中が認められた。（SC-162）は、柱穴を伴う、一回り大きい土坑が設けられており、遺構上部に2点の石皿が配された状態で検出された。

（SC-40～42）は3基並んだ状態で検出された。また、（SC-162）は（SC-40～42）より20m北東に、（SC-186）は、（SC-40～42）から約30m程南に位置しているが、いずれも窪地遺構内にあることから、遺構は大土木工事による削平後に構築されたと考えられる。また、環状掘立柱建物群と同じ軌道線上にあることから、両者は同時期、つまり、構築時期は8・9期前後と考えられる。

（SC-67）は、遺構内から遺物がまとまって出土した（第52集P46）。いずれも遺構底面よりも若干上位にあることから、第一次堆積層が形成された後に、土器片を集めて捨てる程度の廃棄行為が行われ、上層の堆積に併行して、少量の小片が混入したようである。ただし、それ以外の袋状土坑からの出土遺物は極端に少ない。

袋状土坑の分布は、利根川以東を中心とした関東地方に多く、利根川以西は少ないとされている（長岡史起 1999）。近隣では、清武町の上の原第2遺跡より、僅かにオーバーハングが認められる2基の検出例が報告されている⁴⁾。オーバーハングは弱く、形態はむしろ台形に近いため、袋状土坑と言う判断しうるか微妙な例といえる。九州では、これ以外にも袋状に近い形状の土坑はあるものの、明確なものは少ないようである。

袋状土坑の用途は、一般的に貯蔵穴とされてきた。ただし、本遺跡の袋状土坑は、覆土中に堅果類の炭化物が混入しないため、形態のみで貯蔵穴と判断することはできない。東日本では、袋状土坑が墓壙である可能性も取り沙汰されている（金子 2005）。本遺跡から検出された袋状土坑のうち、（SC-41）は、土坑中位に骨粉が顯著に混入したほか、完形の小形深鉢と3点の石皿が出土したことから、墓壙であった可能性もある。なお、覆土中における石皿の出土は、他の袋状土坑にも共通するが、骨粉の濃厚な検出はないため、指摘するに留めたい。また、本遺跡から検出された袋状土坑が墓壙であったとしても、それらが予め墓壙を意識して構築されたのか、それとも袋状「転用」墓であったかは定かではない。

3・墓壙

本遺跡からは、人骨は検出されなかったため、明確に土坑墓と呼べるものはない。その中、(SC-41)は、土器が完形に近い状態で出土したことや、覆土から骨粉のブロックが明確に認められたため、比較的迷わず墓壙と判断することができる。また、上で述べた袋状土坑の使用も考えられる。関東地方の擬定的環状集落においても、中心部から墓壙が認められるが、(SC-228, 229)は、窪地遺構中心部付近とさう検出位置や、土坑上部に人為的な擦痕を有する縁を作うことから、墓壙と考えられる。なお、埋葬位は、平面形から伸展葬と考えられる。このほか、底面付近に縁が敷き詰められているために、墓壙の可能性が高いと見られる(SC-348)は、窪地遺構底面では検出面されず、トレンチの断面にかかっていたために始めて検出された。このように、窪地遺構中心部は、調査時に検出されなかつた墓壙がまだ分布する可能性もある。

4・貯蔵穴

本遺跡からは、堅果類の炭化物が多くの中坑から検出された。しかし、覆土中からまばらに検出されることが多く、明確に貯蔵穴と判断できる土坑はなかった。ただし、(SC-165, 174)の2基は、小ぶりながら100粒を超える堅果類の炭化物が検出されたことから、貯蔵穴として使用されたと考えられる。双方とも堅穴住居に隣接する点は注目されよう。なお、この2基に限らず、検出されたドングリの多くは、8分の1以下の欠片であった。堅果類の検出遺構は第24表のとおりである。多くが環状土坑群内に分布する。

5・帶状土坑群

C区北東部の斜面から帯状に検出された土坑がそれにあたる。分布は規則的とは言い難い。土坑群の西側は削平されていることから、本来は調査区東側の斜面にまで分布していた可能性もある。土坑は浅く、50cm以上のものは稀である。大きさは、全体で20~30cmであり、ピット群よりも大ぶりであったが、ピット群がほぼ円形に統一されていたのに対し、こちらは格円形もしくは不定形のものが多く、断面も様々であった。土坑群の立ち並びを見ても、建物と思しき規則性を見出すことはできなかった。覆土も、堅果類、若しくは木片の炭化物、骨粉が検出される例は少なく、特定の用途を想起できる状態ではなかった。

以上の理由から、帶状土坑群の用途は不明といわざるを得ない。しかし、北側住居群と東側住居群の中間に分布する住居群に隣接して分布することから、帶状土坑群は、これら堅穴住居に付随して構築された施設と考えられる。

第9節 ピット

夥しい量検出された。窪地遺構中央部を除く全面から検出されたが、分布の集中は、窪地遺構内のC・D区南側と、窪地遺構外側のB, E, F区およびC区北側の2ヶ所に分けられる。

ピットの大きさは、総じて径15cm前後である。また、ピットを掘り上げたB区とC区では、深さは20~30cmを主体とし、断面はほぼ垂直であったことが判明している。なお、B区とE区で検出されたピットの覆土からは、後期後業の、ナデを用いた無文土器が出土している。

ピットの用途は、現時点では不明である。堅果類の炭化物を伴うものもいくつか認められるが、密集状態ではなかった。大きさ、深さを考慮すると、何かの柱と考えるのが妥当であろう。窪地遺構内のピットは、環状掘立柱建物群と分布が重なることも要注目である。同様に、窪地遺構外のピット群も掘立柱建物群の可能性がある。事実(SB-32~34)は、本来ピットとして検出されたものの、分布に規則性が見られたため掘立柱建物と認識したものである。その場合、窪地遺構内の環状掘立柱建物群の外周に、もう一つ、環状の掘立柱建物群が分布したことになるが、後期前業に集中する窪地遺構内の環状掘立柱建物群との間に時期差が予想される。なお、柱痕は全く検出されなかった。

上記の想定を行った場合、掘立柱建物の柱はピットの径より細くなることから、その強度は、先に述べた掘立柱建物群同様に疑問符がつく。ピット群は無数に分布することから、頻繁な建替が行われたとも考えられるが、何故貧弱な建物を建てたのかという疑問は拭えない。

遺構名	種別	推定	状態×個数	備考
SA-7L	ドングリ	イチイガシ	1/2×4 1/8下×約30	
SC-158,159	ドングリ	コナラ?	1/2×5	
SA-86,97 (上層)	ドングリ	イチイガシ	1×1 1/2×9 1/4×13	
		不明	1/8下×約30	
SA-87 (上層)	ドングリ	コナラ?	1/2×1	
		アベマキ?	1/4×2	
SB-03 P-7	ドングリ	不明	1/4×1 1/8下×5	
SC-73	ドングリ	イチイガシ	1/2×2 1/4×5	
		不明	1/8下×約10	
SC-83	ドングリ	コナラ?	1/2×2 1/4×1	
		イチイガシ	1/2×2 1/4×1	
		アラカシ	1/2×2	
SC-91	ドングリ	イチイガシ	1×9 1/2×21	殻の破片 多し
		イチイガシ	1/4×10	
		不明	1/8下×約20	
SC-93	ドングリ	コナラ?	1/2×2	
		イチイガシ	1×8 1/2×11 1/4×11	
		不明	1/8下×約10	
SC-96	ドングリ	スダジイ?	1×1	
		アラカシ?	1/2×1	
		イチイガシ	1×20 1/2×38 1/4×22	
		不明	1/8下×約30	
SC-98	ドングリ	ナラガシワ?	1×1 1/2×1	
		イチイガシ	1/2×17 1/4×6	
		不明	1/8下×5	
SC-107	ドングリ	ナラガシワ?	1×1 1/2×2 1/4×1	
		クヌギ?	1/2×1	
		イチイガシ	1/2×2 1/4×6	
		不明	1/8下×約25	
SC-113	Fドングリ	イチイガシ	1/2×2	
SC-132	ドングリ	イチイガシ	1/2×1 1/4×1	
SC-160	ドングリ	ナラガシワ?	1/2×2 1×1	
		イチイガシ	1/2×6 1/4×16	
		不明	1/8下×約30	
SC-165	ドングリ	コナラ?	1/2×4	殻の破片 多し
		カシワ?	1×4 1/2×10	
		スダジイ?	1×1 1/2×3	
		イチイガシ	1×4 1/2×32 1/4×32	
		不明	1/8下×約130	
SC-168	ドングリ	イチイガシ	1×1 1/2×2 1/4×3	
		不明	1/8下×4	
SC-170	ドングリ	イチイガシ	1/4×4	
SC-173	ドングリ	不明	1/8下×15	
SC-174	ドングリ	イチイガシ	1/2×40 1/4×18	
		植物種子	3/4×1	
SC-183	ドングリ	アベマキ?	1×1	
SC-192	ドングリ	クヌギ?	1/2×1	
SC-210	ドングリ	アラカシ?	1/2×3	
		イチイガシ	1×1 1/2×12 1/4×12	
		不明	1/8下×約120	
SC-221	ドングリ	イチイガシ	1/4×1	
		不明	1/8×1	
SC-248	ドングリ	ナラガシワ?	1×1 1/2×12 1/4×5	
		イチイガシ	1/2×7 1/4×7	
		不明	1/8下×約15	
SC-251	ドングリ	アベマキ?	1×1 1/2×1	
		イチイガシ	1/2×4 1/4×11	
SC-253	ヤマモモ?	不明	1×1 1/8下×約20	
SC-346	ドングリ	アベマキ?	1/4×3	
		ナラガシワ?	1/2×2 1/4×1	
		イチイガシ	1/4×8 不明	
		ナラガシワ?	1/8下×約30	
SC-359	ドングリ	不明	1/2×1 1/4×2 1/8下×5	
SP-29	ドングリ	コナラ?	1/2×2 1/4×1	
		不明	1/8下×5	
SP-39	ドングリ	カシワ?	1/2×2	
SP-42	ドングリ	イチイガシ	1/4×8	
SP-43	ドングリ	イチイガシ	1/2×1 ナラガシワ?	
SP-45	ドングリ	アベマキ?	1/2×3 カシワ?	
		カシワ?	1/2×3 不明	
SP-142	ドングリ	不明	1/2×1 1/4×1 1/8下×1	
SP-280	ドングリ	カシワ?	1/2×2 イチイガシ	木材の小 片を含む
		イチイガシ	1×1 1/2×5 1/4×5	
SP-281	ドングリ	コナラ?	1/2×4 1/4×5 1/8下×4	
SX-03	ドングリ	イチイガシ	1/2×3	
VII層 (室底地面)	ドングリ	ナラガシワ?	1×1	
		イチイガシ	1×3	

第25表 遺跡内出土の炭化物一覧

ここまで、推論を重ねながら考察を行ってきたが、この作業を困難にしている最大の原因是、九州では、これまで密集したピット群について、建物の視点から考察が行われなかつたためであろう。月並みだが、今後の研究の進展に期待したい。

(註)

- 1) : (宮崎県埋蔵文化財センター 2000b) 上の原第1遺跡の、21号竪穴の事である。
- 2) : ただし、直上中の遺物から判断される時期は、竪穴住居の下限、若しくは埋没時期であり(林 2004)、使用時期を示すものではない。
- 3) : 本野原遺跡の立地する元野地区は、鶴塚山の麓にあり、梅雨や台風到来時の降水量は、2~3日で600mbを超えることもしばしばである。調査区も、大雨の度に水没したが、降雨は2日以上調査区に留まることはなかった。それは、雨水が基盤層である河多火砂流を通して、調査区外に流出したためと思われる。
- 4) : (宮崎県埋蔵文化財センター 2000b) の、60、68号土坑のことである。

第Ⅴ章 集落の変遷

縄文時代における集落の変遷について、時期を追って記したい。なお、集落が形成された中期後葉～後期末は、報告書中で用いた時期区分を基に説明したい。

第1節 早期

早期前葉で目立った加賀山式は、町内の多くの遺跡から確認されるが、本遺跡は、前平地区の札ノ元遺跡に次ぐ出土量である。その他、別府原式、(工具刺穴を行う)前平式も僅かながら確認されている。分布は台地の東半分に及ぶことが確認されており、遺跡の規模はかなり大きかったと予想される。なお、加賀山式期に相当すると見られる集石遺構の中には、早期前葉に多い、外縁に平坦な縁を配置したものが2基検出されたが、同時期に多く検出される炉穴は検出されなかった。

早期中葉～後葉は、A区を中心に桑ノ丸式や押型文土器、炒見式、塞ノ神式が出土した。出土量はいずれも数点であり、当時の集落は極めて限定的であったと予想される。A区からは、集石遺構が4基検出されており、うち2基は底石を伴っていたことから、早期中葉に相当すると予想される。

なお、元野地区全体では、加賀山式は本野原遺跡には限られ、別府原式は高野原遺跡を中心に元野河内遺跡E・F区から少量、後期押型文土器は元野河内遺跡E・F区を中心に元野地区全般、平裕式・塞ノ神式は黒草第2遺跡・元野河内遺跡、苦浜式～早期末条痕文土器は黒草第2遺跡・元野河内遺跡のC区に集中する傾向が認められ（田野町教育委員会2004a）、集落域の細かな移動が窺える。縄文時代、南九州は他地域に先駆けて定住生活が普及し（雨宮1993）、多くの大規模遺跡が形成されたとされている。元野地区の遺跡群は、その南九州でも遺跡密集地として知られている。

第2節 前期～中期中葉

西川津式、曾畠式、尾田式、深浦式、上水流三類、船元式、春日式が出土したが、出土量はいずれもごく僅かである。元野地区における前期～中期中葉の土器の出土状況は、第26表の通りである。これを見ると、前期前半は元野河内遺跡に集中するが、前期後半から中期にかけて、本野遺跡～高野原遺跡へと移動した様子が窺える。出土土器に時期的空白は認められないが、出土はいずれも少量である。遺構も、元野河内遺跡で検出された縄文中期と考えられる数基の陥し穴以外確認できなかった。このことから、本野遺跡は、「周期的な移動生活を行なう際のサイクルに組み込まれた」この「キャンプサイト」とした（田野町教育委員会1999）。恐らく、そうした土地利用は、元野地区全体に及んでいたのであろう。本

遺 著 名	遺 跡 名	西川津式		曾畠式		尾田式		深浦式		上水流三類		春日式		春日式		大平式	
		前半	後期	前半	後期	前半	後期	前半	後期	前半	後期	前半	後期	前半	後期	前半	後期
草創期	元野河内A・B	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
前平式	元野河内C・D	○	○	○	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
加賀山式	元野河内E・F	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
別府原式	黒草第2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
早水台式	高野原	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下羽篠式	本野	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生B式	小野原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
桑ノ丸式	畑田	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
押型式	手向山式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生C式	炒見式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生D式	天道ヶ原式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生E式	平裕式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生F式	塞ノ神式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生G式	早烟末各痕文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生H式	曾畠式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生I式	高野原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生J式	尾田式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生K式	高野原	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生L式	深浦式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生M式	上水流三類	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生N式	春日式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
下菅生O式	大平式	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

第26表 元野地区遺跡における縄文草創～中期前半の土器出土状況表
(○: 5個体以下、◎: 5個体以上30個体以下、●: 30個体以上)

野原遺跡で西川津式が出上したことにより、周期的移動生活は前期前葉まで遡ることが明らかとなった。

第3節 中期後葉～後期後葉

Ⅲ・Ⅳ章の編年整備を参考に、遺構内出土遺物における時期のまとまりを埋没時期とした。なお、遺構内出土遺物は絶対量が少ないと、小片が多く、時期を決めかねる個体も多かったため、判別の困難な2・3期、6・7期、8・9期、10・13期、14・15期はまとめるにした。その上で、各遺構を

- ①出土量がまとまっており、ほぼ1つの区分に絞られるもの
- ②出土量がまとまっており、2つの区分のどちらかに特定されるもの
- ③時期は絞られるものの、出土量が少ないために特定が困難なもの、また、出土量が多いものの、3つ以上の区分に分かれるもの
- ④出土量が少なく、時期もまとまりが認められないもの

の4者に分けた。このうち①を確実なもの、②を可能性の高いもの、③を可能性のあるものとし、変遷図で示した。なお、④は時期不明と見て除外した。

(1期)

堅穴住居は確認されていない。土器も、並木式が1点出土するのみである。しかし、2・3期に相当する堅穴住居に切られた住居が、北側住居群を主体に数軒認められることから、1期とは断定できないまでも、2・3期に遡る時期から、本野原台地には堅穴住居を伴った集落は存在したようである。

(2・3期)

堅穴住居は、確実なもの7軒、可能性の高いもの6軒、可能性のあるもの4軒である。確実な7軒の住居は北側と東側に集中する。このうち東側の分布は、後に形成される東側住居群より東側の斜面に分布し、窪地遺構を意識した配置ではないため、窪地遺構はこの時点ではまだ存在しなかったと思われる。それは同時に、窪地遺構の造成に伴い、削平された堅穴住居が存在した可能性も示している。ただし、南東部土器廃棄場や遺物包含層からは2・3期にあたる上器の出土は少ないため、仮に存在したとしても少数だったと考えられる。なお、土器の一括廃棄もこの時期盛んに行われる。2期は、半ば埋没した堅穴住居で行うが、3期以降、南東部傾斜面に移動する。

(4期)

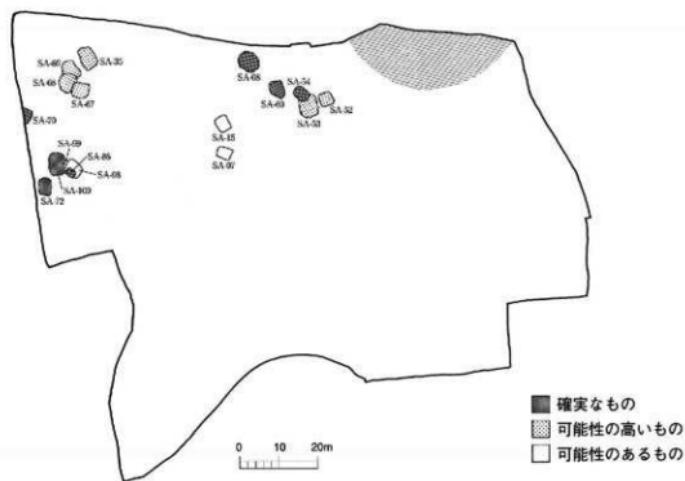
堅穴住居は、確実なもの11軒、可能性の高いもの10軒、可能性のあるもの8軒である。集落域の拡大が進んだ時期である。堅穴住居の分布は広範であり、特に調査区東側は高密に分布する。この住居群は、2・3期よりも傾斜の緩やかな西側に、窪地遺構の外縁に沿うように分布する。「木野原遺跡」の報告書では、この時期は傾斜面上に一括廃棄が行われるのみであり、窪地遺構内の掘削はこれ以降とした。しかし、このような遺構配置や、一括廃棄中の土層堆積から、窪地遺構の構造は、この時期から行われていたと推測される。また、この時期に該当する掘立柱建物は5棟程度であったと考えられ、本格的な登場はこれ以降と考えられる。南東部傾斜面における土器の一括廃棄も継続して行われるが、土器は小片が多い。

(5期)

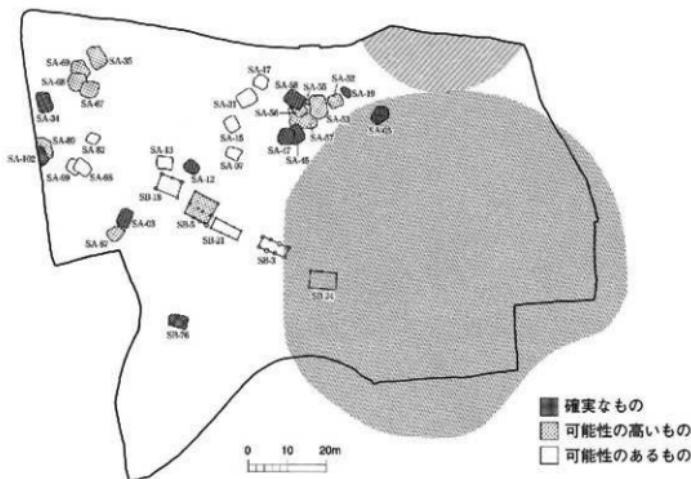
堅穴住居は、確実なもの20軒、可能性の高いもの10軒、可能性のあるもの10軒である。本野原集落の最盛期である。東側住居群の集中化は更に進み、4期よりも窪地遺構に隣接し、弧を描くように密集する。住居のサイズが全体的に小ぶりになるのも特徴である。列状掘立柱建物も、この時期を主体としたとみられる。前段階より行われた窪地遺構の造成も継続して行われたと考えられ、南東部傾斜面では、土器の一括廃棄が継続して行われる。中でも本野原1式は、個体の残存状況が良好なままに廃棄される事が多い。以上から、5期は尾根沿いに展開する掘立柱建物と、特に東側住居群に密集する堅穴住居と、窪地遺構が存在したと考えられる。

(6・7期)

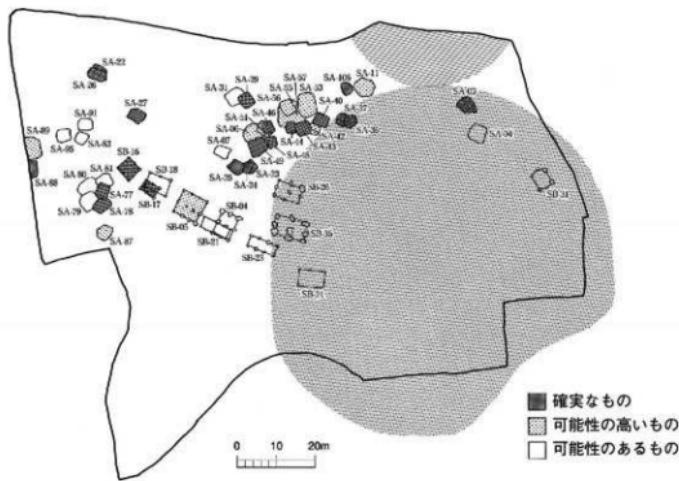
堅穴住居は、確実なもの1軒、可能性の高いもの3軒、可能性のあるもの8軒である。5期と比べると大幅な減少傾向が窺え、特に東側住居群はほぼ終息する。掘立柱建物は、窪地遺構北側を中心に6棟分布するが、いずれも可能性がある



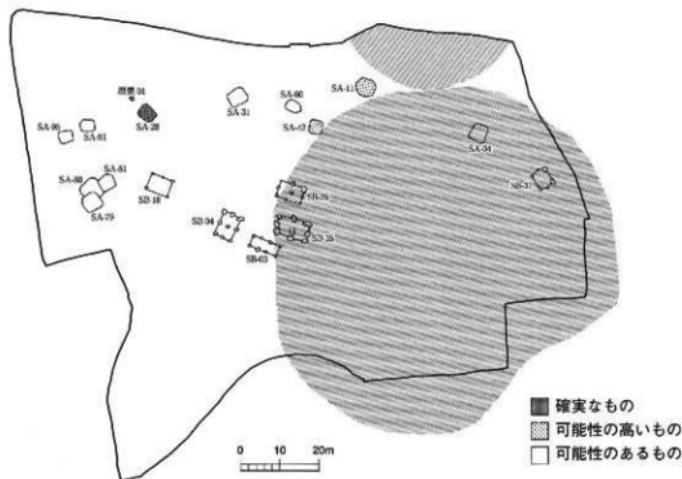
第58図 本野原遺跡遺構変遷図（2・3期）



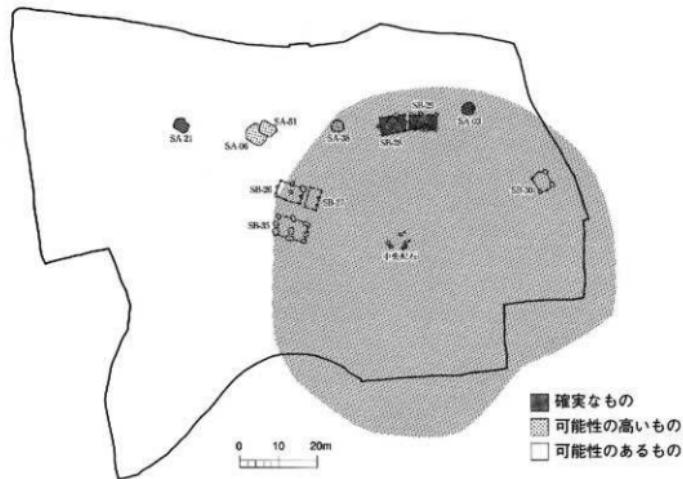
第59図 本野原遺跡遺構変遷図（4期）



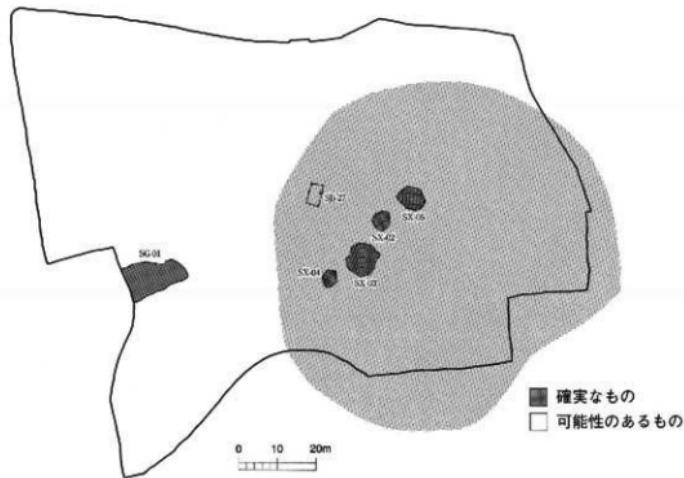
第60図 本野原遺跡遺構変遷図（5期）



第61図 本野原遺跡遺構変遷図（6・7期）



第62図 本野原遺跡遺構変遷図（8・9期）



第63図 本野原遺跡遺構変遷図（10～13期）

に過ぎない。このほか、調査区北東部では埋葬が1基確認されている。この時期は、南東部傾斜面における土器廃棄の最盛期でもあり、堅穴住居の激減に關係なく出土する。

(8・9期)

堅穴住居は、確実なもの2軒、可能性の高いものが3軒に過ぎず、堅穴住居の減少が進行する。一方、掘立柱建物は、確実なものが2棟、可能性のあるもの4棟である。隣り合う(SB-28、29)をはじめ、多くが環状掘立柱建物群に属する。よって、幅広い時期を可能性とする(SB-30)や、それに隣接した(SB-31)も同時あるいは近い時期に存在したと考えられる。また、袋状土坑をはじめとした環状土坑群の主体もこの時期である。上坑覆土からは、堅果類の炭化物が多く出土することから、窪地遺構周縁は植物質食料の加工等、生活の場であったとも考えられる。遺物は、それまでと比較して若干減少するが、堅穴住居ほど顕著ではない。窪地遺構中央部は、10~13期から堆積が始まる事から、窪地遺構内の中央配石は、遅くともこの時期までに配置されたと考えられる。また、(SG-01)も、上限は定かでないが、この時期までは使用されていたようである。

(10~13期)

堅穴住居は確認されていない。また、掘立柱建物も可能性のあるものが1棟あるに過ぎない。しかし、この時期の遺構としては堅穴状遺構があるほか、遺物も窪地遺構の堆積層から多量に含まれるため、集落は少なくとも本野原台地及びその周辺に存在したのであろう。窪地遺構からは、上器の他に崩かれた礫など用途不明石器が、堅穴状遺構からは、台付皿形土器が多く確認された。こうした状況から、窪地遺構は、この時期祭祀的空間として位置付けられていたと推測される。なお、(SG-01)の、埋没開始もこの時期である。

(14期)

調査区内に遺構は確認されていない上、遺物もごく少量であることから、集落は放棄されたと考えられる。代わって、対岸の高野原台地では集落が形成されはじめる。本野原遺跡の空白期に合わせて出現することから、本野原集落の構成員が、川の対岸に移動して集落を構築したのであろう。しかし、高野原台地の集落は、規模が大きさに関わらず、ほぼ14期で終焉を迎える。

(15期)

調査区内に遺構・遺物は確認されておらず、調査区は放棄されたと考えられる。しかし、本野原遺跡調査区の西側にある遺跡範囲確認トレントからは、14期以降の遺物が一定量確認されており、集落中心部はこの地点に移動したと推測される。この部分では、約100mの範囲にわたる窪地が形成され、その内側はアカホヤ火山灰層の消失が認められるなど、東側の調査区における窪地遺構との関連性が推測される。

15期から晩期中葉の間は、元野地区から遺物の出土がないため、様相も定かでない。なお、この空白期は、清武町半畠遺跡の最盛期でもある。

第4節 晩期

晩期中葉から終末期の遺物が確認された。厳密には入佐式期、黒川式期、刻目突審文期の3期に細分が可能だが、遺構の時期が不明確であることから、ここではまとめて扱う。遺物の分布域はC区北部に集中するが、遺跡範囲確認トレントにも分布が認められることから、遺跡の広がりは台地北東部一帯に及ぶと見られる。調査区内における検出遺構は、堅穴住居が、北側住居群に2軒、窪地遺構の中央やや東寄りに埋葬が1基、土坑も調査区北部に数基確認される。土器は窪地遺構内や遺物包含層から一定量出土するが、器種は多くが精製浅鉢であり、深鉢を主体とする10~14期の器種構成とは大きな隔たりがある。

その後、元野地区は、弥生時代中期後半~後期初頭まで、遺物すら全く出土しない空白期が続くが、これは元野台地に限らず、宮崎平野全体に共通する傾向である。

第5節 集落景観の変化について

元野集落の景観を語る上で特筆すべきは、中期後葉から營まれた集落である。ここでは、その変遷について述べたい。本野原集落は、中期後葉から出現し、3期以降、南東部傾斜面の土器廐棄が行われる。4期から大上木工事が始まり、それと共に集中が進んだ東側住居群は、5期にピークを迎える。5期の集落は、北部の尾根沿いには環状掘立柱建物群が、南部には窪地造構が展開する景観を呈する。

本野原集落は、続く8・9期には窪地造構の中央に配石が行われ、その外側には環状掘立柱建物群が盛る形態へと変化する。当時の居住地は次項で述べる通り不透明であるが、規則性のある造構配置を呈する点は興味深い。

更に14期、高野原台地に移動した集落は、中央部に堅穴住居を持ち、外側に掘立柱建物群が展開する。掘立柱建物群は、本野原集落のような同心円形の配置はとらないが、長軸または短軸は、常に集落中心部を向いており、本野原遺跡とは異なる規則性を有している¹¹⁾。

このように、元野地区で中期後葉～後期後葉にかけて營まれた集落は、非常に計画性のある土地利用を行っている点で、九州の縄文集落の中でも特筆すべき存在と言えよう。また、こうした土地利用が時期毎、集落地を変える度に変化する点もまた、大きな特徴と言える。

第6節 堅穴住居空白期の解釈について

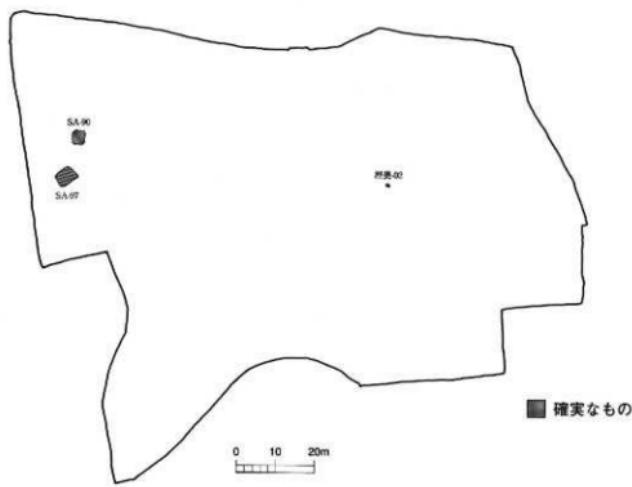
6期～13期にかけて、本野原遺跡では堅穴住居が激減するが、8・9期は、袋状土坑など環状土坑群の主体期にあたるほか、続く10～13期も、堅穴住居は全く確認されないにも関わらず、窪地造構内から多量の土器が出土する。これは、堅穴住居が検出されないまでも、調査区内、若しくは隣接地に集落が存在した結果であろう。それでは、集落はどこに存在したのだろうか。調査を終了した今となっては仮説に過ぎないが、以下に4つの可能性を提示したい。

- ①：東側住居群や南東部土器廐棄場の上に住居を構築した。
 - ②：窪地造構内に展開する環状掘立柱建物群を住居として使用した。
 - ③：E・F区のピット群を平地式住居として使用した。
 - ④：調査区の東側に存在した、谷に向かいの傾斜面上に構築した。
- ①は、阿部氏の唱える「遺丘」の形成過程を参考にした（阿部 1996）。土壁を伴う堅穴住居を繰り返し建てたために、遺丘が形成された、という解釈である。本遺跡の盛土遺構は、同耕前は土堤状を呈していた可能性も高く、そのような想定も可能であろう。②は、石井氏による、掘立柱建物の解釈を参考にした（石井 2004）。環状掘立柱建物群は8・9期に相当すると見られるが、窪地造構内からは小ピット群が多く検出されており、柱穴サイズに不安はあるものの、8・9期以降はそれらを利用した建物に受け継がれると仮定することができる。③は、E・F区で検出されたピット群が平地式住居であることを前提としており、小ピットで平地式住居を構築し得るのか、という問題を残すが、もしそうであれば、窪地造構を中心として外縁に平地式住居が展開していた集落景観が浮かび上がる。④は、地元の方から削平中に土器や石器が出土したという話を根拠としているが、本野原台地は縄文早期や古代の遺物も多く出土するため、削平の際に出土したとされる遺物が後期後葉に相当したとは限らない。

以上のように、遺物の出土量等から、集落が調査区及び近接地で存続したことは明らかであるものの、実態は推測による部分が大きく、不鮮明であることは否めない。

第7節 小結

縄文時代の元野地区は、幾つかの短い空白期間を置きながら、南九州における縄文時代の土器型式の治方が出土する、遺跡の密集地帯であった。ただし、大規模な集落が位置を変えながら存続した縄文早期と中期後葉～後期後葉の間には、小規模かつ周期的なキャンプサイトの期間があるほか、晚期中葉に再び出現した集落はあくまで小規模であるなど、それぞれの時期における集落のあり方は変化に富むことが明らかとなった²²⁾。



第64図 本野原遺跡遺構変遷図（晩期）

註)

- 1：高野原遺跡の掘立柱建物群については、弥生時代または古代以降が主流とする意見が出されている（水ノ江 2005）。しかし本遺跡に関しては、様々な事情を考慮すると、やはり縄文時代が主体と考えるのが妥当である。この検証は、稿を改めて提示したい。
- 2：ただし、多量に出土した縄文早期や中期後半～後期後業の集落も、継続性はあくまで土器型式上であり、一型式の存続する期間内に移動が行われた可能性を否定するものではない。

第Ⅷ章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 土層堆積における自然科学分析

I. 本野原遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、始良、鬼界、霧島、桜島などのカルデラ火山や成層火山から噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めるこで、造構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や遺物包含層が認められた本野原遺跡において、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、テフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を求め、土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、A区南壁、B区南壁、B区北壁、C区1号試掘トレンチ、C区排水溝跡、C区第1トレンチ、C区西壁の7地点である。

2. 土層の層序

(1) A区南壁

A区南壁では、下位より黒色土（層厚20cm以上）、淘汰の良い細粒の黄色軽石層（層厚19cm、軽石の最大径5mm）、細粒の黄色軽石混じり暗灰色土（層厚10cm、軽石の最大径4mm）、車凹疊混じり粘質土（層厚38cm、疊の最大径6mm）、灰褐色土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚65cm以上）が認められる（図1）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の淘汰の良い無層理の黄色粗粒火山灰層（層厚19cm）と上部の層理が発達した黄灰色火砕流堆積物からなる。ただし、この火砕流堆積物は火山砂質で、その中にはほとんどの粒子は認められない。

(2) B区南壁

B区南壁では、下位より黄色軽石混じり橙色砂質火砕流堆積物（層厚41cm以上、軽石の最大径7mm）、角礫を多く含む橙色砂質火山灰層（層厚28cm）、灰褐色土（層厚5cm以上）が認められる（図2）。火砕流堆積物には層位は認められないものの、その層位などから、A区南壁の火砕流堆積物と同じものと考えられる。

(3) B区北壁

B区北壁では、下位より黄橙色細粒火山灰層（層厚5cm以上）、灰褐色土（層厚5cm）、黒色土（層厚10cm）、黄白粗粒火山灰混じり黒灰褐色土（層厚21cm）、暗灰褐色土（層厚9cm）、若干色調が暗い褐色土（層厚11cm）、成層したテフラ層（層厚4cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚8cm）、暗灰褐色土（層厚5cm以上）が認められる（図3）。これらのうち、最下位の黄橙色細粒火山灰層は、層相から約6,300年前^{**}に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 町田・新井, 1978）に同定される。また成層したテフラ層は、下部の白色細粒火山灰層（層厚3cm、軽石の最大径5mm、石質岩片の最大径2mm）と上部の白色細粒火山灰層（層厚1cm）からなる。

(4) C区1号試掘トレンチ

C区1号試掘トレンチでは、下位より黒灰褐色土（層厚28cm以上）、黄色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚15cm）、暗灰褐色土（層厚9cm）、成層したテフラ層（層厚14cm）、暗灰褐色土（層厚32cm）からなる（図4）。これらのうち、成層したテフラ層は、下位から褐色火山豆石層（層厚2cm、火山豆石の最大径3mm）、橙色軽石層（層厚2cm、軽石の最大径2mm、石質岩片の最大径1mm）、黄橙色細粒火山灰層（層厚10cm）からなる。このテフラ層は、その層相からK-Ahに同定される。

(5) C区排水溝跡

C区排水溝跡では、下位より黒灰色土（層厚10cm以上）、成層したテフラ層（層厚20cm）、暗灰褐色土（層厚8cm）、黒色土（層厚18cm）、細粒の黄色軽石に富む黒灰褐色土（層厚17cm、軽石の最大径3mm）、細粒の黄色軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚15cm、軽石の最大径3mm）が認められる（図5）。これらのうち、成層したテフラ層は、下部の火山豆石混じり橙色軽石層（層厚3cm、軽石の最大径3mm、火山豆石の最大径3mm）、黄橙色細粒火山灰層（層厚17cm）からなる。このテフラ層は、その層相からK-Ahに同定される。

(6) C区第1トレンチ

C区第1トレンチでは、下位より角礫混じり橙色砂質火山灰層（層厚5cm以上）、黄褐色土（層厚10cm）、褐色土（層厚38cm）、暗灰褐色土（層厚24cm）、褐色土（層厚11cm）、褐色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚11cm）が認められる（図6）。これらのうち下位の褐色土からは縄文時代早期、その上位の暗灰褐色土からは縄文時代後期の遺物が各々検出されている。

(7) C区西壁

C区西壁では、下位より褐色土（層厚14cm以上）、暗灰褐色土（層厚4cm）、褐色粗粒火山灰混じり黒灰褐色土（層厚13cm）、白色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚9cm）、白色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚11cm）、暗褐色表土（層厚29cm）が認められる（図7）。これらのうち最下位の褐色土からは、古代の遺物が検出されている。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

B区北壁、C区1号試掘トレンチ、C区第1トレンチ、C区西壁の4地点で採取された試料のうち、17点について、テフラ検出分析を行って示標テフラの降灰履歴を求めるにした。テフラ検出分析の手順は次の通りである。

1) 試料10gを秤量。

2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。

3) 80°Cで恒温乾燥。

4) 粒度顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

B区北壁では、試料7と試料5に、白色軽石（最大径1.7mm）が少量ずつ含まれている。試料3には、暗褐色スコリア（最大径1.6mm）が少量含まれている。さらに試料1のテフラ層には、黄白色軽石（最大径3.4mm）が、とくに多く含まれている。火山ガラスとしては、試料7、5、3に、無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスが、少量ずつ含まれている。

C区1号試掘トレンチの試料2では、軽石やスコリアは認められず、無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスが少量含まれている。C区第1トレンチでは、いずれの試料からも無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスが多く検出される。

C区西壁では、試料2に暗褐色スコリア（最大径2.9mm）が比較的多く含まれている。また試料1のテフラ層には、白色軽石（最大径2.8mm）が、多く含まれている。火山ガラスは、全体として下位の試料ほど多く含まれる傾向がある。これらの試料に含まれる火山ガラスはバブル型で、色調は無色透明、淡褐色、褐色である。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

A区南壁、C区1号試掘トレンチ、C区排水溝跡、C区第1トレンチの4地点で採取された5試料について屈折率測定を行い、示標テフラとの同定の精度を向上させることにした。測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972, 1993）による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。A区南壁の試料2には、黄白色軽石（最大径5mm）が多く含まれている。火山ガラ

スの屈折率 (n) は、1.500-1.504である。重鉱物としては、斜方輝石のほか、ごく少量の单斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.725-1.732 (modal range: 1.727-1.730) である。この試料には、高温輝石英が多く含まれている。C 区 1 号試掘トレンチの試料 3 に含まれる火山ガラス (n) の屈折率は、1.497-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.709-1.713である。

C 区排水溝跡の試料 1 には、灰色や黄色の細粒輕石（最大径 2 mm）が多く含まれている。火山ガラスの屈折率 (n) は、1.508-1.511である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.725-1.730である。

C 区第 1 トレンチの試料 13 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.497-1.501である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.728-1.733である。また試料 7 に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.498-1.501 (modal range: 1.499-1.500) である。重鉱物としては、斜方輝石や单斜輝石が認められる。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.727-1.733である。

5. 考察

(1) 示標テフラとの同定

A 区南壁の試料 2 のテフラ層テフラは、高温輝石英を多く含むこと、重鉱物の組み合わせ（とくに单斜輝石をわずかしか含まないこと）、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、始良大塚テフラ（A-Ot, Nagaoka, 1988）など、約 2.4~2.5 万年前¹⁾に始良カルデラから噴出した始良入戸火碎流堆積物（A-Ito, 荒牧, 1969, 町田・新井, 1976, 1992, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995）より下位の始良火山起源のテフラに由来すると考えられる。始良カルデラ起源のテフラの中では、給源から北西方向を中心に分布している、A-Ot の可能性がもっとも高いと思われる。試料 1 とその上位のテフラ層は、その層相などから、A-Ito に同定される。以上のことから、K-Ah より下位にある B 区南壁の橙色砂質火山灰層についても、A-Ito と考えられる。

なお試料 1 の粗粒火山灰については、一連のテフラ層の中の始良大塚輝石層（A-Os, 荒牧, 1965, 町田・新井, 1992）に同定され可能性もある。

K-Ah より下位にある C 区 1 号試掘トレンチの試料 2 に含まれる火山ガラスについては、屈折率などから A-Ito あるいはそれに伴う始良 Tn 火山灰（AT, 町田・新井, 1976）に由来すると考えられる。斜方輝石については、屈折率から約 7,400~8,300 年前¹⁾に霧島火山から噴出した霧島嫁坂輕石（Sz-Ym, 早田, 1997）に由来する可能性が高い。試料 2 からは、A-Ito あるいはそれに伴う始良 Tn 火山灰（AT, 町田・新井, 1976）以外のテフラ粒子は、とくに検出されなかった。

C 区排水溝跡において K-Ah より上位の試料 1 に含まれるテフラ、その層位や重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガラスや斜方輝石の屈折率などから、約 4,200 年前¹⁾に霧島火山から噴出した霧島御池輕石（Kr-M, 町田・新井, 1992, 早田, 1997）に由来すると考えられる。C 区西壁における古代の遺物包含層は、この Kr-ThS より下位にある。

B 区北壁の試料 3、C 区西壁の試料 2、さらに C 区第 1 トレンチの最上部の上層に含まれる暗褐色スコリアについては、その岩相から 10~13 世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS, 井ノ上, 1988, 早田, 1997）に由来すると考えられる。C 区西壁における古代の遺物包含層は、この Kr-ThS より下位にある。

また B 区北壁の試料 1 の成層したテフラ層や、C 区西壁の試料 1 に多く含まれる白色輕石の起源については、1471（文明 3）年に桜島火山から噴出した桜島 3 テフラ（Sz-3, 小林, 1986, 町田・新井, 1992）と考えられる。

なお、縄文時代早期の包含層である、C 区第 1 トレンチの最下部（試料 13）や中部（試料 9）に含まれる火山ガラスや斜方輝石は、屈折率から A-Ito あるいは AT に由来すると考えられ、K-Ah の混在は認められなかった。このことから、縄文時代早期の遺物包含層については、AT より上位にあり、K-Ah より下位にあると考えられる。

6. まとめ

本野原遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より始良大塚テフラ（A-Ot）、始良入戸火碎流堆積物（A-Ito, 約 2.4~2.5 万年前¹⁾）、霧島嫁坂輕石（Sz-Ym, 約 7,400~8,300 年前¹⁾）、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah, 約 6,300 年前¹⁾）、霧島御池輕石（Kr-M, 約 4,200 年前¹⁾）、霧島高原スコリア（Kr-ThS, 10~13 世

紀)、桜島3テフラ(Sz-3, 1471年)などを検出することができた。そして、発掘調査で検出された路面状遺構の層位は、Kr-ThSの上下にある可能性が考えられた。

* 1 放射性炭素 (^{14}C) 年代

文献

- 新井房夫 (1972) 銀方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 溫度一定型開折率測定法、日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」, p.138-149.
- 荒牧重雄 (1969) 鹿児島県国分地域の地質と火砕流堆積物、地質録, 75, p.425-442.
- 伊田一善・木島公司・安岡昇 (1956) 宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告、地調報告, no.168, p.1-44.
- 池田光子・奥野光・中村俊夫・小林哲夫 (1995) 南九州、姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入江火砕流中の炭化樹木の加速器 ^{14}C 年代、第四紀研究, 34, p.377-379.
- 川ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史、岩歴, 83, p.26-41.
- 小林哲夫 (1986) 桜島火山の形成史と火砕流、文部省科学研究自然災害特別研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(研究代表者 荒牧重雄), p.137-163.
- 町田洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義、科学, 46, p.339-347.
- 町田洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰、第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス、東京大学出版会, 276p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 姶良Tn火山灰(AT)の ^{14}C 年代、第四紀研究, 26, p.79-83.
- Naganaka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geog. Rept., Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122.
- 早田勉 (1997) 火山灰と土塚の形成、宮崎県史通史編1, p.33-77.

表1 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
B区北壁	1	++++	白	3.4	-	-	-
	3	+	暗褐	1.6	+	bw	透明, 淡褐, 褐
	5	+	白	1.3	+	bw	透明, 淡褐, 褐
	7	+	白	1.7	+	bw	透明, 淡褐, 褐
C区1号試掘トレンチ	2	-	-	-	+	bw	透明, 淡褐, 褐
C区第1トレンチ	1	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	3	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	5	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	7	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	9	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	11	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	13	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	15	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐
	1	+++	白	2.8	+	bw	透明, 淡褐, 褐
	2	++	暗褐	2.9	++	bw	透明, 淡褐, 褐
C区西壁	3	-	-	-	++	bw	透明, 淡褐, 褐
	4	-	-	-	+++	bw	透明, 淡褐, 褐

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, -:認められない。最大径の単位は, mm. bw:バブル型, pm:軽石型。

表2 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)
A区南壁	2	1.500-1.504	opx, (cpx)	1.725-1.732 (1.727-1.730)
C区1号試掘トレンチ	3	1.497-1.501	opx>cpx	1.709-1.713
C区排水溝跡	1	1.508-1.511	opx>cpx	1.725-1.730
C区第1トレンチ	7	1.498-1.501 (1.499-1.500)	opx>cpx	1.727-1.733
C区第1トレンチ	13	1.497-1.501	opx>cpx	1.728-1.733

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井, 1972, 1993）による。opx:斜方輝石, cpx:单斜輝石, ()は量が少ないことを示す。屈折率の()は, modal range。

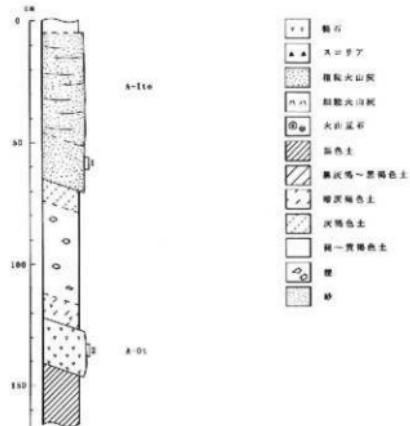


図1 A区南壁の土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

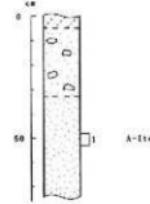


図2 日向南壁の土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

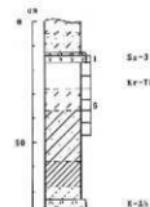


図3 B区北壁の土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

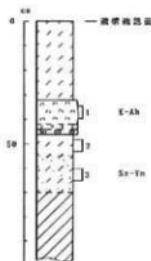


図4 C区1号気瓶トレンチの土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

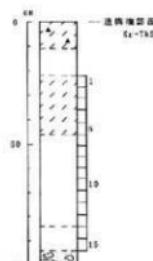


図5 C区第1トレンチの土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

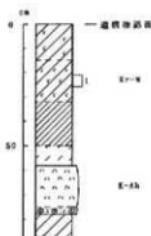


図6 C区水道敷の土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

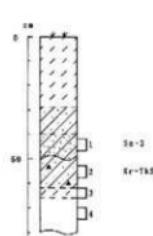


図7 C区南壁の土壤柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

II. 本野原遺跡における放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No 1	SC-165	炭化物	酸・アルカリ・酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析(AMS)法

2. 測定結果

試料名	^{14}C 年代 (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年BP)	暦年代(西暦)	測定No (IAAA-)
No 1	3580 ± 30	-25.0	3580 ± 30	交点: cal BC 1920 1 σ : cal BC 1955~1885, 1835~1835 2 σ : cal BC 2025~1995, 1980~1880 : cal BC 1840~1825, 1790~1785	10613

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(1950年AD)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例により Libby の 5,568 年を用いた。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴの U-Th 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは、約 19,000 年 BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ (68%確率)・ 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。

3. 考察

加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定の結果、試料 No 1 (SC-165 の炭化物) では $3,580 \pm 30$ yBP (暦年代交点で BC1920 年頃) の年代値が得られた。なお、放射性炭素年代測定値よりも暦年代の年代幅が大きくなっているが、これは該当時期の暦年代較正曲線が不安定なためである。

文献

Stuiver, M., et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40(3).

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

第2節 田野町、本野原遺跡における放射性炭素年代測定結果

1. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No 1	確認B トレンチ, 表面	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 2	確認B トレンチ, № 1	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 3	確認B トレンチ, № 3	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 4	確認B トレンチ, № 6	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 5	C区窪地底面, № 1	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS
No 6	C区窪地底面, № 3	土器付着炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄, 石墨調整	AMS

* AMSは加速器質量分析法: Accelerator Mass Spectrometry.

2. 測定結果

試料名	測定No (Beta-)	¹⁴ C年代 (年BP)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	曆年代(西暦)
No 1	188156	2680 ± 40	-26.2	2660 ± 40	交点: cal BC 815 2 σ: cal BC 830~805 2 σ: cal BC 885~790
No 2	188157	3070 ± 40	-26.4	3050 ± 40	交点: cal BC 1305 2 σ: cal BC 1390~1270 2 σ: cal BC 1410~1205
No 3	188158	3030 ± 40	-25.2	3030 ± 40	交点: cal BC 1290 2 σ: cal BC 1375~1245 2 σ: cal BC 1400~1140
No 4	188159	3160 ± 40	-25.9	3150 ± 40	交点: cal BC 1420 2 σ: cal BC 1445~1400 2 σ: cal BC 1505~1375
No 5	188160	3340 ± 40	-24.9	3340 ± 40	交点: cal BC 1625 2 σ: cal BC 1680~1540 2 σ: cal BC 1725~1520
No 6	188161	3380 ± 40	-25.8	3370 ± 40	交点: cal BC 1670 2 σ: cal BC 1700~1620 2 σ: cal BC 1745~1535

(1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

(2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。

(3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。

(4) 历年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代 (西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。歴年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と歴年代較正曲線との交点の歴年代値を意味する。 1σ (68%確率) と 2σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した歴年代の幅を示す。

3. 所見

加速器質量分析法による放射性炭素年代測定の結果、No 1 の土器付着炭化物では 2660 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC885~790年)、No 2 では 3050 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC1410~1205年)、No 3 では 3030 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC1400~1140年)、No 4 では 3150 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC1505~1375年)、No 5 では 3340 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC1725~1520年)、No 6 では 3370 ± 40 年BP (2σ の歴年代でBC1745~1535年) の年代値が得られた。

文献

Stuiver, M. et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36.

*編集補足

ここで記した確認「Bトレンド」とは、範囲確認トレンドのT 2のことである。分析を行うにあたって、1は黒川式期に相当する鉢形土器を、2~4は工具ミガキの行われた無文土器を抽出した。一方、5、6のC区窪地底面の土器は、どちらも納曾3式である。

第X章 総 括

第1節 生業について

石器は、石鏃と打製石斧が少ない一方で、磨製石斧・磨石・敲打器・石皿が比較的多いことから、狩獵や根茎類の獲得より、堅果類等の植物質食糧の採集に依存した生業形態が類推される。採集された堅果類の多くはイチイガシ属を主体とするドングリであった（小畠弘己・坂元紀乃・大坪志子 2003）。他には、石錘や軽石製品の出土から、漁撈も加えられるだろう。土器底面にシジミ類の圧痕を持つ土器も存在する事から、沿岸部の集落との交易により、貝類も獲得していたようである。ただし先に述べたように、磨石や石錘、軽石製品は他の用途も検討されていることから、出土量から生業を考察するのは慎重にせねばならないだろう。

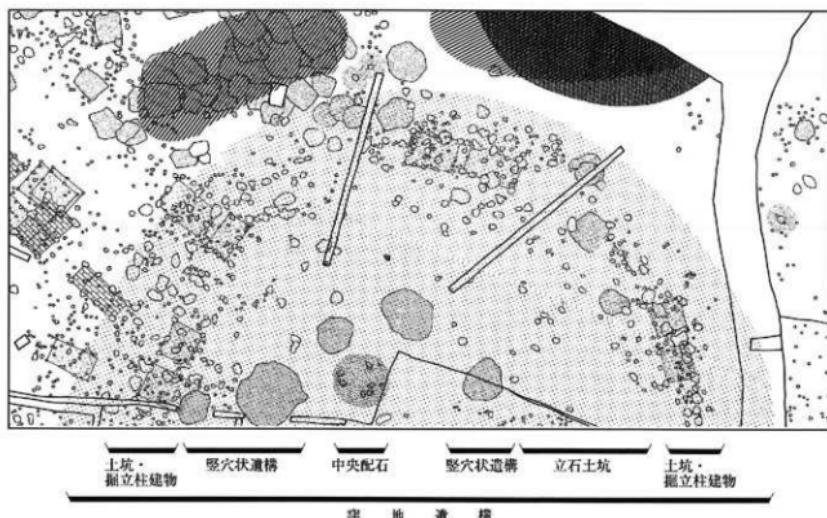
石器の出土量は、集落の存続期間を考慮すると貧弱である。九州では、縄文中期から後期前半の石器出土量は極めて貧弱であるため、本野原遺跡はその傾向を反映しているともいえよう。剥片石器のうち、周辺で採取可能なホルンフェルス類は、不作為の打撃を行った剥片が調査区内から一定量出土したことから、原産及び石核段階で持ち込まれたと考えられる。ただしこの石材は、製品の使用頻度は低い。製品の使用頻度が高い黒曜石は、剥片は少量であるが、碎片が多く出土した土坑が存在することから、恐らく剥片単位で持ち込まれ、集落内で製品に加工されたのであろう。難石器である磨石は、尾鈴産は遠隔地から交易によりもたらされ、砂岩製は近隣で採取され、直接持ち込まれたと考えられる。石錘に用いられる扁平鍤は、近隣より採取可能である。興味深いのは石斧であり、原石となる砂岩は近隣で採取可能にも関わらず、欠損してもそのまま廃棄せず、刃部再生や、敲打器等、別の器種に転用したものが多く認められた。これは、集落内で石斧製作が殆ど行われなかったことを示している。以上を総括すると、本野原遺跡は、石器の「消費地」であったことが窺える。

第2節 遺構について

まず注目されるのは、近年、関東地方で研究が急速に進んだ大土木工事である。この遺構は、九州でも10箇所前後の確認例があり、更に西日本一帯で増加する可能性も併んでいるが（金丸 2005）、大土木工事の全容が復元できた事例に乏しく、盛土部分の形成過程に有効な情報が提供できる事例はほんと皆無である。ただし、本遺跡の竪穴造構において、中央配石→竪穴状造構→立石→環状掘立柱建物群・土坑群の順に、同心円状の造構配置を確認できたことは大きな成果と言えよう。なお、竪穴住居最盛期の後期前業段階における竪穴住居の分布は、竪穴造構東側に集中するが、西側は、調査区域が限られていたために、竪穴住居は確認されているものの、分布域や存続期間は不明である。故に、本野原遺跡が環状集落であったかという問題は、ひとまず保留としたい。

掘立柱建物群は、調査区の北側に列状、南側に環状に展開する。列状掘立柱建物群は、南北方向に延びる尾根沿いに展開しており、後期前業の5期を最盛期とする。この時期は竪穴住居の最盛期でもある。列状掘立柱建物群、中でもA列は、内部構造や柱穴が不明なものが多い竪穴住居とは異なる性格の構造物と言える。竪穴住居よりも一際高い尾根沿いに建てられたことも特徴であろう。一方、環状掘立柱建物群に相当する8・9期は、竪穴住居の存在は確認されていないため、居住施設は不明である。そのため、掘立柱建物群の用途を考察するにあたっては、居住施設である可能性も含める必要がある。なお、掘立柱建物は、検出造構で述べたような柱穴サイズの問題が残されている。この細い柱穴で築造は可能なのか、使用に耐えうるのか、実験も含めた検討を深めねばならないだろう。

検出造構は、東日本と同様のあるものが多い。しかし、明確に異なる点も存在する。第一に、竪穴住居の内部構造である。殆どは、柱穴、床、壁が分かり辛く、九州の縄文後期では一般的な、至って簡素な竪穴住居である。第二に、墓坑の少なさが挙げられる。明確な墓坑は数基に留まっており、袋状土坑が墓坑であったとしても10基足らざる追加されるに過ぎない。これは、集落規模とはあまりにも大きな聞きがあり、東日本の一般的な集落遺跡のあり方とはかけ離れている。



第65図 本野原遺跡の環状構造

環状集落で墓域になることが多い広場の中心部付近には、立石土坑が分布するが、大部分は浅く、土葬は不可能である。類似点と共に、こうした相違点も認識せねばならないだろう。

第3節 精神文化について

メンコや小形石棒は、南九州では後期初頭～前葉に卓越する。竪穴住居から出土するノジュールは、縄文後期としては本遺跡特有の石器と言える。更に、穿孔を伴う鍊は、人為的に空けたものは技術が稚拙であり、多くは自然に空いたホルンフェルスを利用するものが多い。一方土製品は、土製陶輪、大頭形土製品が出土したが、これらは九州内に類例がなく、極めて貴重な出土例と言える。以上を総括すると、「第二の道具」のうち、土製品は、遠隔地からの情報を窺わせる遺物は出土したものの数は少ない。一方石製品は、在地性が強い構成となっている。

なお、後期後葉～末葉にあたる遺跡範囲確認トレンチからは、管玉、小玉が出土する。県内の状況を見ると（藤木晶子 2005）、この時期は周辺から黑色磨研土器と共に装身具が顕著に流入しており、本遺跡もその傾向を反映したと考えられる。

第4節 まとめと課題

本野原遺跡からは、多くの遺構が検出された。竪穴住居は、数軒の例外を除くと、内部構造の貧弱な、九州で通常認められる縄文後期の竪穴住居そのものである。しかし、中央土坑二本柱を伴う内部構造は、縄文後期以前の九州には認められず、むしろ瀬戸内の中期末葉に多く分布する。また、軒数は113軒に上り、その多くは縄文後期前葉とされている。同時期、東南九州では、他にも仲野原遺跡（25軒）、三幸ヶ野遺跡（50軒）、丸野第2遺跡（31軒）、石河内本村遺跡（56軒）と、大規模な集落が次々に登場しており、九州の縄文中期集落における軒数、例えば上田代遺跡（10軒）、ニッ山第3遺

跡（5軒）、松山遺跡（3軒）、岩立遺跡（2軒）、前谷遺跡（5軒）、九口田遺跡（4軒）をはるかに凌駕する。遺跡数も、1遺跡における遺物の出土量も、縄文後期になり一気に増大するため、堅穴住居数の増加は、単なる居住形態の変化だけでは説明できない。よって、本野原遺跡の集落構成員については、九州に固定して居住していた集団と限定せず、今後、広い視野に立て分布の推移を見極める必要があろう。

また、大土木工事、中央配石、立石土坑、環状、及び列状の掘立柱建物群、袋状土坑は、九州では縄文後期以前に確認されておらず、九州の縄文文化を土台として築かれたという解釈は、少なくとも現時点では不可能である。ましてや、それらの遺構による環状構造が、九州で自生したという認識は、極めて無理があろう。

東北地方では、環状掘立柱建物群は中期まで通り、後期前葉に関東地方へ拡散するとされている（石井 1998, 2004）。また、九州で大土木工事が行われるようになった縄文後期は、磨消縄文土器の伝播に伴い、広域のコミュニケーション・システムが成立していたとの指摘もある（川田・松永 1984）。本野原遺跡の検出遺構は、こうした広域の情報交流圈の拡大化によって成立したと見るのが妥当であろう。つまり、縄文後期に西日本に伝播する「東日本の文化複合体」は、遺物のみならず、遺構にも及んでいたと考えられる。

一方、出土遺物の様相は対称的である。たしかに特殊な遺物も出土するが、大半は土器や石皿など、日常生活を行う上の道具であり、装飾品の類も、周辺遺跡と比較して際立つことが多いとはいえない。これは、本野原遺跡が特殊な性格を担った集落ではなく、普遍性を伴った集落の営みの中で存在したこと示している。

ともあれ、本野原遺跡の成果は、九州ではそれまで関心の低かった文化動態について、新たな概念と研究の必要性を提起したと言える。しかし、広域の交流がどのレベルで行われたのか、また、他地域からのインパクトが、九州内でどのように変容したのか、これから解明すべき点も多い。それだけに、多くの課題も提起した遺跡とも言えよう。

参考文献

〈論文〉

- 秋元信夫 1989 「環状列石と埴物跡－大湯環状列石近傍に分布する埴物跡の分析－」『よねしろ考古』第6号
- 2005 「右にこめた純文人の祈り－大湯環状列石」シリーズ「遺跡を学ぶ」017
- 阿部芳郎 2005 「遺丘集落」の類型化と遺跡群－「環状盛土遺構」研究の到達点－子稿集
- 阿部芳郎・金精文夫・高橋龍三郎・鶴東豈二 2003 「討論」下総台地の地域社会。「縄文社会を掘る」
- 阿部芳郎ほか 2004 「縄文時代後・晩期における谷类型遺丘集落の研究－千葉県佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査方法を考える－」『鹿台史学』122号
- 2005 「山輪ノ内貝塚発掘調査会の記録」『考古学雑刊』特別号
- 雨宮編生 1993 「温帯森林の初期定住－縄文時代初頭の南九州を取り上げて－」『古文化談叢』第30集(下)
- 荒木隆宏 2003 「阿高式土器の細分と幅年」『先史学・考古学論究』IV
- 池田耕生 1998 「縄文時代前期末～中期初頭における土器の展開－中九州を中心として－」『肥後考古』第11号
- 石井 寛 1989 「縄文集落と掘立柱建物跡」「調査研究収録」第6号
- 1993 「I. 堀之内1式期上器群に関する問題」
「十ヶ谷遺跡 幸藏古南遺跡 湘北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告書XIV」
- 1995a 「川和向原遺跡・原出口遺跡の縄文時代後期聚落」
「川和向原遺跡・原出口遺跡 湘北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIX」
- 1995b 「縄文時代掘立柱建物に関する諸論議」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』
- 1998 「第五章 縄文集落と掘立柱建物跡」「先史日本の住居とその周辺」
- 1999a 「遺構研究 大形住居址と大形建物跡」「縄文時代」第10号
- 1999b 「遺構研究 掘立柱建物」「縄文時代」第10号
- 2004 「後晩期環状配列掘立柱建物を基に－東北地方北部を中心に－」『縄文時代』第15号
- 泉 承良 1985 「縄文集落の地域的特質－近畿地方の事例研究－」「講究考古地理学」第4巻
- 大崩徹夫 2001 「西南圏の縄文形式研究の現状と問題点－三里式上器と平城式上器・その系統性－」「古代吉備」第23集
- 江原 英 1999 「守野本遺跡環状盛土遺構の類例」「研究紀要」第7号
- 2001 「環状貝塚・環状盛土遺構」「縄文時代集系の現状」
- 2005 「守野東遺跡の形成と『環状盛土遺構』」「環状盛土遺構」研究の到達点 子稿集
- 小川勝利・小栗信一郎 2003 「遺跡速報」三輪山貝塚」「考古学ジャーナル」509
- 可見直典 2001 「深浦式(系)から春日式の型式変化－埴文上器における広域化と地域分化の一類型－」
「平成13年度宮崎縄文研究会発表資料」
- 小畠弘己・坂元紀乃・大坪志子 2003 「考古学者のためのドングリ識別法」「先史学・考古学論究」IV
- 上村俊雄・本田道輝 1978 「西之表市納曾遺跡」「鹿児島考古」第12号
- 金子昭彦 2005 「階層化社会と袋状軸用器－縄文時代晩期の東北地方北部の様相－」「縄文時代」第16号
- 金丸武司 2005 「九州における縄文の大土木工事」「南九州縄文通報」No.15
2006 「縄文後期遺跡における斜面堆積の再検討」「大河」第8号
- 河口真徳 1962 「草野貝塚発掘報告」「鹿児島県考古学会紀要」第1号
1953 「南九州における縄文式文化の研究 岩輪及び木ヶ暮遺跡について」「鹿児島縣考古學會紀要第3号」
- 1955 「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」「鹿児島縣考古學會紀要」第4号
1955 「9. 鹿児島のおいたち－先史時代－」「鹿児島のおいたち」
- 1957 「南九州後期の縄文式土器－市来式上器－」「考古学雑誌」第42卷2号

- 木村剛則 1995 「四国西南沿岸部の先史文化」
- 清田純一 1998 「縄文後・晚期土器考 - 中九州の縄文後・晚期土器とその併行型式について - 」『肥後考古』第11号
- 黒川忠広 2005 「指宿式土器の色調から見た交流の断片」『縄文の森から』第3号
- 森道光博 1989a 「東南諸九州におけるある縄文土器の型式類別 - 中岳II式土器の再検討 - 」『鹿児島考古』第23号
- 1989b 「宮崎県の縄文時代研究史 - 研究の現状と課題 - 」『宮崎考古』石川恒太郎先生米寿記念特集号
- 1993 「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」『鹿児島考古』第27号
- 1999 「平野遺跡の再検討(1) - 縄文後・晚期土器の編年 - 」『宮崎縄文研究会資料』
- 寺森満夫 2001 「西日本縄文後期土器組成論 - 薩摩内地方における沈銚文系土器に関する研究 - 」『考古学研究』第48卷3号
- 合田恵美子 2001 「袋状土坑における甕形成過程の復元 - 土器出土状況の分析を中心として - 」『研究紀要』第9号
- 後藤見一 2004 「縄文時代後期の東北部九州 - 縄文後期後半の土期編年 - 」『考古論集(河原正利先生追記記念論文集)』
- 小島朋夏・小林克 2001a 「秋田県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』
- 2001b 「非環状集落」『列島における縄文時代集落の諸様相』
- 小林久雄 1939 「九州の縄文土器」『人類学・先史学講座』第11巻
- 坂本嘉弘 1994 「壺から壺形へ - 九州縄文壺形考 - 」『古文化談叢』第32集
- 佐々木藤新 2002 「壺状列石と縄文式階層化社会 - 中・後期の中部・関東・東北 - 」『縄文社会論』(下)
- 下山 貴 2000 「いわゆる「松添式土器」の評価をめぐって - 南部九州の資料を用いて - 」『九州旧石器』第4号
- 新東見一 1988 「入門講座 縄文土器 - 九州地方 南九州(2) - 」『考古学ジャーナル』No. 296
- 菅村和樹 1985a 「4・包含層の遺物」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
- 1985b 「1・貝紋系土器群について - X-XIV区出土土器を中心に - 」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
- 鈴木重治 1968 「宮崎県宮崎郡田野町青木遺跡」『日本考古学年報』16
- 鈴木正博 2005 「所謂「環状盛土遺構」研究と馬場小室山遺蹟」「環状盛土遺構」研究の到達点 予稿集」
- 瀬口良司 2005 「西東地方の縄文集落とその規模 - 小規模性への理解 - 」『西日本縄文文化の特徴』
- 瀬戸口望 1984 「津井谷遺跡」「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書」(6)
- 高橋信武 2004 「西川津式と舟式土器の関係」『山下秀穂氏追悼考古論集』
- 田中熊雄 1962 「被町尾尾遺跡の研究1・2」「宮崎大学学芸学部紀要」13-14
- 田中良之 1979 「中期・高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集
- 1981 「阿高式土器」「縄文文化の研究」第4卷
- 谷山康浩 2002 「環状集落と部族社会」「縄文社会論」(七)
- 千葉 豊 2005 「西日本縄文後期土器研究の現状と課題」『縄文時代』第16号
- 寺師見岡 1943 「鹿児島縣下の縄文式土器分類及び出土造形表」
- 徳永貞躬 1994 「並木式土器の成立とその前夜」「幸田祐二君追悼集」
- 冨井 真 2000 「近畿・中国・四国地方の縄文住居の概要」「第10回 九州縄文研究会 福岡大会 九州の縄文住居」
- 2001 「西日本縄文土器と並木式土器の評価 - 阿高式・中津式との関係 - 」『古文化談叢』第47集
- 2004 「西中國～九州地方」「第15回 中四国縄文研究会」発表資料集
- 富田祐一 1983 「太郎追遺跡の縄文土器(1)」「肥後考古」第4号
- 1987 「太郎追遺跡の縄文土器(2)」「肥後考古」第6号
- 1996 「北久根山」
- 長岡史起 1999 「遺構研究 貯藏穴」「縄文時代」第10号
- 秦 広之 2000 「コウゴー松式土器に関する覚書」「おおいた考古」第13集
- 浜田耕作・島田貞彦 1921 「薩摩國指宿土器包含層調査報告」「京都帝國大學文學部考古學研究所報告」第六編
- 林 謙作 2004 「第8章 縄文人の集落」「縄文時代史Ⅱ」
- 林 潤也 2002 「北久根山式土器をめぐる諸問題」「大刀削大先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学」

- 黒崎正幸 2003 「遺跡と遺跡－南九州の縄文時代早期を土として－」『研究紀要 縄文の森から』創刊号
- 東 和幸 1989 「春日式土器の類型別列」『鹿児島考古』第23号
- 1991 「鹿児島県における縄文中期の様相」『南九州縄文通信』No. 5
- 1994 「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』No.8
- 1999 「九州地方 中期（春日式）」『縄文時代』第10号
- 深田 浩 2001 「下山遺跡」「三瓶山周辺の縄文遺跡」第12回 中四国縄文研究会
- 藤木晶子 2005 「宮崎県の縄文時代装身具」『第15回 九州縄文研究会 沖縄大会 九州の縄文時代装身具』
- 藤木 啓 2003 「宮崎県域の鍛具の変遷と分布」「先史学・考古学論究 IV」
- 2005a 「宮崎県域における縄文時代の石斧製作と石材」『Stone Sources』No.5
- 2005b 「宮崎県域における蛇紋岩製石斧」『Stone Sources』No.5
- 北部泰道 1985 「2・縄文晚期土器について 一作店跡出土土器を中心に」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第2集
- 木下道輝 1983 「田中塙遺跡出土の山脚部上而方形の土器について」『慶大史学』31
- 1989 「市来・一ノ瀬式土器様式」『縄文土器大観』第4巻
- 1991 「市来式土器研究史」『鹿児島考古』第25号
- 細越正行 1995 「中央高地型馬蹄形貝塚の発地と高まり覚書」「史館』第26号
- 2005a 「縄文の社会構造をのぞく 越山貝塚」「シリーズ「遺跡を学ぶ」』019
- 2005b 「中央高地型貝塚と下総台地の『盛土遺構』」「『環状盛土遺構』研究の到達点 予稿集』
- 前川威洋 1966 「九州後期縄文土器の諸問題」
- 前川威洋・乙益重彦 1969 「縄文後期文化－九州－」『新版考古学講座』
- 前庭光一 1991 「縄文時代の豊作居 一施見島本土發見の資料集成－」『南九州縄文通信』No.5
- 1992a 「佐多町採集の縄文土器 一九州東南部における縄文時代後期中葉の一様相－」『阿那考古』第3号
- 1992b 「興糸純土器文化の一接点 一南九州における縄文時代後期中葉の一様相：丸尾式土器の提唱－」『南九州縄文通信』No.6
- 1996 「台付皿形土器の研究に関する覚書」「大河』第6号
- 2002 「南の磨削縄文土器 一干迫塙跡出土土器にみる磨削縄文土器の変遷に関する覚書－」
「大刀散夫先生古稀記念論集 四國とその周辺の考古学」
- 2005 「南の北久根山島式土器」『鹿児島考古』第38号
- 前庭光一・水ノ江和同 2001 「九州地方南部における縄文時代集落の初様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」
- 松永幸男 1989 「上器様式変化の一類型 一縄文時代後期の東南九州地方を事例として－」『横山清一先生追憶記念論集』
- 1994 「考古資料から見た南九州の地域性 一縄文土器を中心として－」『研究紀要』1
- 松本直子 2002 「伝統と変革にゆれる社会 一後・晚期の九州－」『縄文社会論』(下)
- 水ノ江和同 1993 「九州の縄文土器 一九州における縄文後期前・中葉土器研究の現状と課題－」『古文化論叢』30 (上)
- 1997 「北部九州の縄文後・晚期土器 一三万式から刻目突文土器の真前まで－」『縄文時代』第8号
- 2001 「九州地方北部における縄文時代集落の諸様相」「列島における縄文時代集落の諸様相」
- 2002 「九州の縄文集落」「大刀散夫先生古稀記念論集」
- 2005 「九州の縄文後期集落」「西日本縄文文化の特徴」
- 三友国五郎・河口貞徳・国分直一 1953 「薩南諸島の考古学的調査 第1報 種子島北部・屋久島一帯における調査」
『考古学雑誌』第39巻第1号
- 三輪晃二 1996 「九州阿高系・綿帶文系土器群の研究 一縄文中・後期の土器ホライズンの形成とその背景－」
『奈良大学大学院研究年報』創刊号
- 1998 「南九州縄文後期再論 一武貝塚出土土器の位置づけ－」『鹿児島県桜島町式貝塚調査報告書』
- 武藤康弘 1999 「環状集落地域」『季刊考古学』第69号

- 矢野健一 1999 「赤環状集落地域」『季刊考古学』第69号
- 山崎真治 2003 「縄文土器の編年的研究」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部考古学研究室紀要』第18号
- 山崎純男 1975 「九州地方における」『塚研究の諸問題』『九州考古学の諸問題』
- 山本輝久 1978 「縄文中期における作居内一括遺存」『霧群の性格』『神奈川考古』第3号
- 1987 「縄文時代社会と移動 - 「集団移動」論をめぐる研究の現状とその問題点について-」『神奈川考古』第23号
- 吉野健一 2004 「三直貝塚の遺構分布と盛上遺構の断面」『研究速報誌』第65号
- 領塚正浩 2004 「縄文時代の道路跡」『史館』第33号
- 2005 「縄文時代の道路跡 2 - 一関東地方の報告事例を中心として-」『市立市川考古博物館報』第31号
- 渡辺 仁 1990 「縄文式所層化社会」
- 渡辺 城 1965 「縄文土器の様式構造」「あるかいあ」第6号

〈発掘調査報告書〉

(宮崎県)

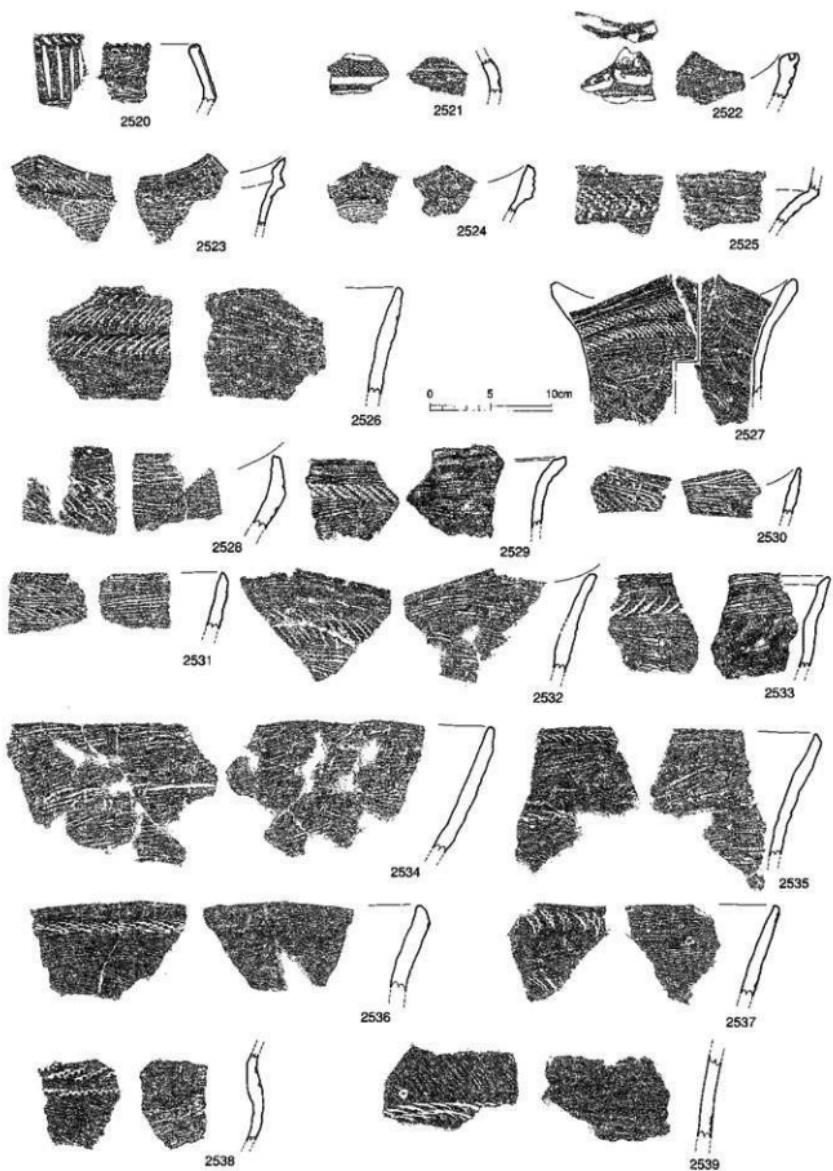
- 宮崎県教育委員会 1985 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」
- 1988 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書」第4集
- 1995 「学園遺跡・八光遺跡」「県道高岡・都司分離道路改良事業に伴う発掘調査報告書」
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000a 「石島ヶ原遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」(21)
- 2000b 「上の原第2遺跡・上の原第1遺跡等」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(25)
- 2000c 「竹ノ内遺跡」「宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書」(27)
- 木城町教育委員会 2000 「石河内本村遺跡」「木城町文化財調査報告書」第6集
- 宮崎市教育委員会 1974 「松添貝塚」「宮崎市文化財調査報告書」第2集
- 1999 「松添貝塚」「宮崎市文化財調査報告書」第37集
- 田野町教育委員会 1990 「丸野第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第11集
- 1999 「小野原遺跡(縄文時代遺物編)」「田野町文化財調査報告書」第32集
- 2000a 「高野原遺跡B・C区(1)(孤立柱建物編)」「田野町文化財調査報告書」第35集
- 2000b 「高野原遺跡(E-G区)」「田野町文化財調査報告書」第36集
- 2001 「元野河内遺跡」「田野町文化財調査報告書」第39集
- 2003 「高野原遺跡B・C区(2)(堅穴住居圓筒・圓版編)」「田野町文化財調査報告書」第45集
- 2004 「本野原遺跡」「田野町文化財調査報告書」第48集
- 2004a 「黒草第2遺跡」「田野町文化財調査報告書」第49集
- 2004b 「高野原遺跡B・C区(4)」「田野町文化財調査報告書」第50集
- 2005 「本野原遺跡-2」「田野町文化財調査報告書」第52集
- えびの市教育委員会 2002 「長江浦地区遺跡群」「えびの市埋蔵文化財調査報告書」第32集
- 中間市教育委員会 1992 「三幸ヶ野遺跡」「中間市文化財調査報告書」第7集
- (鹿児島県)
- 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(24)
- 1989 「中ノ原遺跡(1)(第4分割)」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(48)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 「「迫遺跡」「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書」(22)
- 2005 「桐木耳取遺跡」「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書」(91)
- 鹿児島市教育委員会 1979 「大船遺跡」「鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書」(1)
- 末吉町教育委員会 1980 「中岳洞穴」

- 木吉町教育委員会 1981「宮之迫遺跡」「木吉町文化財調査報告書」2
志布志町教育委員会 1985「中原遺跡」「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書」(9)
市来町教育委員会 1993「川上(市来)貝塚2」「市来町埋蔵文化財発掘調査報告書」(2)
南種子町教育委員会 2002「藤平小田遺跡」「南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書」(9)
(南九州以外)
久住町教育委員会 1974「コウゴー松遺跡調査報告」
福岡県教育委員会 1996「中村石丸遺跡」「椎田道路関係県埋蔵文化財調査報告」第8集
本山町教育委員会 1992「松ノ木遺跡I」「本山町埋蔵文化財調査報告書」第3集
新潟県教育委員会 1991「城之腰遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書」第29集
1992「五丁歩道跡」「二木遺跡」「新潟県埋蔵文化財調査報告書」第57集
朝日村教育委員会 2002「元屋敷遺跡II(上段)」「朝日村文化財報告書」第22集
長野県教育委員会 1982「長野県中央道埋蔵文化財包確認地発掘調査報告書－原村その5－」
小高町教育委員会 2005「浦尻貝塚1」「小高町文化財調査報告」第6集
桶木縣教育委員会 1997「寺野水遺跡V」「桶木縣埋蔵文化財発掘調査報告書」第200集
岩手県教育委員会 1980「東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅳ－」「岩手県埋蔵文化財調査報告書」第51集

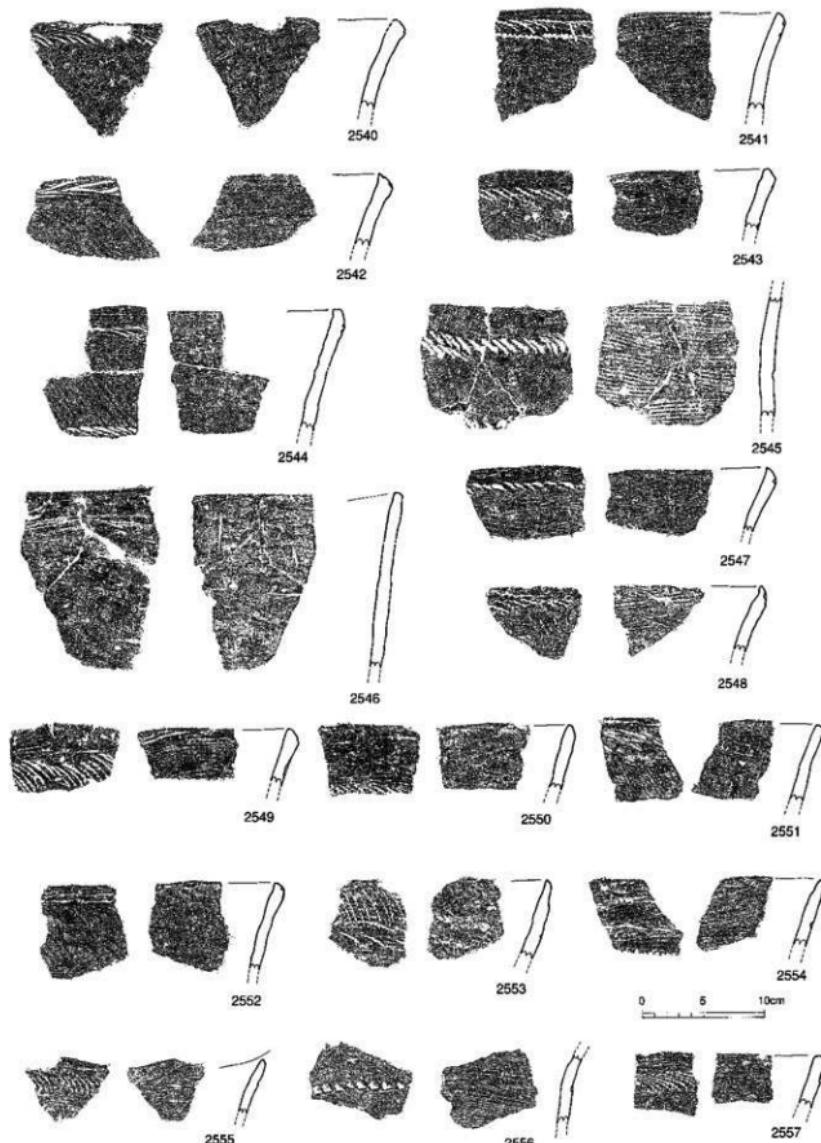
（その他資料集など）

- 宮崎縣 1988「宮崎縣史 資料編 考古！」
宮崎県総合博物館 1987「埋蔵文化財調査研究報告 I 陣内第2遺跡 遺物横穴墓群－遺物編－」
南九州縄文研究会 2002「南九州貝紋文系土器I～宮崎・熊本・大分～」(南九州縄文集成Ⅰ)
2003「南九州貝紋文系土器I～宮崎・熊本・大分～」(南九州縄文集成Ⅱ)
九州縄文研究会 2001「第10回 九州縄文研究会・福岡大会－討論会「九州縄文集落の現状と課題」の記録－」
「第11回 九州縄文研究会・熊本大会 九州の貝塚」
青森県史編さん考古部会 2002「青森県史 別編 三内丸山遺跡」

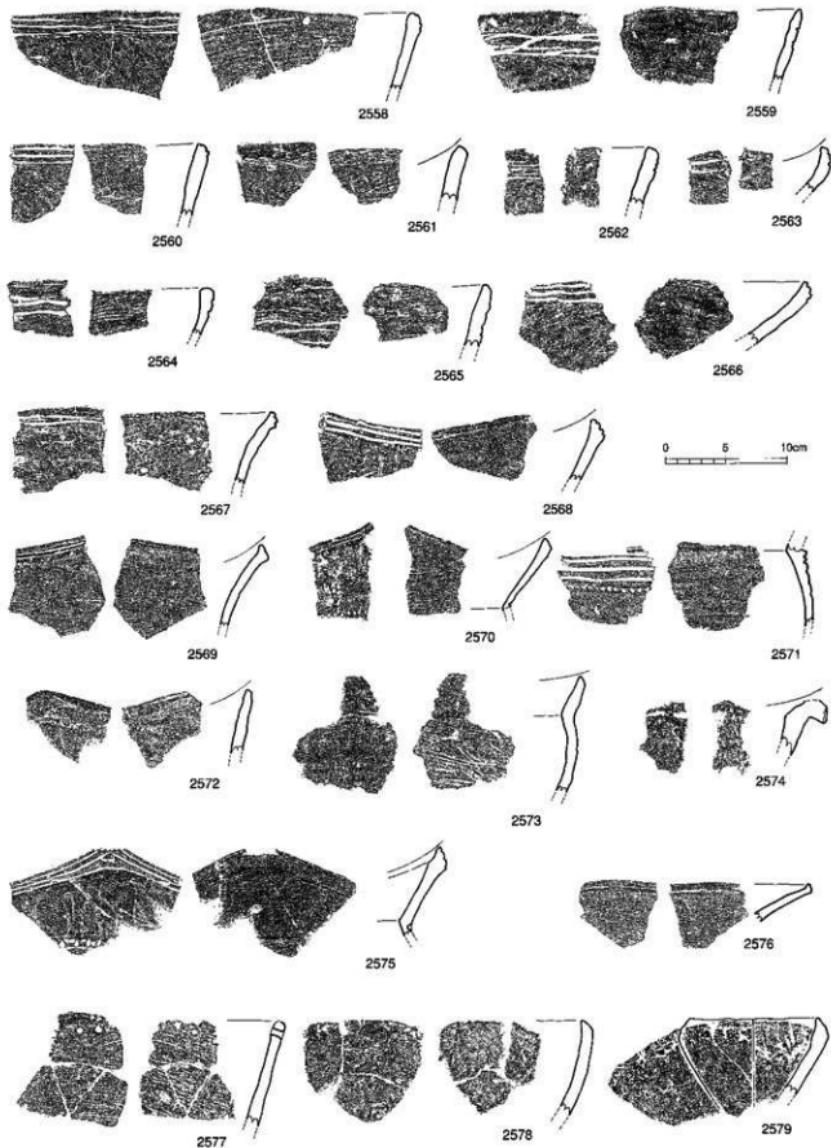
付編 『第52集』 捕遺



第66図 出土遺物実測図（窪地遺構内・その10）



第67図 出土遺物実測図（窪地遺構内・その11）



第68図 出土遺物実測図（窪地遺構内・その12）